

のつかない事はないので、併し太兵衛の様子がどうも一通りではございません、下手な事をいへば自分が一打にされて了ふ、どうして黒田の森太兵衛、迂濶油断は出来ない、薄々知りながら、ツイ其奥方を逃して仕舞った、此お話と同じ様な事が加藤肥後守の方にもあつた、大名土佐が奥方を國へ連れ戻る事となつて居りますが、ここでは黒田の方だけ申上げて置きます。

(第二十五席) 鳥居彦右衛門討死の事、並に關東勢大返し

大阪方では人質で失敗致しましたから、此上は伏見城を乗取つて徳川姫達を奪はんといふことになり、其評定も終りまして、愈々筑前中納言、小早川秀秋を大將として、垣見和泉守、毛利豊前守を先鋒と定め、石田三成、増田長束其他の諸將後陣に續き、總勢五萬餘騎、七月廿九日の寅の一天大阪城を打立まして、其日の未の刻に伏見に到着致し、疲れも厭はず垣見和泉守、毛利豊前守の兩將へ下知を傳へ一舉に勝を占んと、鐵砲を打掛け、大手へ押寄せました、然るに城中に於ては豫て家康公の仰せもあり、尙油断なく大阪の様子を探り、先方から寄せ来るを待ち設けたる事であるから少しも騒がず、静まり返つて充分に敵の近寄るを待ち、大手の大將松平五左衛門、松平主殿頭諸卒に下知を致して鐵砲を雨霰の如くに打出し、勢ひ込んで應戦に及びました寄手に於ても斯とは豫て期したる事なれば、詰寄せ詰寄せ塀際から乗破らんと、曳々聲を揚げて攻立る、双方打出す鐵砲の音、関の聲は天地に響き、恐ろしなど云ふ計りもありません、寄手

は五萬に餘る大軍、城兵は僅かに一千許りでございますから、入替る所の兵もなく、息を繼ぐ暇もない、何れも勇兵のみなれば屈せず撓まず必死になつて防戦致して居ります、寄手も容易に乗破ることが出来ない、殊に日も夕景に傾むきました、大阪より來つて休む暇なく開戦を致せし事ゆゑ大いに疲れ、生じたるに依り人馬共に暫くの間息を休めんとあつて、一旦兵を引いて伏見城の周圍へ陣を立てる有様城中には鳥居、内藤等、寄手大軍なりと雖も大に疲労なしたる體なれば明朝までは戦ふの勇氣な





しと思へば其不意を打つて寄手の膽を挫がんと、夜討の評定に及びましたる所、寄手に於ても其心あつて互に油断なく相守り夫が爲に遂に夜討の評議も空しくなり、明れば寄手の軍勢再び押寄せ、鐵砲を打掛け関を作り無二無三に攻立る、大手の大將内藤彌次右衛門、松平五左衛門、同主殿頭の三人、必死となつて防禦に力める、寄手の先陣増田、垣見、毛利等敵を小勢なりと侮つて短兵急に攻立てしが却つて城兵の爲に駆惱まされる、なれども寄手は大軍の事なれば、浮田、小西等新手となつて攻掛りました、此時内藤、兩松平の三人は固より聞えし勇士なれば駒を列べて縦横無盡に駆廻り、突立て斬立て働く程に浮田、小西の備へもドツと崩れ立つた、敵の散亂する有様を見て、三將に於ては快氣に打笑ひ、諸軍を纏めて早々城内へ引揚げました、寄手の諸將も大に怒り、此上は味方總掛りに攻立つべしと諸軍を勵まし、再び激しき城攻に及びました、城の要害却々に堅固にして、迎も乗取ること能はず、遂に其日も暮たれば又々陣を纏めて、休息することになりました、然るに石田三成は味方大軍なれば暫時にして之を乗取るべしと思ひの外、兩日の戦に味方多く損じ、手負は其數も分らざる位、夫に引替へ城兵は勢ひ強く、少しも屈する色なく、容易に落城する様子もございせんから大に心を焦し、更に數倍の大軍を増して是非とも伏見城を攻め落さなければ相成らずと俄に工夫を運らし、腹心の郎黨五人を選び、自ら書面を認め之を齎らして大阪へ遣はし、總大將毛利輝元を頼み、城攻の兵器を求め來るべし、今より夜中道を急ぎ、明日午の刻前後に歸り來れと厳しく申含めたから、使は畏つて大阪を指して出立

する、此方は城兵内藤松平の輩は、兩日の合戦に寄手を追崩し、勝利を十分得ましたから、愈々勇氣盛んに諸卒等も皆勇み進みました、時に城將烏居彦右衛門元忠は、其夜内藤松平の人々を本丸へ招ぎ、彦兩日の合戦、各身命を抛ちての働き、忠勇の程感服の外無之、併しながら所詮我々開運の時節にあらず、又外へ立去り命を全うすべきにもあらず、寄手再三敗軍するとも此儘軍を收めて大阪へ立歸ることはヨモ成るまじ、左すれば何の道討死すべき命なれども同じ討死するからは、何十度にも敵を追崩し、駆惱めて徳川家の武威を輝かし、花々しき最後の決戦をなして快く冥途へ赴かんと存する、然れども味方己に兩日の戦に將卒共に疲勞致し居る所へ、明朝に至らば敵又大軍を以て攻立るは必定、如何に我々覺悟ありとは言ひながら、大軍を防ぎ退くること容易ならざれば、夫よりは兵は神速を尊ぶと云ふ古言もあり、不意を打つて利を得る事名士の所爲なれば、今夜某新士の兵を以て、夜討を仕掛ければ必らず勝利を得ると存する、其故は兩日の城攻に寄手の働きを考ふるに島津、立花の勇將でありながら進んで戦はんとせず、矢張り日敗れを取りし者のみ、前に陣を取るは其者共が前敗を雪がんと云ふ氣あるに相違なく、然れども當方より夜討などは思ひも寄らずと怠りたる様子なれば、此處に乗じて不意に押寄せ、我が新士を以て攻討たば勝利疑ひあるべからず、然りながら本丸を預る某、妄に出んも如何なれば内藤氏今日の疲れを休める爲、某に代つて暫く本丸を守り給へ、我れ敢て功を立んと云ふ心底には無之、各々に代つて新手にて一働きなさんと存する、此儀御承知ありたし」と内藤彌次右衛門に



本丸を託し、夫から早速夜討の用意に及びました。扱彦右衛門諸士に向ひ、**「凡そ夜討と云ふものは只不意を打て敵を驚かしめ、陣中を騒がせ、無益に兵を疲らすを以て勝利となす、依て汝等何事も我が下知に従ひ、進退共に號令に背くこと勿れ」**と悉く申含めました。扱彦居彦右衛門に於ては手配も充分に届きました所で、宵の中に兵士を寝ませ、子の刻に到つて呼び起し、兵糧をばせて後自ら本丸の兵三百餘人に鐵砲と松火を持せ、敵陣に入らば此の松火を諸所へ投げ散すべしと命じ、丑滿の頃を待て窺かに城を立出で、續いて松平主殿頭家忠、松平五左衛門親政も各百騎宛を従へ、左右に別れて進みました。時に寄手の陣々には、小西、石田、長束、増田等の面敵は小勢なり、殊に兩日の防戦に疲れ果たらんといふ見込で、豈や夜討に来るとは思はず何の用心もなく、明日こそは必ず乗取らんと城近くへ陣を取て控へる中に石田三成は大坂へ申送りたる兵器明日は来るに相違なければ、之を以て打潰さんと心中に喜び、之も同じく城に近寄て備へを立つて居りますが、何れも皆明日と云ふ事許り心にあれども今夜の用心は更になく、油斷致して居りまする、然れば城兵思ひの儘にて、鳥居彦右衛門は三百餘人を率ゐて、俄に正面の小西行長の陣を望んで亂入なし、鐵砲を打掛け、ドツと許りに鬨の聲を作つて駈廻る、寄手の同勢不意の事とて周章狼狽、槍よ太刀よと立騒げども、少しも防ぐ手段なく鳥居の兵は其機に乗じ、此處に駈廻り、彼處に鐵砲を打掛け、様々に駈惱まされて、小西の兵は同士討をする許り、松平五左衛門は長束が陣へ打入り、主殿頭は石田の備に亂入して散々に駈惱したれば増田浮田の陣まで

も、ソレ夜討よと騒ぎ立て、却々加勢どころでございません、寄手は遂に總敗軍となつたる有様鳥居彦右衛門は思ふが儘に夜討をなし、最早是迄なりと合圖の太鼓を打立て、味方の人数を引集め、勝鬨をドツと揚げて、勇ましく城内へ引上げました、石田三成は昨日大阪へ使を遣はし、其吉左右を待構へて居りましたる所、大阪より致して大砲一門、小銃五百挺、之に附添ふ所的人数百五十人到着致しました、人数は僅少なれども大砲一門來れば、之を以て只一撃に伏見城を打碎かんと一段高き所へ右の大砲を据ゑ、二の丸を目掛けて打放したる其音は山嶽も崩る、許り、ドンと云ふと二の丸の塀櫓は忽ち打毀れました、夫が爲に城兵大に驚き、斯る大砲を以て向はれては逆も防戦覺束なしと、本丸へ逃入る者も多くございませぬ、寄手は此機に乗じ、ドツと喚いて攻め立て、中にも長束正家は士卒を下知して塀の破れより第一番に乗入つたれば諸手の士卒は之に従ひ、我れ先にと亂入する有様は宛然潮の押寄する如き勢ひ、さしも勇猛の聞えある守將に於ても防ぎ戦ふと相叶はず、既に寄手の諸勢二の丸へ乗入り、尙本丸をも乗取らんと勇み進んで來る様子でございませぬ、此時内藤彌次右衛門、松平五左衛門、松平主殿頭等本丸へ引入らんと思へども附入にせられんことを恐れ、今は早や是迄なり、再び寄手を追出して討死なさんと、三人等しく覺悟を極め、多勢の敵中へ駈入り、腕の續くだけ切立て難立て、死物狂ひに戦ひ廻る、之が爲に寄手の兵討る、者勢からずと雖も大軍早や二の丸へ亂入したる事なれば敵兵追々加はり、三人を中へ圍んで討取らんと奔りまする、其中に松平五左衛門近政に於ては敵數多切伏せまして



亂軍の中に遂々討死を遂げました。此時城將鳥居彦右衛門元忠は、本丸に在つて二の丸の破れたるを聞いて味方を救はんと手兵三百人許りを従へ、二の丸へ突つて出で、内藤等に力を合せんと長束、増田、浮田等の兵に渡り合ひ、烈しく戦ひしが、固より鳥居は無双の豪傑でございませうから槍を以て、前後左右の嫌ひなく突廻り、先に向ふ者は皆槍玉に上らざるはなく、然る所へ不思議なる武者一人現はれました其扮装を見てあれば黒き十徳を纏ひ其上へ襷を掛け、又白き鉢巻を致したる人物槍を小脇に抱込んで敵中へ躍り込み、飛鳥の如きの働きは凡人とは見え、是れ何者であるかと云ふと、宇治のお茶師にして、上林竹庵と云ふ者、内府公より百石の御扶持を賜はり、御懇情を蒙つて平素出入を致して居りま



すが、此頃家康公東國へ御下向に就て竹庵毎度お留守居見舞として、伏見の城へ参ります。丁度此の三日前に例の如く宇治より参りました所が、其日に至つて大阪勢押寄せ來つたる事ゆゑ、城將鳥居彦右衛門、竹庵に向つて、彦如何に竹庵御身は長袖同様にして、軍事には關係致さざるものなれば、此の城内に居るは甚だ危し、未だ敵の四方を取圍まざる中に、早々宇治へ立歸つて然るべし」と云ふと竹庵の答へに、竹「仰せにはござりますが、縦令長袖にもせよ、坊主にもせよ内府公の重恩を蒙りし某、斯様な所に來り合せ、何ぞ故郷へ歸らるべき、各方と存亡を共に致さんと存する故、譬にも云ふ餓鬼も人數、數ならねども一ト働らき仕つる心底にございます」と元忠の止むるを肯かず、一旦其前を退きしが、扱こそ斯る扮装にて戰場に現はれたるものと見えます、元來此の竹庵は至つて小男でございませうが、俗に云ふ素捷い質性で、殊に小才格のある男だから那方此方を駆廻り、忽ち敵の騎馬武者三騎許り突落し、其働き天晴勇ましく相見えましたが、其中に松平主殿頭も討死をなし、小早川の同勢三百餘人、稻葉内匠の下知を以て遂々二の丸を乗取りました、小早川秀秋と云ふ人は何所の戦でも餘り働きのない方であるが、稻葉内匠の御蔭でマンマと首尾克く二の丸を乗取つたるは此上もない働きでございませうが、茲に於て城兵は追々に差違へて相果て又は討死をなし、肝腎の松平五右衛門、同主殿頭、内藤彌次右衛門も討死を致して見れば最早頼みに思ふ所の武者は失りましたから、城將鳥居彦右衛門今は是迄なり、イデヤ我等に於ても冥途へ赴かんとあつて、夫より戰場へ馬を乗出す其勢ひと云ふものは實に言葉にも盡



されん位、千變萬化秘術を盡して働く有様、人間業とは思はれませんが、數多の敵を引受けて、散に打散し、ホツと一息吐いて味方の様子を見れば残り少な相成り何れも手を負はぬ者は無い、彦右衛門も一時餘りの働きに人馬共に疲れ、最早期の戦も是迄なりと、自害なさんとする所へ小早川の郎黨田中雲八、薄田兵太夫の兩人鳥居の疲れし所を幸ひ討取らんと左右より挟み打になさんとするを彦右衛門元忠ヒラリ體を躲し、雲八を只一刀の下に切つて落した、兵太夫之を見て大きに驚き這は敵は」と一目散に逃出すを元忠大音に、彦「汝れ卑怯の振舞かな、我が冥途の供致せ」と追掛けて行く



所へ横合より浮田の郎黨高橋藤藏、松井佐五左衛門等汝れ遁さじと彦右衛門に討て掛る、元忠怒つて、此奴も共に冥途の供かと、忽ち高橋藤藏を横撲りに馬より下へ切つて落す、其時に佐五左衛門に於ては鳥居の鎧の草摺を疊み掛けて刺さんとする時、元忠太刀を投捨て佐五左衛門が腕と鎧の上帯を引掴み、目よりも高く差上げて、エイと云ふ聲諸共に機を打つて投出しますると、大兵肥満の人物ではございますが、其所へ血嘔を吐いて打倒れる、彦右衛門一息吐いて居る所へ、「鳥居様、お疲れでございますませう」と例の竹庵が其處へ駈来りまして、馬柄杓の水を一杯呉れましたから、彦「オー之は御茶師の上林か、辱けない」と一杯の水を呑んで咽喉を濕し、彦「最早上林此所に居るは無益であるから、早々立退いて呉れろ」と云ふが何うしても上林は落ちない、竹「飽迄も踏留まつて切めてもの御恩報じに働きを致します」と云つて遂々此の上林竹庵は伏見城内に討死を遂げました、後に伴の五郎兵衛と云ふ者が取立になつて、三百石を頂戴致し、徳川家の末まで宇治の御茶師で繼續致し宇治に一萬石許りの所を支配仰せ附けられたと云ふ、是れ所謂積善の餘慶でございます、扱も城將彦右衛門は上林竹庵に水を貰つて咽喉を濕し、勇氣舊に復して又々手痛き働きをなし、遂に本丸の櫓に登つて勇士の最期は斯の如しと、見ん事腹を切つて後、其刀を以て自ら首を掻切つて相果てたるは誠に勇ましき最期でございます、爰に伏見城は殘念ながら落城致し、大阪の軍勢之に乗込み、段々取調べた所が肝腎の人間質にしようとした姫君達は城内に居りません、又々計略手違ひになつたので、三成齒齧をなして口惜がったが、何うも據ろご



ざいません、お話戻つて徳川家康公は已に野州小山に本陣を置かれ、追々乗込みたる諸大名とも軍の手配り全く整ひ、敵の打出すに應じ、一齊に攻掛らんと待構へて居ります、スルト四月廿四日の暮方、伏見に残した鳥居彦右衛門、馬廻りの武士、濱島無手右衛門密使として小山へ着致し本多上野介に對面を致した、何事と聞くと、無格別の事でもございませぬが、君に直々に申し上げたい」早速お庭先へ召される、家康公のお側には本多上野介許り、外に誰も居りませぬ、家康公直に上方の様子をお尋ねになると、無手右衛門謹んで、無石田三成佐和山より中國西國の大小名を語らひ、大軍を以て打て出でました、關東までも攻下らんと云ふ取沙汰でございませぬ」家「ウム夫は豫ての覺悟、シテシテ伏見城中にては彦右衛門如何なる手段を以て籠城致す」無「さん候、敵大軍なりと雖も恐れまする色もなく、四方の橋を引いて防戦仕り候やう致して居ります」と申上げると家康公、南無阿彌陀佛と仰しやつた、是は彦右衛門が橋を其儘にして置いて掛合をすれば萬に一助かる事もある、夫を大軍に圍まれました、橋を引いて了へば城内へ籠つた者は猫兒一匹助からない、鑿殺しに相成りまする事故、思はず南無阿彌陀佛と仰せられた、乃で直ぐに無手右衛門を下總の矢作へお遣はしになつた、是は鳥居の地行所で御座います、所が加賀國から前田利長の早馬が到來して、石田三成佐和山より打て出で、島津、鍋島、長曾我部、小西、吉川、毛利、浮田、小早川、四國中國、西國の面々、大阪へ駈登り、内府公を打滅さんと相謀りまする某へも一味せよと度々申越し候へども承知仕らず、近々舍弟能登守を召連れ、丹羽加賀守の

小松の城、山口玄蕃頭の大聖寺の城を攻落し、夫より越前へ相進み申候間、景勝征伐は暫く差置かれ、上方へ御馬をお進めあつて然るべしと云ふ注進、家康公は委細聞置いたと云ふ上意でございませぬ、扱本多上野介を召され、宇都宮への早打を申附けられました、本多正澄は其晩戌の刻に乗出し、子の刻に宇都宮へ着致し、先手の諸將一同に對面をして、上「何のやうに之あるとも、此方より差圖之なき内は御本陣へ來られること御無用、確と其儀心得られるやうに」と斷つて置いて直に乗返し、上下十六里十二丁ある所を明方に立歸りましたが、夫に續きましたのは馬の口取が一人、徒士が一人只二人しか續かなかつた、然れば件の口取は徒士、徒士は武士に取立になりました、尤も此時乗つて居ました馬は、葦野鹿毛と云つて當時名代の駿馬、後に秀忠公へ之を獻じまして韋陀天栗毛と云つたのは此馬でございませぬ、扱家康公に於ては御譜代並に御一門一同をお招きになりました家「さて伏見からの注進はこれ、前田利長よりの注進はこれ」と一仰せ附けられました前に上杉あり、佐竹あり、上方には石田を初め中國西國の大名一圓が敵となつた、上方を先に征伐すべきや、若しくは上杉を先にすべきやとのお尋ね、時に結城秀康公第一番に之は上方御征伐こそ先にして然るべく、何となれば上方勢は大軍なりと雖も弓矢の道に秀づる者少く、然れば是れ弱敵なり、又上杉は之に反して、謙信以來の弓矢の家なれば、古兵多くあつて何れも武の道に明い、是れ強敵なり、且つ石田は根本にして上杉は枝葉でござる、幹を倒せば枝葉は自然滅びまする道理、依て上杉へは手強き押へを差置かれ、上方へ御出馬こそ然る



べしと仰せられると、何れも之に賛成致しました、家康公もお喜びになり、家「夫れについてはいかにして石田を討つべきか所存を申せ」と仰せられる、此時酒井左衛門忠次三十六歳、井伊兵部少輔直政四十歳、本多中務太輔忠勝五十一歳でございましたが、先づ忠次進み出て、忠「私考へまするには先づ江戸へ御歸城在らせられ、暫く世間の様子を御覽遊ばし、御供の大名衆へは勝手次第志す方へ味方致すべき旨仰せられ、大手は箱根の山を固め、搦手は碓氷、小佛、大菩薩、關八州を相固めまする内に、石田方へ異變の出来致すこと疑ひなく、其時一擧に打滅しまするが宜しからうと存じます、又井伊直政は、直「酒井の申す所一應道理なれど、箱根を固めてお引籠りあらんは御威勢薄きに似たり、今は他領と相成り居れど御先祖より代々武勇を現はし給ふ、參遠兩國を敵の蹄に掛けんこと餘りに言ひ甲斐なければ上は駿府に御本陣を置かれ、遠州濱松に秀忠公御陣を据ゑられ、吉田岡崎夫々に相守り、透間を見て攻寄するは如何でございます、スルト本多中務太輔カラ〜と打ち笑ひ、本「御兩所の仰せ道理には似たれども某の存する所は又格別の相違、其辭と申さば逆臣三成幼君秀頼の爲なりと云ふを口實に致すに依り徒らに日を送る内には太閤恩顧の大名思慮の淺きは之に従ふ故、敵は大勢に相成る、然らば此度の合戦は火急のお進めあらんこと肝要に存する、佐竹義宣逆心を出すとも老父常陸介義重無二の御味方ゆる、跡の妨げあるべからず、又假令上杉景勝打て出るとも彼の後には伊達最上の勇將あれば是又自由には働かすまい尙其上に相當の大將をお選みに相成り人数二三萬を差添へられ、上杉佐竹の押へに置かせられま

したらばお後の虞は決してござらぬ、斯の如く關東を嚴重にして不日上方に御人数を差向け給ひ御前にも程なく御出馬あつて敵に出遭ふ所まで平押しに押上らば上方の逆徒輩武勇の程は豫て知り透したり何程の事かあらん、高が烏合の集り勢、縦横無盡に馳破つて張本石田が首を切り徳川家の譽を後代に留めんこと心地好き事にあらずや」と戰場々數の老本多が躍り上つて君に言上致した、家康公御機嫌麗はしく、家「三人の申す所皆以て愚かなるはなし、中にも忠勝の申分、別して其圖に當ると心得る」と上方へ引返すことに相成りました、茲で何人を押へに置かうかといふ事に成つた時、結城宰相秀康進み出られて、秀「某小山に滞陣致し上杉勢を一步も白河以西に出し申すまじ」と大言を放つ、家康公早速御許しになつて之から上方へ引返すことと相成ります。

(第二十六席) 岐阜秀信三成に加擔の事、並に村越茂助使者の事

家康諸軍を引率致し野州小山の陣を御引上げになり、豊臣恩顧の諸大名は石田征伐の先手として直に進發致し、家康公一先づ江戸に御戻りになりました、茲にお話變りまして石田治部少輔三成は河頼左馬之助を岐阜へ遣しました、是は三成の甥であります、當時岐阜の城主は御幼君三法師丸、今は中納言秀信と仰せられ、織田信長の嫡孫でございます、御氣に入りの御近臣に入江右近伊達平左衛門、高橋一徳齋といふがある、此三人へ對して三成より黄金五十枚づゝの賄賂を贈り周旋を頼みました所、慾に目のない三名、殊の外喜びまして秀信の御前を取繕ひ、早速左馬之



助御目通りを免された、此時に河瀬左馬之助、左徳川家康は豊臣の天下を奪はんとする大賊なるにより此度毛利、浮田、其他中國四國九州の大軍を起し、家康を征伐なさんと存する、就ては御當家に於ても何卒御味方の儀を願ひたい」と辯に任せて秀信公へ申入れました、然るに秀信公は今度徳川家の催促に従ひ、會津征伐の爲め關東御出馬の御用意の最中でございますから、如何いたさんと一先づ左馬之助に休息申附け、直ちに家老を御召出しになつて御相談でございます、時に木造左衛門勝忠といふ人が進み出で、勝「恐れながら我君は織田の嫡孫一體なれば天下を治し給ふべき御身の上なれば申さば豊臣に對して怨みはあるとも恩は更にござらぬ、徳川家には屢々御恩を頂いたこともございますれば關東へ御味方遊ばされて然るべし」といふ尾に就て、百々越前守盛長といふ人、盛「只今勝忠の申す所尤もに存する、關東へ御味方こそ至當と存じ奉つる」と申上る、ソコで秀信、秀「然らば汝等の意見に従ひ、徳川家へ味方いたすであらう」と仰せられ、兩家老に於ては喜んで御前を退ると跡に残りました入江右近、伊達平左衛門、高橋一徳齋の三人言葉を揃へまして、〇「此度の一戦、上方勢は二十萬餘の大軍、中々以て徳川内府の及ぶ所でございます、關東へ御味方遊ばす時は必らず御當家御滅亡の悲運に陥ります、何事も時節でございます、ますれば彼是れ御懸念なく上方へ御味方あるは御家の安泰を計り給ふこそ然るべけれど存じます」と己れ等が黄金を貰つて居りますから、怨の爲めに恩も義理も辨へません、佞辯を以て様々に秀信へ勧めました、此秀信といふ人が祖父様の信長や御父上の信忠とは大違ひ、殊の外愚將

でございますから、了簡が少しも定らない、又ガラリ氣が變つて、秀「汝等の申す所道理に存する然らば石田方へ味方をいたすであらう」と茲で河瀬左馬之助を呼出し、如何にも三成へ味方をいたすと直筆の返書を御遣しになりましたから、左馬之助は大きに喜び、厚く御禮を陳べて立歸りました、翌日家老老臣百々越前守、木造左衛門之介の兩人を召されて、秀「我等考へあつて石田へ味方いたすことに決したれば左様心得よ、必ず意見は無用である、戦さ勝利の相談を仕るやう」と確と言ひ放ちましたから、兩家老は呆れて終ひ、左「然らば徳善院へ一應相談仕りまするに依つて彼が意見に御任せ遊ばさる、やう」と兩家老に於ては早速上洛に及びました、當時京都所司代前田徳善院立以法印、此人は天正十年六月二日本能寺の戦の時に三法師丸を懐ろに抱いて明智の圍みを切り抜け、織田の御家を再興いたしたる人物でありますから秀信何事も徳善院の言葉に背きません、ソコで之を相談の爲め上洛を致しました、其跡で例の三名の佞人、〇「恐れながら今更何も徳善院へ御相談遊ばさる、ことはございませぬ、既に御決心相成りたる上は必と石田へお味方遊ばさるやう、猶三成が安心の爲め早速佐和山へ御出であつて、石田に御面會あらせらる、やう、我々御供仕りまする」と到頭秀信を引張り出して佐和山へ参り石田に對面をして、某正に貴殿へ味方をいたす、夫が爲に當所へ参つたれば安心いたすやう」と主人の口から言はして了つた、三成大きに喜びました様々の馳走をいたす、時に秀信、秀「就ては家老百々木造の兩人、徳善院へ相談の爲め上洛いたしたが、是は如何いたして宜しきや」と聊か懸念の様子、三成之を聞き



て、「夫は私しから人を出し、此方へ呼入れますから御安心相成るやうに」と鳥本の宿へ石田の家來を遣し、兩家老の歸りを相待つて居る、此方は木造百々の兩人、前田徳善院に對面をして東西何れへ御味方いたした者かと相談をする、前田法印、徳是れは御邊等兩人より關東方へ御味方なさる、やう御勸めなさるが宜い、夫こそ御家の御爲でござるといふ、ソコで兩家老徳善院に別れ鳥本の宿まで戻つて参りますると石田の家來が待構へて居りまして、〇「貴郎方の御主人秀信公は佐和山に御出で遊ばし、各々方を御待受けでござる、御案内仕つるに依て佐和山へ御出で下さるやうに」と兩人を連れて佐和山城へ参りました、三成に於ては百々、木造の兩人へ様々馳走をいたし結構なる引手物を遣はした、ソコで主従三人打揃つて岐阜へ立歸りました時に兩家老が、越さて徳善院へ相談いたしましたる所、關東へ味方を遊ばすが御家の御爲めと申すこととございます、早々徳川殿へ御味方遊ばさる様就ては我君には佐和山へ御出でに相成り、馳走を受けられしこそ幸ひ、其返禮として石田を此方へ御呼び寄せになり、彼を一刀の下に討ち取つてお終ひなさるが宜しう存じます」といふと飯沼重左衛門といふ人進み出で、重越前殿の仰せ御道理に存する、早速石田を當城へ御招ぎ遊ばさるやう、某が彼れを一刀の下に討ち取ります」といふ傍らから弟の小勘平、小イヤ〜兄の刃を待たず拙者一掴みに三成を掴み殺して御覽に入れ、早々治部少輔を當城へ御招ぎあつて然るべし」と交る〜申上る、所が中納言秀信一向御承知がない、秀イヤ〜、夫は汝等が大なる心得違ひ、我れ三成を殺さば上方の大軍忽ち我れを殺

さんこと必定、我が心既に石田に味方と定つたる上は最早意見は無用である」と何分佞人井の言葉に迷つて忠臣の意見を用ゐず、斯くまで諫めて用ひられざれば是非に及ばず、と茲に兩家老も心ならず當城に楯籠つて關東勢を遮るといふことになり、直ちに岐阜籠城の手配りに及び、岐阜從三位中納言秀信の舍弟、織田左門之佐、木造左衛門之介勝忠、百々越前守盛長、飯沼重左衛門舍弟小勘平國次、増田藤左衛門元綱、同藤三郎元房、是等を初めとして一萬餘人愈々籠城といふ事になりました、所が秀信といふ人は更に決斷がない、右といへば右、左といへば、左と、始終氣が迷つて居る人でございますから、石田三成大きにこれを氣遣ひまして梶原彦右衛門、弟彌助の兩人を稲葉山の續き瑞龍寺山の岩へ籠め、之でも猶心許なく思ひますから、其跡から河瀬左馬之助、松田重太夫、大西清左衛門等、千餘人の兵を岐阜へ送りましたといふは、今度の戰爭に先づ第一に戦ひの起るのは此所でございますから、三成は岐阜を落城させてはならんと思ふに依つて斯の如く嚴重にいたします、所が岐阜の秀信が上方へ味方となりましたから、美濃尾張の國人悉く上方へ味方し、徳川家の敵と相成りました、其中に尾州犬山の城主磯谷備前守、美濃國竹の鼻の城主松浦五郎左衛門、之は關東の出鼻でございますから、夫が爲に加勢として犬山は大阪から稲葉右京之介、同彦彦六、關長門守、伊藤攝津守、田丸中務少輔、加藤左衛門助、竹中丹後守又竹の鼻へは岐阜より花村半左衛門、毛利掃部、梶川三十郎加勢として出張いたしました、茲に尾州清洲の福島正則の留守居、大崎玄蕃、津田備中守は堅固に城を守つて居ります、此備中守



といふ人は前名與右衛門と申して秀吉公より黄母衣を免されました武功の武士、正則の先妻は此津田備中守の女でございます、正則が初めて播州龍野に於て五萬石になつた時に秀吉公から附家老になつた人であり、此津田備中守の許へ石田から使を差立て早々清洲の城を明渡し、幼君秀頼公へ忠節を盡されるやうにと申送りしました、備中守は決して左様なことは顧みず、常清洲の城を受取らんとならば鎗先きを以つて渡すに依て、何時でも大軍を差向ける様にと返事をした、ソコで石田が再び木村惣左衛門といふ者を清洲へ遣はし、福島殿は徳川家の旗本に在つて合戦の節に裏切をなされる思召しにて内實は大坂方に定り居る、夫が爲に此方の人數を清洲へ籠め置く兼ての約束でござる、其邊御承知なされるやうにと申込んだ、所が津田備中守が性來正直の人だから之を眞實と心得て主人正則公が左様な御心底なれば宜しい、石田方の人數を當清洲の城内へ入れても苦しからんといふ返事に及びました、スルと傍へに聞て居た大崎玄蕃が、津田備中守をハツタと睨み、玄「アイヤ津田殿、此清洲の城は其許一人の心の儘には相成るまい、元來石田は古狸、又使に參つた木村惣左衛門は古狐、眉毛を濡して應對なされい、尊公の御挨拶餘りといへば輕々しうござる」之を聞くと木村惣左衛門怒るまいことか、惣「何だ拙者が前も憚からず古狐とは無禮千萬、武士たるべき者を畜生に喩へるとは奇怪至極、拙者勤辯罷り成らん、今一言放つて見よ、其座は立たせ申さんぞ」と膝立て直してジリ／＼と詰め寄つたる體、大崎玄蕃カラ／＼と打笑つて、玄「ナニ貴様等と論は無益だ、己れの持城を石田の爲に取られ、どの面下げて是へ參つた

兎や角云はずとサツサと歸れ、マゴ／＼いたすと其分には捨て置かんぞ」といつたのは木村惣左衛門は美濃大垣の城主、伊藤彦兵衛といふ者の家老で、彦兵衛が石田へ大垣城を渡して終つて今村といふ所へ砦を構へて居りますから大崎玄蕃が斯く辱めたのでござります、木村惣左衛門殘念と存じましたが事を荒立て、は宜くないと思ふから言葉を和らげまして、惣「イヤ大崎、御身は某しの申したことを御疑ひなさるが決して偽りではない、福島殿は全く石田殿へ御味方でござる」津田備中守玄蕃に向つて、備「當城を渡すといふなれば格別、上方の人數を當城へ入れるだけは、更に仔細ござるまい」玄蕃之れを聞て、玄「是はしたり、其許にも似合はしからざる一言、木村が申すことが全くなれば、主人正則の書状がなくてはならん筈だ、人數は愚か猫一匹でも決して當城へ入れることはならん」といひつゝ、立つて木村惣左衛門の襟首を搔擽んでグイと引立て、玄「コレ貴様が茲に居るから津田殿の迷ひが晴れん、サツサと罷り歸れ」と玄關の方へズル／＼引いて參ります、木村惣左衛門殘念と思ふが如何とも仕方がない、大崎玄蕃大喝一聲玄關の短冊石の所へズドンと惣左衛門を投げ出し、玄「マゴ／＼致さず疾々と歸れ」と大眼を見開いてハツタと睨んだ、惣左衛門齒を嚙んで怒つたがどうすることも出来ない、惣「コレ今に見る、上方の大軍當城へ攻め來つて一揉みに揉み潰すから左様心得ろ」玄蕃大口開て打笑ひ、玄「何時でも押寄せて來い石田をはじめ古狸古狐を屠殺にして呉れる汝等如きは此玄蕃の目から見れば人間ではない皆畜生だ、畜生に言葉を交すは汚らはしい、サツサと歸れ」と睨め附けられた惣左衛門、短冊石で顔

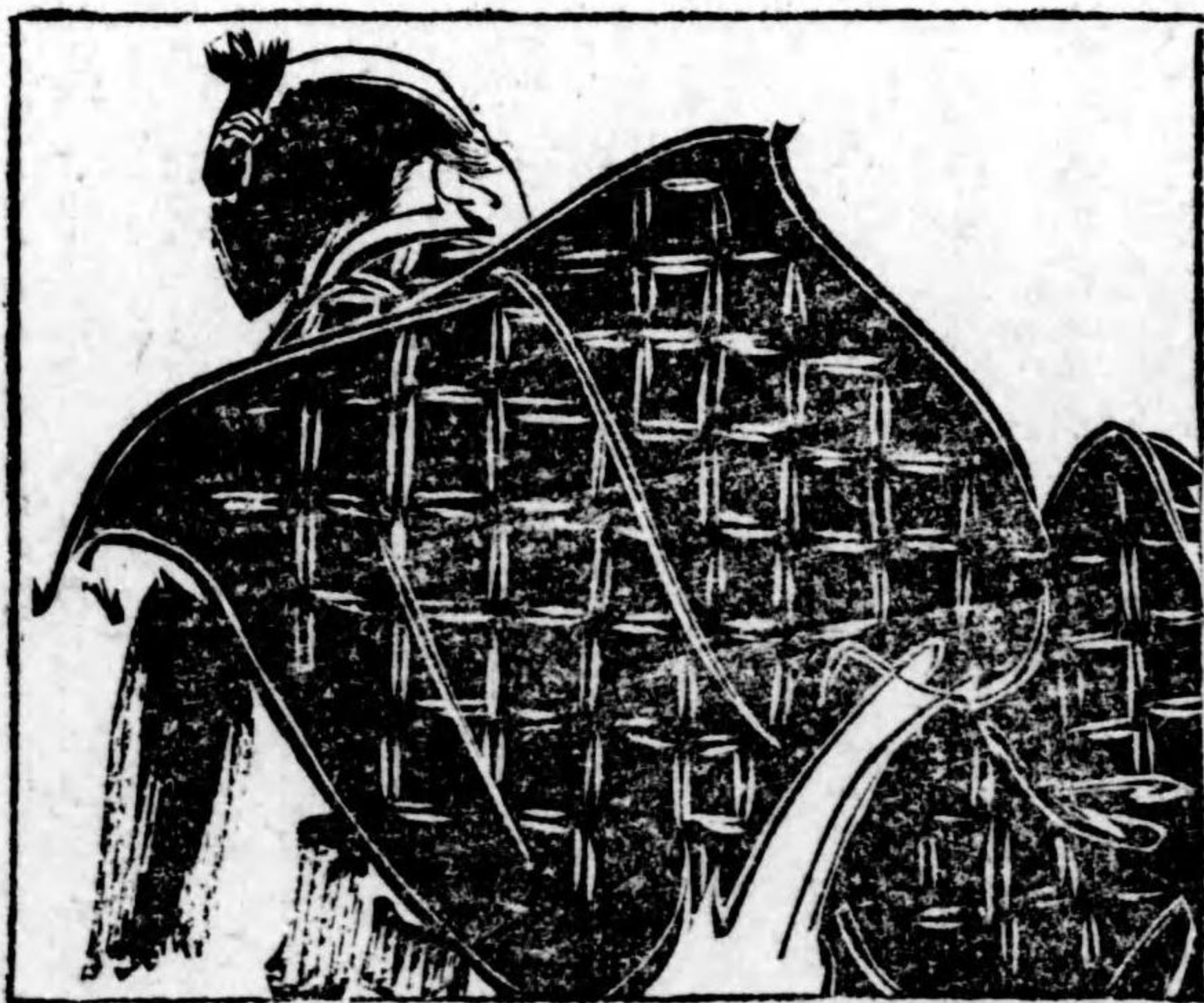




使者を遣はし、早々出陣をいたすやうにと申入れると氏家内膳、先達ては關東の家康に誤りがあ  
るやと存せしが今日に至つて考ふるに何も家康に誤りはない、然るに石田が此度の企て更に其の  
意を得ん、何れ幼君秀頼公へ忠節を盡す時節もござらうと、思ひ切た挨拶に石田の家來は這々の  
體で立ち歸りました、是が家康公の許へ聞えましたから、本多忠勝へ御下知をなすつて早々徳川  
家へ御味方をいたすやうにと、本多から使を遣すと氏家内膳、此度石田の逆意とは申ながら、幼

を摺り毀して鼻血が夥しく流れ、イヤどうも見苦  
しい態をして逃歸りました、大崎玄蕃は元の座敷  
へ来て、玄「さて津田氏、何で御邊は考のない返答  
を致さつしやる、先日の御返答は天晴と威服致し  
居つた所、夫に引替へ今日の返答、どうも汰沙の  
限りでは御座らぬか、御主人が申越されたなど、  
は彼が偽りに極つて居る、上方との間に其約束が  
あり乍ら肝心の當城へ何等の御沙汰のないといふ  
道理は御座らぬ、決して疎忽の返答をなされては  
ならん」と茲で此趣を早速關東へ注進致しました  
此方は石田三成伊勢の桑名、氏家内膳行弘の許へ

君を後ろ楯といたしての事なれば關東へ味方は罷りならん、重ねて斯様な使者を送らば一刀の下  
に首を切つて捨てるから左様心得るやう」と色氣も想氣もない挨拶、氏家といふ人は餘り物が堅  
過た爲めに關ヶ原戦ひ濟んでの後、家断絶をいたしました、扱石田三成は愈よ美濃へ發向の手配  
りに及び、佐和山の城内には留守居として舅宇田河内守、並に三成の嫡子石田隼人、夫れから山  
田上野介、樋口佐兵衛、赤松左門を止めまして慶長五年八  
月八日先陣を押し出しました、第一番が島左近、蒲生備中、  
小川平左衛門、進藤縫之助二千三百人、第二番は舞兵庫、  
中島宗右衛門、大場土佐、太山伯耆三千人、第三番が戸田  
但馬、赤口伊豆、三田村織部千五百人、都合六千八百人佐  
和山を出立して垂井の宿まで乗込みました、其中に島左近  
の一構へは一際目立つて見えます、斯て三成は愈よ八月  
九日出陣といふことになつて八日の晩川尻肥前守、毛利三  
郎兵衛の兩人進み出て、〇「さて明九日は誠に悪日にござい  
ますれば御出陣を御延し遊されて然るべくといつたが三成  
が聞かない、三「斯様に手筈をして悪日なればとて出馬延引  
はなるまい、其方共悪日と申すが、君より恩祿を賜つて居





れば悪日とて辭退する法はない、明日は出陣をいたす」と更に用ひませんのは之れ即ち人の心を破るといふもので、是等は三成が甚だ宜くなかつた、ソコで八月九日早天に石田治部少輔三成出陣に及び相従ふ面々進藤縫之助、横川監物、森川九兵衛、並川左内、磯野平三郎、百浦宮内、井口清右衛門、早咲平藏等をはじめ同勢一萬二千人、九日の早天に佐和山を出發に及び、十一日に美濃の大垣へ入城に及び、種々の手配りをいたしました、關東勢は尾州清洲へ陸續として乗込み上方勢は大垣の城へ追々乗込んで参ります、扱石田の催促に従つて美濃の大垣へ乗込んで参りました大名、浮田中納言秀家、小西攝津守行長、安田惠瓊、鍋島信濃守、毛利宰相、福原右馬介、織田左衛門佐、吉川藏人、垣見和泉守、名東大藏太輔、島津兵庫頭、同又八郎、金吾中納言、長曾我部宮内少輔、朽木、小川、脇坂以下、其外數ふるに違あらず、又關東方には福島左衛門大夫正則、池田三左衛門輝政等を始め、徳川家の軍代井伊兵部、本多中務太輔等、八月中旬尾州清洲へ着陣をいたしました、美濃の大垣と敵味方相距ること僅かに七里、上方勢は大垣に集り、清洲に居ります徳川方は家康公の着陣を相待つて直ちに戦ひを開かんと、何れも勇氣勃々として居ります、所が家康公が容易に御出馬がないから、御味方の大名衆氣を焦し、内府には何日御出馬に相成るかまだかくと待ち兼ねて居る、所へ關東から御使が来て、○「各々永々の在陣御苦勞に存する、我等親子近日出馬いたすでござらう」と云ふだけの御口上でありますから、福島池田を始めとしてどういふ者で徳川家は今以て出馬をなさらんか、我々を清洲へ差置て肝心の御本人が出

馬なさらんといふは其意を得んこと、井伊本多の兩人へ度々迫りますから、困つたのは井伊、本多、自分達は徳川の家來で倍臣主人へ味方をしたのは皆豊臣取立ての大名衆、腫物に觸るやうな工合で困り切て何とかはつきりした御汰沙のある様にと、度々催促を致します、すると今度關東から御使として村越茂助といふ者が参るといふ知らせ、之には大きに驚き、直「イヤとんだ者が使に参る、一つ口上を言ひ損なつた日には大事が出来する、どういふ用向か柳生先生、尊公茂助を待合せて用向を聞て下さらぬか」柳「委細承知いたしました」と柳生流の劍道の大先生柳生又左衛門宗矩、後に但馬守と仰しやつた御方、村越茂助の爲にも劍術の師匠でございます、八月十九日に清洲を立てて翌る廿日、三州池鯉鮒に於て茂助に出遇ひました、又「イヤ茂助、道中御苦勞であつたどういふ用向で参つたか一應拙者承りたいものだ」茂「左様で、手前は物覚えが悪うござるから用向きを茲で貴所へお話をし、先へ参つて間違へますると大きに不都合ゆる、茲では御話が出来かねます」又「左様なことを申さんで一通り話して貰ひたい」茂「イヤ、何と仰しやつても夫は往ません、大事の御使ひ、途中で貴所にお話は出来ません」仕方がないから柳生又左衛門、茂助と同道をして清洲へ引歸したが井伊、本多の兩人が氣を揉むのは道理千萬、此茂助といふ人は誠に物覚えの悪い人で前名村越三十郎といつて明智光秀の家來でありましたが明智が滅びて後徳川家へ御奉公を致し、屢々武功を現はして中々強い人物、或時徳川家へ堀尾帯刀が御出でになつて家康公と御話の時に傍らを見ると三十郎が居ります堀尾殿が、帶「其許は毎度戰場にて手柄を現は







し、實に感服いたすが、エ、何と申されたか顔は知て居るが姓名を存せん、何といはれる」と不意に自分の名を聞かれたから、ハツと思つて三十郎自分の名を忘れて終つた、世の中に疎忽しいといつて自分の名を忘れる者は餘りない、帶「何といはれる」三「ハイ村越と申ます」×「ウム村越何と申す」三「左様、村越……村越……」といつて跡が出ない、ジツと堀尾の顔を見て居りましたが此の人はお名を茂助といつたと自分の名は思ひ出さんが、先方の元の名を考へ出して、三「エ、茂助と申します」家康公手を拍て御笑ひなされ、家「如何に帯刀殿、己が名を忘れるほどの疎忽者も常に御身の武勇を慕つて、忘れねばこそ其許のお名を申した、茂助の名は以來此者へ御遣はし下さい」と申されました、夫れからして此方村越茂助と呼びました、御旗本でも名代の御家で、薬研堀に御屋敷がございました、尤も御代々少し調子が狂つて居る、近い頃の茂助と仰しやる御方が御城が御退りになつて大手の下馬先きの所へ懸ると、恐ろしい風が吹て来て、御陣笠の紐がゆるんで吹飛ばされさうになつた、アツと口をお開きなすつて陣笠の紐の緩んだのを漸々堪へたが、其ま、口を開いて大手前から薬研堀の御屋敷までお歸りになつた、其日の夕飯に御豆腐の御汁を差上ると一口吸つて、茂「コレ」砂だらけで往かん、換て持つて參れ、又豆腐の汁を換て持つて參ると、矢張りジャリ／＼砂がある、茂「是も往かん」と二三度換ましたが何れも往けません、漸やく御家來が氣が附いて、〇「恐れながら是は吸物に砂があるのでございませぬ、貴所が下馬先きから御屋敷まで始終御口を開て入しつたので御口中へ砂が入つて居りますのでございませう」と

いはれて茂助殿、茂「ウム左様であつたか、夫なれば蒭蕪に致せば宜つた」と仰しやつたが、洒落た殿様があつたもので、御代々御武勇は無双で在つしやるが、疎忽かしいことも又無双であつたといふ、其村越茂助が御使者だから井伊、本多の兩人大きに心配をして、直時に茂助、どういふ御用向きだ」茂「イヤ手前が言ひ附つて參る位のこと大體御察しなさい、然んな難かしいことではない」直「デハあるが大名衆が焦れ切つて居る、一つ口上を間違へると大變なことが出来たすどうか我々へ先きに話して聞せらる」茂「左様、當分出馬は出来ないから其許達で宜いやうに計ひくれろと此ういふお使ひで」直「夫は大變だ、未だか」と大名衆が首を延して御出馬を待ち受けて居る所へ、當分御出馬がないなど、いつて見る、どんな事になるか知れぬ、どうか此ういつて貰ひたい、出馬をいたす考へだが何分風邪の爲に延引いたし居る、明日にも氣分が良しければ即刻出馬すると斯様に申してくれ」茂「夫は往ません、然んなことを云つて後で知れると大變」直「知れども宜い、我々兩人刀に掛ても貴様に迷惑はさせないから、どうか然ういつて貰ひたい」茂「夫なれば宜しうございませぬ、承知いたしました」井伊、本多の兩人漸く安心をして、直「就ては我々が菓子の折を造へて大名衆へ差上げ、是は君から御見舞として御遣しになつたとお前が江戸から持て来たつもりに吹聴するから左様心得てな」茂「宜しうござる、萬事仰しやる通り」直「忘れては往かん、能く口上を覺えて居るやう」と小兒に物を言ひ附けるやうに吳々も茂助へ話をいたし、ソコで大名衆一同へ關東から使者が參りましたから本丸へ御集り下されたいと申入れた、之を聞く



と福島、池田、淺野、黒田等續々と清洲の本丸へ集り、ズラリ居流れたる時に間の襖を、サラリ開け立出でたるは村越茂助、高慢の顔をして正面へ座を占めたる様子、大名衆クスノク笑ひ出した家康が遣す者に事をかいて、とんだ者を使ひに遣した無事に口上を陳べられるかな、事によつたら悉く忘れて居はしまいかと互に顔を見合せて可笑しさを堪へて居る、兎角する中に若侍が多くの菓子折を持参して其の所へ列べると、跡から井伊本多の兩人立出でまして、〇「是は關東より長陣の御見舞として御遣はしに相成てござる、又是れは君よりの御書面、大名衆へ」と差出だした、其書面を取り上て見ると、「其許の模様承り此度村越茂助を差遣はし候、出馬の儀は少しも油斷無之候得者御心安かるべく、委細は茂助口上を以て可申入候、八月十三日」として其下に花押がある、皆同じやうな文意で十萬石以上の大名には一人の名宛小さい大名衆へは五人三人づつ、の名宛でございます、さて之から茂助の口上といふので一同茂助の顔をジツと見て居りますとエヘンと先づ咳拂ひをいたした、村越茂助座中をズーツと見廻して、茂「エ、各々様長々の御在陣御大儀に存する、然る所我等出馬の義何分急速には成りがたく、軍代井伊直政、本多忠勝と御相談なされ、宜しく御取計なし下され度くと御口上は右の如くでござる」と井伊本多が教へた口上とは全然違つて居る、之を聞くと満座の大名衆が苦々しい顔をして、井伊本多の方を見るから兩人大赤面を致し手に汗を握つて控へて居る、此時福島左衛門太夫正則、正「ア、ア、茂助、シテ何日頃御出馬の御模様なるか」茂「左様何日と申す日限も定まりません、態々拙者を御遣しになつた位

ゆる中々急には御出馬はございますまい、井伊本多之を聞いて、イヤ大變なことをいふと思つて、頻りに茂助に目配せをいたすと、茂助は何と心得違ひをしたか、茂「イヤ各々様へ申入れるが、只今差上た土産物は拙者が關東より持参したのではござらん、井伊本多が當所に於て調へて各々へ進せられたのでござるから禮は井伊と本多へ仰せられたが宜い」と大きな聲で吹聴したから兩人は眞赤になつて差俯向たきり顔が上りません、一座の大名苦り切つて居ると、中に加藤左馬之助ハタと手を拍ち、左「成程徳川殿は御名將だ」と頻りに賞め立てるから正則が、正「コレコレ我を當所へ差置き、今以て御出馬なきを何で名將と云はれる」左「されば我々は太閤取立ての大名此度の企は石田が業とは申ながら、幼君秀頼公の御爲めとあるゆゑ、内府公は其許や我々を御氣遣ひあつてのことだ、夫をヤレ来いソレ来いと催促をいたすは我々が行届かざる所、茲で我々が二心なき證據を見せなば早速御出馬遊さるゝであらう」正則扇子を以て疊を打ち、正「成程々々嘉明が一言にて相悟つた」と扇子を開いて村越茂助を煽り立て、正「さて茂助、此度の使ひ御苦勞々々内府御不審の晴れるやう直く様犬山か岐阜を攻め取つて見せ申さん、先づ二三日逗留をいたすやう」茂「イヤ私は城攻めの檢分に參つたのではござらん、御口上を申して終へば早々江戸表へ歸りまする、へい左様なら」とキツパリとした挨拶、井伊本多はビツシヨリ汗を掻いて、一同退散した後で、直「さて茂助、加藤殿の一言で旨く治まつたから宜いが、今日は我々悉く心配をいたした、何故に此方が云つた通りに申さなかつた、第一菓子折のことなどは云ふに及ばんではない



か「茂」左様、作へ事をして濟む位のことなれば、最初から私を御遣はしにはなりませんまい、何でも有のまゝに喋舌るのが宜いと思ひましたから私しが言ひ附つた通りにいつたので、貴所方のやうに作へ事をして宜しければ、手前のやうな粗忽者でなく江戸にも智慧のある人間が幾らも居りますから夫をお遣しになりましたらう「直」成程、申す所道理だが、併し一時は大きに心配いたしました」と井伊本多もホツと一息つきました、是れ家康公が人をお使ひなさるが御上手で、怒じの者を遣はずと大名衆の顔色を見て云ふ事をキツパリと云はぬ、其處へ来ると茂助は物覚えは悪いが、主人の言附け通り大名衆の顔色などに些とも頓着なく、有の儘に申述べるといふ所へ御目届いて此者を遣はされた、是等が家康公の長所でございます、扱大名衆一同夫より本丸に集つて評定に及び、愈よ岐阜攻の一件から飯沼小勘平國繼といふ、芝居でいたす賢勝五郎と申す豪傑が池田備中守と一騎打の勝負を致す一條に移りまする。

(第二十七席) 岐阜城攻の事、並に秀信開城の事

扱清洲の城内で池田福島を始め、岐阜の城を乗取つて二心なき證據を見せんと直ちに軍評定と相成ました處、茲に木曾川、川上、合渡の渡しと云ふ捷路がございます、夫れから川下に尾越と云ふ渡しがありますが、是れは道が遠い、ソコで池田福島が互に近い方へ進まうといふので終に口論と相成りました、夫を徳川家の軍代本多忠勝が扱ひを入れまして、福島が尾越へ着して煙りを

揚げるまでは池田輝政は合渡へ着しましても決して戦は始めまいといふ約束でございます、そこで三左衛門輝政は川上へ出張いたし、左衛門太夫正則は川下尾越へと出陣をいたすことになり其の外は清洲城内に止まり、總勢三萬四千九百八十餘人といふもの、慶長五年八月二十一日岐阜を差して乗出しました、此方は岐阜の城内には大將中納言秀信、軍評定をいたしますと、木造左衛門介、○「當城は難攻不落の名城なれば御籠城然るべし」と言上いたしたる所、赤星主膳、伊達平左衛門、入江右近などいふ倭人ども、最初より籠城いたすは拙なき策略なれば途中へ出邀へて一挫ぎに打ち破り、味方の勇を現はすべしと押切つて言上いたしました、秀信は日頃氣に入りの三人の言葉、忠臣木造勝忠の言葉を用ひず、終に出陣と定まりました、先陣は木造左衛門介千五百餘人、二陣は百々越前守千五百人、旗本左右は中島宗右衛門、津田藤左衛門一千人、大將秀信五千人、川手前閣魔堂といふ所まで繰出し、先陣の先手は木曾川の川端へ着し、備へを立て、控へました時に合渡の渡し口へ乗込んだ池田三左衛門、堀尾信濃守、淺野左京太夫、一柳監物、此手の同勢一萬二千人、八月二十二日の早天、川端に押來つてキツト向ふを見ますと、木曾川の流れば瀬枕立つてゴゴツと押流れ、底深くして渡る瀬もない様子、致し方もございませんから拳を握つて控へて居る處へ、簑笠を着しましたる百姓が彼れ五十人ばかり、ゾロ／＼やつて参りまして、釘抜の紋附たる大旗の翻へつて居る、一柳監物の陣所へ参り、○「恐れながら申上ます、私共は黒田村並に戸田村の百姓ですが、御領主様が御出陣をなさいましたに就て、此川の淺



瀬を御案内の爲め出張りましてございませぬ、どうぞ私共の跡へ尾てお出で下さいませし」と先きへ立つて此百姓が川の瀬踏をいたしました、是は一柳の領分二ヶ村で五千石ばかり上ります所此監物といふ人は平常領分の百姓を深く憐みするに因て、此ういふ時に御領主様へ御手柄をおさせ申さうといふ心から頼みも致しませんのにゾロ／＼やつて参つたので、左れば上に立ちまするお方は下を憐まなければなりません、ソコで監物に於ては陣頭に乘出し、印の花緞の鎧に同じ毛の兜を頂き、猩々緋に金釘抜の縫紋なしたる陣羽織を着け、黒き馬に銀覆輪の鞍置で打跨がり二間柄の槍を取つて合渡の渡しへ乗込みました、第二番に續いて乗込んだるは輝政、舍弟備中守長義、萌黄糸の鎧に同じ毛の兜を頂き、月毛の駒に打乗りて大音揚げ、長兄は大將なれば、煙りの見えぬ其中に進むことは叶はず、汝等我れに續け、一柳に劣るな」と馬を泳がせ押渡る、之に續いて池田、一柳の同勢我れも／＼と合渡の河中へ乗込みました、之れを見て堀尾、淺野の諸軍勢、騎馬武者は轡を列べ、徒士は人筏を組で逆巻く流れを物ともせず惣軍一萬二千人、向ふの岸へと押渡る、川の向ふに備へたる百々越前守、木造左衛門烈しく鐵砲を打掛け、又は防ぎ矢を射掛ると雖ども、寄手の同勢倒るゝ者には目も呉れず、勢ひ鋭く攻め立てます、之が爲めに城方に於ては忽ち潰れ立つて米野といふ所まで退きました、此時一柳の家來大須賀權太夫といふ者只一騎味方を離れて追ひ立てたれば、城方より竹内清兵衛と名乗り、權太夫と槍を合せて三四合争ひました、一聲叫んで權太夫が突出す槍先に清兵衛を突き伏せた所へ、清兵衛の弟竹内長左衛門

兄の敵覺悟しろと突て掛つた、大須賀權太夫又々長左衛門を突き伏せて首を取り實檢に供へんと首を提げて引返す、時に城方より赤皮胴の鎧を着し、赤き母衣を掛けて鹿毛なる駒に打跨がり、皆朱柄の槍を携さへて眞赤の扮装を爲し、駒を飛ばさせ眞一文字に乗込み來り、〇斯く申す某しは飯沼小勘平國繼なり、汝が打たる首を返せ、又た其方の首を夫にて申受けんと矢庭に打て掛る、權太夫心得たりと小勘平と渡し合ふ、此人こそ飯沼重左衛門の舍弟岐阜方に於て有名の豪傑でございませぬ、芝居や淨瑠璃では壁勝五郎といつて、初花などといふ女にデレ附く所があるが、中々そんな人物ではない、流石の權太夫も既に危く相見えしました、一柳監物遙かに之れを見て、監權太夫を討たするな、大須賀を救へや」と大音に呼はりますゆゑに、一柳の家來五六騎、馬を飛ばして乗附る、城方の大將百々越前守も亦、越飯沼を討たするな者共進め」といふ下知の下に前田半左衛門、藤田權左衛門進み出で、一柳の五六騎の兵と打合ひます、此方は權太夫小勘平人交もせず打合ひましたが權太夫は最早六十餘の老人、小勘平は壯年なり、殊に新手でございませぬから終に飯沼の爲めに股を突かれ、落馬に及びましたる所を小勘平馬より飛落り權太夫の首を取て後ろを見ると澁江七兵衛といふ人が参りました、小七兵衛此首を旗本へ持つて参つて實檢に供へると竹内兄弟の首と大須賀權太夫の首とを渡す澁江七兵衛三ツの首を持つて引返さうとする、一柳監物之を見て、監誰かある、權太夫の首を取返せ」と大音に呼はりましたから、監物の家來兩人、澁江七兵衛に突て掛つた、七兵衛心得たりと大太刀を打振り二人を切り捨て、其



儘首を提げて引返さんといたしまする監物大いに怒つて自から馬を飛ばし、眞一文字に乗附けて七兵衛に突つて掛るを七兵衛心得たりと、太刀を揮つて十二三合打合ひしが打物業は面倒と得物を投げ捨てムンツと組んだ所が監物は前名一柳市助といつて太閤秀吉公に仕へ、武功を以て大名に取立てられた豪傑でありますから、到頭七兵衛を捻倒し、其首を掻き落して大須賀權太夫の首を取返し、ヒラリと馬に乗つて引揚やうとする時に、城方の兵十餘人一度にドツと打て懸つた、監物物ともせず、七人まで其所へ突伏せ、其身も七ヶ所の手傷を受けて馬より落ち、アワヤ討死と見えたる時に一柳の家來山室五郎兵衛、一柳玄蕃、小川又右衛門、矢野儀右衛門等、彼是れ十四五騎馬を乗附げまして、漸々敵を八方に逐ひ立て、大將監物を助けて後陣へ引き揚ました、此方は飯沼小勘平、大須賀權太夫を討取た其時に馬が他へ飛び去て了ひ、徒歩立になつたま、敵の眞中へ突入り八方へ當つて奮戦いたし、槍先きに向ふ者はバタ／＼と突き倒す、輝政の弟池田備中守此の體を見て、備中守は「憎き彼奴の舉動哉、掴み殺して呉れん」と馬を飛ばして眞一文字に馳せ向ふ、此時傍らに居りました伊藤與兵衛といふ家來、與恐れながら御前軽々しく彼れにお向ひなさるゝには及び申さず、多寡の知れたる小敵にござれば某しへ御任せ遊ばすやう「備中守」イヤ／＼と與兵衛其所退け、彼れは適ばれ巧者の武士、我れ自身に勝負をいたす」と留める與兵衛を退けて槍を捻つて突掛つた、小勘平も同じく槍を取つて打ち合せ、二十餘合戦つたが勝負更に決しません、備中守は馬乗小勘平は徒歩立ち、徒歩と馬乗では大層働きが違ひます、夫が爲めに小勘平氣

をあせつて其の所へドーと倒れた、備中守之れを見て槍をガラリと投げ捨て、馬より飛び下りて取つて押へんとする時に、小勘平ムツクリ刎起き、ヤツとばかりに引組んだ、備中守心得たりと搔摘んで、二間ばかり向ふへドーツと投げ附け、備中守與兵衛彼奴の首を取れ」ハツと答へて伊藤與兵衛躍り掛つて終に小勘平の首を取りました、備中守カラ／＼と打ち笑ひ、其儘乗り放したる馬に打乗り、益々敵中へ突いて入つた、流石は池田勝三郎信輝入道鬼勝入齋の三男であります、此時飯沼小勘平の太刀を伊藤與兵衛が分捕りました、三池の傳太光世の鍛へたる名刀であります、伊藤與兵衛の家々に代々寶物として傳へられました、扱城方に於ては追々色めき立つたる所へ、淺野左京大夫、堀尾信濃守、砂煙を立てて押し來り、池田三左衛門輝政は總軍を下知し押寄せます、百々越前守は木造左衛門に向ひ、越前守大將の旗本へ引揚げ、新手と共に二の目を持たる、やう、某し此所に留まつて防戦いたす「左」然らば」とあつて、木造左衛門介は旗本を差して引揚る、城方の兵士に於ては之を知らず木造が逃ると心得て我れ先きにと引き退くから、百々越前守鞍笠に立つて大音揚げ、越前守等心得違ひをいたす勿れ、木造勝忠は旗本へ引返して大將の御出陣を勧めるなり、汝等は踏み留まつて此敵を喰ひ留めよ」と厳しく下知をいたしまするが、寄手の勢ひ烈風の如くでありますから城方の兵耳にも入れず大崩れとなつて敗軍に及びました、時に中納言秀信の斥候佐々彌三郎、味方の敗軍を見て本陣へ馳せ歸り、彌三郎御注進申上ります、先手悉くの難戦でございます、大將新手を以て二の目に御進み遊ばし、早々御出陣あつて然るべし」と申上



た、之れを聞くと秀信の旗奉行増田藤右衛門中島宗右衛門、〇「恐れながら御前速かに御同勢を従ひ御出陣あつて然るべし」といふ時に中西與左衛門、入江右近など云へる佞人秀信の馬脇にあつて、先手の敗軍を聞きと色を失ひ、右「上には早々御引揚げ遊ばされ御籠城相成るやうに」とブルブル顛へながら言上致しました、中島宗右衛門大いに怒り、宗「コレ御邊等は最初御評定の節我々共が籠城を御進め申上げたる其時は出で、戦へと入らざる御意見を申し今味方の敗軍を見て引揚げ籠城し給へとは事訝しき一言、此ま、此處を引揚げなば味方は塵殺しになるは必定、速かに御出張之れあるべし」と宗右衛門に於ては瓜の紋附いたる大旗を眞先に進めて乗出だしました、時に大將秀信一言も發せず、第一番に馬を返して岐阜城を指し、ドン／＼逃て終つた、城方にも英雄數多ありと雖も肝腎の大將が逃るのでございませぬから、據なく百々越前、木造左衛門始め、何れも岐阜城を指して引揚げました、初め一萬の同勢でございませぬのが、五千入城へ引揚げ残る五千は或は討たれ或は傷き、或は行衛知れずの者もあり、骨灰微塵の敗軍を遂げました、寄手は思ふまゝに打ち勝ちて城兵の棄てたる武器を分捕り、凱歌を擧げて備へを固め、合戦明日と定りました、扱て城内では大將中納言秀信本丸へ諸大將を集め、秀「今日は誠に存外の不覺を取つたが重ねては斯様な臆病はいたさん、明日の一戦に汝等心を勵まし、決戦いたすやう」木造左衛門が苦笑をして、左「又々明日御持病の起らざるやうに御下知遊ばされ度く、君今日の如き御舉動にては迎も防戦は相叶ひません、以來屹度御慎み遊ばすやう」秀「如何にも以來決して臆病は出さぬ、

潔く最後の酒宴をいたさん」と茲で酒盛をいたして後、手配りに及び、山下口は増田藤右衛門元綱、同じく藤三郎元房一千人、大手七曲り口、木造左衛門千三百人、蝮谷口は百々越前守一千人、荒神が洞は旗本、近習の若侍、中西主膳大將として一千人、赤木戸口には中島宗右衛門一千人と斯く嚴重に手配りをいたしました、茲處にお話し變つて福島左衛門太夫正則、細川越中守、加藤左馬介、川下の尾越を渡つて人數を進めると、竹ヶ鼻といふ所を固めました、石田方の毛利掃部、花村半右衛門、梶川三十郎城内より打つて出で喰ひ止めんといたしましたが、細川加藤福島島の三手の同勢手強く押掛りますから、毛利花村梶川の三人は關東方へ降参をし寄手の同勢無二無三に乗り破らんとする其勢ひに恐れ、毛利花村梶川の三人は關東方へ降参をして終ひ、城將杉浦五郎右衛門は討死をいたしましたから竹ヶ鼻に於ては終に落城に及び、茲で福島加藤細川の三將は凱歌を作つて多羅尾といふ所へ陣を取りました、然るに廿二日の夕方になつて承ると池田三左衛門が合渡の渡しを越えて米野の合戦に大勝利を得、荒田村といふ所へ押詰めたるよし、之れを聞くと福島正則大いに怒り、三左衛門輝政我れ等を出し抜くこと以ての外なりと、早速使ひを出だして兼て清洲城内で約束をして、煙りを揚るまでは戦ひをいたさざるはすなるに其の約束を違へて輝政一人、岐阜城を乗取らんといふは甚だ其意を得ず、さういふ次第なれば弓矢八幡大神に誓ひ、敵と戦を止めて其許と一戦いたすであらうといふと、池田三左衛門三「是れはどうも誠に氣の毒千萬、何の煙りだか知らんが尾越の方に煙りが見えたから、扱は福



島の合圖と心得合戦に及んだ、シテ見れば合圖の煙りではなかつたか、ハテ何の煙りであつたか  
 大方湯屋の煙りでもあつたらう」と茶にして挨拶をなされた、福島の家來立歸つて其通りを主人  
 へ語ると正則益々憤り、槍を小脇に搦込んでヒラリ馬に打跨り、従者も連れず只一人馬を飛ば  
 して池田の陣へ乗り込んで來り、正「三左は何所に居る、三左は何所に居る、三左々々」と宛然雷  
 の落ちるやうな大きな聲で怒鳴り込んだ、池田三左衛門は陣中に於て御舍弟備中守長義・御子息  
 池田新藏利高と三人でお話をなすつて居ると三左々々と大變な聲で我鳴り込んで來た、扱こそ福  
 島めが怒つて來た、逢ふと面倒と思ひ、御舍弟と御子息に目配せをして幕張りの外へ飛び出し、  
 其場を外して終つた處へツカ／＼と乗り込んで來た左衛門太夫正則、槍を毘沙門突きに突き立つ  
 て内兜に明星の如き眼を怒らし、邊りをギョロ／＼と睨め付け、正「三左はどういたした、何所  
 に居る」新藏利高、後年武藏守と云はれたる名將、此時御年が十五歳、何といつてもまだ小兒で  
 ございませすから正則の勢ひに驚いて何とも御挨拶が出来ません、弟備中守長義が夫へ出で、長  
 さで福島殿兼て御約束でござるから、手前方では合戦を見合せて居りました所、城方の兵川を渡  
 つて押寄せたれば據なく此方よりも進んで合戦仕りました、斯様な時には尊公でも御見合せは出  
 來ますまい、是非とも御合戦をなさるでございませう、此邊を能くお考へ下さるやうに」と申述  
 べました、福島といふ人は恐ろしい猛勇な方だが、議論をした日には少しも口の利けない御方  
 だから一言の下に閉口して了つて、正「貴公と乃公と何も議論をする所はない、元々貴公は乃公の

對手でない、三左衛門に然う云へ、人を馬鹿にした奴だ三左がさういふ了簡なら乃公の方にも了  
 簡がある、後で泣ッ面をするなど能くいつて呉れ」とブツブ腹を立ち、自分の陣中へ歸つて來て  
 御家來方を集め、正「忌々しい奴は池田三左衛門だ、どうかシツベ返しをして呉れたいが、好い考  
 へはないか」吉村又右衛門進み出で、又「然らば斯様遊ばしては如何で足輕共の中に心利いたる  
 者を五十人ばかり選み出し、火薬を持たせて岐阜の町へ出して置き、池田の同勢が進んで參つて  
 其の旗の手が見えたらば池田の兵の進む先へ火を掛ける、前へ進むことが出来ないから外の道へ  
 廻る、又其所へ火を付けて何でも構はず池田の行く先へ／＼と火を放ち、一日池田勢を、マゴ  
 マゴとして其中に此方に於て岐阜の城を乗取つて了ひ、三左殿に鼻を明さしてやりましては如何  
 で」正則手を拍つて喜び、正「又右衛門、旨いことを考へた、早々放火役人を選んで今の中に岐  
 阜の町へ差向けろ」岐阜の町人こそ災難で、放火の五十人もあつた日には堪るものではない、さ  
 て其翌日になると、一手は岐阜城へ向ひ、一手は瑞龍寺山を攻立てる、所が此所を固めたるは梶  
 原彦右衛門、同じく彌助の干餘人烈しく鐵砲を打ち出だして、必死に防戦をいたし夫れが爲めに  
 寄手の同勢、進み兼ねて暫し猶豫いたしたる時に城將梶原彌助城門サツと押開いて三百餘人眞  
 一文字に打つて出でました、引續いて梶原彦右衛門四百餘人を従へてドツとばかりに押出だした  
 る有様、此攻め口は頗る難所にして曲りくねつて、誠に峻しい山道なるに、拳下りに突いて下り  
 ますることゆる、寄手の同勢に於てはドカ／＼と麓の方へ追ひ立てられた、勝ちに乗つて梶原兄



弟勢ひ烈しく追ひ立る中に、突然麓に於て鬨の聲がドツと揚ると見えたるが、眞先きに白地へ丸に違ひ鷹の羽の紋打つたる大旗を進め、銀の菅笠猩々緋馬連の大馬印を押立て慶長名代の荒大名の其一人、淺野左京太夫幸長采配を取つて烈しく下知をなし、崩れ立つたる味方の兵を外に見て大手を乗つ取らんといたす、夫れが爲め城兵大いに驚ろき、忽ち城内へ引返さんとする時に、淺野の同勢附け入りになさんとする様子、此時城方より取つて返した一人、白糸の鎧に同じ毛の兜を頂き、月毛の駒に朱の鞍置いて打跨がり、槍を捻つて朝比奈三平と名乗りを揚げ、寄手の兵に向つて突いて落す、之を見ると淺野の陣中より乗出したる一人、黒糸緋の鎧に同じ毛の兜を頂き、白地に金を以て鬼の一字を現はしたる陣羽織を着いたし、箕浦新左衛門と名乗つて打つて出で、忽ち朝比奈三平を突いて落し、猶も城方の兵の眞只中へ突入り、當手の一番槍一番首、箕浦新左衛門と呼はりました、之を聞くと城兵大いに亂れ、散々になつて城内へ逃げ入り、大手の木戸をドーンと閉て切つて了つた、此時淺野の同勢塀下へ犇々と取り詰めたる中に一人の武者馬よりヒラリ飛び下て塀際に駈け寄ると見えしが一人の雑兵の肩に手を掛け、身を躍らせると均しく飛鳥の如く塀裏へ飛び上り、大音揚げて、〇「當城の一番乗り龜田大隅、後して功名を争ふ勿れ」と呼はつたる時に城内より數十人槍を揃へて突き出だすを龜田大隅、腰に帶せし三尺五寸の陣刀を抜放ち繰出す槍を千段巻より切り拂ひ、終に城内へ躍り入りました此時龜田の家來我もくと城内へ乗り込み、跡に續いて箕浦新左衛門始め、ドヤくと乗り込んだることゆゑ、難なく大手の木戸

を打破つて洪水堤を切つて押流すが如き勢ひで乗り込みました、其中に淺野の家來富松彌五右衛門といふ人、一人の城兵と引組みまして捻ぢ伏せて首を掻うといたした時、一人の敵兵駈け來つて彌五右衛門の首へ切り附けた、然るに彌五右衛門は自分の首に構はず下へ組み伏せました敵の首をブツツリと掻き切つたる所が、後ろへ廻つた敵が自分の首を半ば切つた、彌五右衛門更に恐れる氣色なく、猿臂を延して後ろの敵の利腕を取つて前へ捻ぢ倒し、乗し掛つて其の者の首を切つて落し、二ツの首を取つたのは宜つたが自分の首が半分切られてブラ／＼になつて了つた、外と違つて首のブラ／＼は困る、差物をして居りました其棒へ自分の首を結び附け、漸く其所を引揚げ、早速療治をいたしたる所、程なく平癒はしましたが首が横手に曲つて了つたといふ、嘘のやうなお話だが是は實際で淺野家名代の猪首の彌五右衛門といつては後世にまで名前を轟かしたる豪傑でございます、斯くて城將討死をいたして、瑞龍寺山の砦没落に及び、淺野、一柳の同勢を乗取りました、お話變つて岐阜の大手へ向はれましたる福島左衛門太夫の八千人、加藤左馬介の三千五百人、細川越中守の四千人、三頭合せて一萬五千五百人、愈よ岐阜の大手へ取り詰めました此所を固めましたる増田藤右衛門同く藤三郎、鐵砲を打ち掛け、大木大石を投げ下しまして嚴しく防戦をいたします、夫が爲め寄手の面々色めき渡つて見えたるゆゑ、大手の城門をサツと押開き一千五百の同勢幕地に打つて出で、寄手を下り拳に追ひ立てます、大將増田藤三郎、緋緞の鎧同じ毛の兜に金の半月の前立物を輝かし、紅の母衣を掛け、糟毛の駒に打跨り二



間柄大身の槍を捻つて坂の半ばに突立ち、寄手を八方に追立てました、此時福島陣中より黒糸の鎧白星六十六間の筋兜を頂き、月毛の駒に打ち乗つて二間柄の鎌槍を打揮ひ、吉村又右衛門と名乗りながら突掛るを心得たりと打ち合せましたる時に、藤三郎いらつて繰出だす槍を又右衛門體を躲して左手を延ばし、槍の螻首を確と攔んで右の手に槍を取り、片手突きに突つ掛けました、増田もさる者心得たりと體を轉じ、同じく千段を確と握り詰めて、双方同じやうな形ちになり、互ひに槍を張引き合つて居る又右衛門といふ人は屢々戰場を往來なしたる強者、先方の力の入つた呼吸を見澄して、己の方へ引て居た槍を向へ不意に突た、藤三郎己の力が餘つて仰向



けに倒れる途端、又右衛門に於ては大喝一聲槍を奪ひ取ましたから藤三郎は馬より落ちて傍はらの谷へ轉がり込んで了ひました、又右衛門之には構ひませんで、左右の手に槍を揮ひ城兵の中へ突入り當るを幸ひ叩き倒す、續いて福島の家入星野又八、島太兵衛、細川の家來柳田五郎助、加藤の家來土方忠藏、塙團右衛門、盛岡半三郎、同く長藏など勢ひ烈しく取詰めまする、夫れが爲めに城兵忽ち大崩れに相成つて、命カラク城内へ逃げ込んで終ひました、此時アワ附け入りにされやうと見えたる所を城中から鐵砲三百挺釣瓶掛けに打出したるに由て、寄手は暫し躊躇ふ、其中に城兵は辛うじて城内へ引揚げ門を堅く閉しました、所が先刻吉村又右衛門と打ち合て谷へ轉げ落ちました、大手の大將増田藤三郎、宜い鹽梅に別に怪我もいたしませんから、樹の根岩角を傳ひ、ノコノコ登つて参りまして、見ると寄手に於ては遙か向ふの方に集り、拳を握つて城を睨んで居る、城門と確と銷してあるから城際へ参つて、藤コレノ門を開ける、藤三郎である開門をいたせ」塙の上に現はれました城兵が、兵イヤ敵が眼前に居りますから開門は出来兼ねます、塙を越して御入んなさい」藤馬鹿をいへ、大手の大將増田藤三郎が塙を越して入れるか、仔細ないから開門をしろ」外の者では中々門を開きはいたしませんか、何にしる大手の大將だ、仕方がないから、兵左様ならば御用心をなすつて早くお入んなさい」と漸々門を開けましたから藤三郎城中へ入り、藤サア早く閉めろ」と今や門を鎖さんとする時に此方に控へて居りました加藤の家來塙團右衛門、福島の家來可兒才藏、當時天下に聞えましたる大力無双の人々、彼是



れ十人ばかり此體を見ると飛ぶが如くに駈附け力を籠めて門の扉をアリヤ／＼と押す様子、城兵大いに驚き厳しく門を固めようとしたが、萬夫不當の豪傑が金剛力を出だして一度に門を押しますので終に閉め切ること能はず、ギイッドーンと城門八文字に押開いた、途端に一同抜き連れて切つて掛り、續いて寄手の同勢潮の湧くが如くに乗り込みましたるゆゑ、終々大手は破れて了ひました、城兵は七曲り口といふ所へ引き取りまして防戦をいたしましたが之れも遂に敵はず、追つ立てられて散々に敗走致しました、中に中島傳右衛門、齋藤市左衛門、伴吉左衛門といふ三人踏み留まつて、決戦なしたる此時に細川の家來澤村才八郎義次と名乗り槍を打揮り躍り込んだ、此人無双の豪傑にして三人を對手に立合ひ、第一番に齋藤市左衛門を馬より突落した、此隙に中島傳右衛門馳せ寄つて、ムンツと引組み、二ツ三ツ揉み合ひましたが組んだるまゝに兩人谷間へ墜ちたる様子、伴吉右衛門伸上つて下を見ると、六七間下で兩人組合つて居る、吉左衛門持つたる槍を取直し、一聲叫んで投げ突きに投りましたる奴が誤まつて味方の中島傳右衛門の脇腹へ中つた、傳右衛門こそ災難、途端に才八郎勿ね返して忽ち中島の首を掻き落しました、併し自分も谷へ轉び込んだ時に餘程身體を打ちましたから首は取つたが進退自由を失ひました、矢野六左衛門之を見て、家來の小田切龜之助といふ者に下知をいたし、六、汝早々谷へ下り才八郎を助けて後陣へ連れ參れ、龜之助は「心得ました」と龜之助谷へ下つて澤村を背負ひ、後陣へ引揚げて介抱をいたす、澤村才八郎は牛方から身を起して後には細川家の家來となりましたが、これを忘れぬ

爲め最初の傳の十石三人扶持を一生のけて貰つた、一萬十石三人扶持の御家老、此位珍らしい知行はありません、面白い者もありますが、こゝでは略して居きます、此方は城兵上げ木戸門といふ所へ引揚げ、二の丸を相固めました、此上げ木戸門といふは地形が狭いから開き門になりませんので上へ釣り上げ、急の時にはボタンと落して閉めるやうになつて居る、所が此上げ木戸が支へる所があつて、ドンと落ちませんから少し下に透がある、福島の家來吉村又右衛門之を見ると、四方は谷間にして茲を立て切られては、乗り込むことが出来ないから、手早く甲冑を脱ぎ捨て、素裸體に相成り、眞一文字に飛んで參り、少し下の透て居る所へ這ひ込で匍匐になつて大戸を引背負ひ、アリヤ／＼とウーンと大戸を差上げ、大音揚げたることにして、又「ヤア／＼」人々速かに此所より乗込み候へ」といふので福島の家來大崎玄蕃、長尾隼人、小關石見、可兒才藏、桂市兵衛などいふ面々心得たりと何れも下から這ひ込み、矢庭に城兵へ打て掛りました、所が誰も敵へ／＼と向ひますから、一人として又右衛門に構ふ者が無い、又右衛門大いに驚いて、又「ヤア／＼」何時まで乃公に此木戸を脊負はせて置くんか、早くどうかしないか」と怒鳴つたのが、可兒才藏と長尾隼人の耳に入つたから、○「ヤア是は大きに氣の毒であつた、吉村御苦勞であつた」と大きな石を各自に一つ宛持つて參り、木戸の下へ之を當がひ、○「サア中へ這入らつしやい」又「心得た」と又右衛門裸體の儘で中へ飛び込むと門の脇の櫓へ駈け登り、味方の者を招ぎ立て、又「遠からん者は音にも聞け、近くは寄つて見にも目よ、當手上げ木戸の一番乗り、吉村又右衛



門則道」と大音に呼ばりました、諸軍勢此一言に勵まされ、忽ち木戸を潜り入る、其中に終々木戸の扉を微塵に打毀し、細川福島加藤の同勢一齊に亂入いたしました、中に長尾隼人が二の丸の塀際乗附けました、時に、内野平左衛門といふ者先に登つて居りました、上から手を下し、平「サ



ア是れへお捉まんなさい」といふ其の手を便りに長尾隼人、飛鳥の如くにヒラリと塀へ飛び上り難なく内へ飛込みまして、手早く門を開きましたに依つて茲で二の丸も忽ち破れました、此時中島宗右衛門、一段高き所から寄手数十人を拳下りに突き落とす、吉村又右衛門之を見ると宗右衛門

が突掛ける槍を確かと搔攪み、一聲喚いて馬より引下し、難なく組み伏せて首級を擧げた、今一人深川次郎兵衛といふ者、下げ突きに隼人の兜の八幡座を突いたやつが突き損じて隼人の口中へ突ッ掛けた、スルと隼人がバリ／＼と齒で槍を噛み締め、千段巻きの邊りを取つて躍り掛り、腰に帯びたる大業物、抜き打に次郎兵衛を切つて落した、寄手の面々斯の如き猛勇の働きに、城兵一人も防ぐ者はございませぬ、お話變つて池田三左衛門輝政は、まだ戦さが始りはすまいと油断をいたして居る中に、遽かに鐵砲の音矢叫びの聲驚いて、倍は戦が始つたるか福島めが乃公を出抜いたと見える、ソレ押出せといふ下知に忽ち池田の同勢、鎧蝶の紋附いたる旗を押立て、出陣すると兼て福島が伏せて置きました五十人の放火、ソレツと云ふので岐阜の城下へ火を掛けました、何しろ五十ヶ所へ火を掛けたのだから堪りませぬ、忽ちの間、岐阜の町は一面の煙り焔天を焦すばかり、夫が爲に池田勢、少しも前へ進むことが出来ない、三左衛門之を見て怒るまいことか、三「忌々しい奴は福島正則、我が戦功を妨げると覺えたり、己れ桶屋め」と罵しつた所が仕方ないから茲でグルリと大廻りに城の後ろ水の手曲輪の所へ廻つて来た、茲は巖石峨々たる絶所にして、中々容易に進むことが出来ない、三左衛門忽ち物の具を脱ぎ捨てまして身輕に相成り、眞先に進んで葛へ取り付き、攀ち登りまするに依つて、一族の建部三十郎、家老の池田立蕃、若原左京などいふ者、劣らじ負けじと駈け登りまする、茲は太田織部、武藤助十郎、大岡左馬之助、伊達平左衛門等百五十人ばかりを以て固め、固より要害堅固の所なれば、敵の同勢是れへ来る氣



遺ひはないと、大安心をして居る所へ、俄かに池田の同勢三十人ばかり乗込んだれば、是はと驚く其の中に三百餘人の寄手の兵追々押込み、烈しく切り立てられて城兵散々に打負け、皆本丸を差して逃げ行くを追ひ掛け追ひ詰め、本丸まで到らぬ中に塵殺しと相成りました、此時は大手二の丸の合戦真最中で此手を防ぐ者一人もございませぬから、池田三左衛門岐阜城の天主を乗取り茲へ旗を樹てやうとした所が嶮岨の所を登つて参りましたので旗の準備がない、時に御舎弟備中守が兼て用意いたされたる白地に揚羽の蝶の紋附いたる旗十旒を其所へ出した、三左衛門大きに喜び、之を天主へ押樹てました時に池田名代の田宮次郎左衛門といふ人、次「只今の内に此天主に火を掛けて焼てお終ひなさるやう」と勧めました所、三左衛門之を聞いて、三「其方以ての外の事を申す、此天主は焼く譯にはならん、織田右大臣信長公の御建てになつたる天主、總唐木造りにして金銀財寶夥しく籠めてある、之れを焼て了ふといふは不都合なり」と仰しやるのは三左衛門殿一番乗りの功に仍て、之れを拜領しようといふ思召し、次郎左衛門重ねて、次「イヤ、此天主を只今の中に焼てお了ひなされば、味方に三ツの利がございます、第一に美濃一國の味方が火の手を見て、扱は岐阜落城いたしたと思ひ、必ず喜んで兵氣盛んに相成るべし、夫に反して敵方に於ては勇氣を落します事必定、第二に福島初め未だ當家の一番乗りを知らざれば、今にも正則が火を掛けますれば、當家の一番乗りは水の泡となります、第三には此天主には寶が數多これあるが故に慾に迷ひて焼き兼ねたと申されなば貴所の御耻辱にござりまする、福島火を掛け

ざる中に早くお焼捨て遊ばすやうに」と頻りに勧めましたが、三左衛門肯き入れませぬ、輝「イヤ信長公御丹精の天主をむざ／＼焼捨るは勿體なし」と彼れ之れ言ひ争ふて居る中に福島左衛門太夫二の丸の櫓へ火を掛けました、夫が爲めに後に一番乗りの御沙汰が大きに面倒に相成つたが、流石の三左衛門輝政公、之れは一生の御不覺であつたといふこととございます、時に荒神ヶ洞へ向ひました京極丹後守、嶮岨を厭はず攻め上りました、此所を相固めたるは秀信の氣に入り赤星主膳、鐵砲を打掛け防戦をいたしたる所、二の丸の櫓へドン／＼火の手が上つたのを見ると根が臆病者でありますから大將の御身の上心許なしと、忽ち他の所へ引取りましたから、京極高友に於ては一戦にも及ばず城中へ乗込み、赤星の軍勢谷間々々へ追ひ落され、死する者忽ち三百餘人高友に於ては骨を折らずに荒神ヶ洞を乗取つて終つた、此時秀信公の御守役増田藤右衛門元綱、大勇を振つて防戦に及んだが、外の口々が破れましたから今は是までと引返して来て、藤「さて諸方皆悉く破れ今は詮方なし、深く御生害あらせられるやう、我々御供いたしまする、イヤ御切腹遊ばせ」といふと秀信眞蒼になつて何とも返答がない、傍らに控へた入江右近、藤右衛門に向ひまして、右「尊公詰の天主へ御出になつて御生害の御支度をなされるやう、我々に於ても君の御供致し、御跡から罷り参する」之を守て藤右衛門心得たりと詰の天主へ参つて見ると、モウ此所は池田三左衛門が乗取り、揚羽の蝶の紋附いたる旗十旒風に翻へる有様に、藤右衛門大いに驚き、南無三と慌て、引返さんとする所を池田の同勢ドツと現はれて終に藤右衛門は茲に生擒と相成り



ました、併し是が結句幸ひで後に池田の家來となつて五千石、俸の藤三郎が三千石、親子で八千石を貰つて安泰の身と成りました、此方は藤右衛門が出て参りました跡で赤星主膳、主して入江氏、我々も殿の御供して愈よ生害いたすこととござるかな」入江右近が、右「イヤさうでない、實は降参をお勧め申すつもりなれど、彼れが茲に居ると邪魔をいたすに依て彼れを詰の天主へ遣はした次第、此間に早々御降参を遊ばすやうに」と耻る氣色も更になく、倅人共口を揃へて秀信へ降参を勧めました、之を聞くと秀信喜んで、秀「其方共天晴れ出来し居つたぞ」と赤星、入江を御賞めになる、沙汰の限りの愚將でございます、所へ百々越前守、木造左衛門引揚げて参りまして、越前最早御運の末でござる、速かに御生害を遊ばすやうに」と申上たが秀信中々用ひない、秀「予は降参いたすに依つて早々敵へ其儀を申入れる、生害は思ひも寄らん」と茲で百々木造も仕方がないから櫓へ降参の印を擧げると、寄手に於ては忽ち弓鐵砲を止め、木造左衛門城を出で、福島陣へ参り、秀信公の命乞ひをいたすと、正則速かに承知をして可兒才藏を以て秀信主従を陣中へ招きました、既に秀信公降参をいたして見ればどうしても之は助命しなければならぬ、元大恩を頂いた秀吉公の御主人右大臣僧長公の御孫に當る方であるから、何やうの事があつても助けるが當然、若し此儀に就て内府が立腹いたさなば、正則此度の軍功に代へて御詫をするといふ正則の意見、日頃猛勇の氣性に似合はぬ優しき致し方、人々大いに感心いたしました。

(第二十八席) 池田福島一番乗を争ふ事、並に後藤又兵衛奮戦の事

秀信公は遂に岐阜の城を明渡して、紀州高野山へお登りになり、慶長六年七月二十二日御病死をいたされました、百々越前守は藤堂高虎に仕へ、木造左衛門介は福島の家來となつて木造大膳と改め、其子孫は幕府の旗本に取立てられ、木造清右衛門といつて近い頃まで巢鴨に屋敷がございました、扱岐阜城没落に及んで茲に諸將打寄り、關東への注進状を認めましたる時に一番乗り福島左衛門太夫正則といたすと、池田三左衛門が、三「夫は往かん、當城の一番乗りは某した、合戦の最中に水の手より乗込んで第一番に天主を取つた」といふと、福島、正「黙れ、貴様は抜かぬ太刀の功名を望む者と見える、水の手より乗込んだる功名といふは増田藤右衛門を生擒ただけのことだ、速かに下城いたせ、異議に及ば、引摺り下してくれ」三左衛門之れを聞いて、三「推参なり正則の一言、貴様こそ櫓を下りろマゴ、いたすと打ち殺すぞ」正「黙れ三左衛門、不届きの一言」と何方も負ることが嫌ひだから、アハヤ乃傷と相見えました、徳川家の軍代井伊兵部少輔、本多中務の兩人、種々と双方を宥めました、福島も池田も中々御承知がない、スルと本多忠勝が傍らに居りました、一柳監物に向つて小さい聲で何か話をした、内所話といふものは詰らんことでも氣になるもので池田三左衛門が一柳に、三「只今本多が貴公に何を言つた」監「されば内府公の御爲を思ふなれば少し位分の儀は御互に御不勝なされたが宜しからうと、斯様本多が申した」



三「ナニ内府の爲めを思ふならば少しは不勝するが宜い……成程々々、某しは徳川家の縁者だ、是れは骨折損にいたさう、コレ〜正則、尊公一番乗りの功とさつしやい、我等はどうでも宜い尊公の手柄になされるやう」と池田三左衛門が此う云ふと並居る諸將、○「夫でこそ誠に穩かだ目出度く存する、池田の挨拶は穩やかで宜いといふ」と福島正則は固より強情我慢の御方だから、正「イヤ池田が功名にしないといふものを正則が手柄にはしない、三左衛門の捨てた手柄を乃公が拾つて功名面をする如なそんな左衛門正則ではない、夫ちやア此方も骨折損にする、其位なら最初から争はない方が宜い、ソコで加藤左馬介殿が扱ひを入れて、左、是は此うさつしやい、各々人数二百人づゝで此城を預り、兩家合乗りになされるが宜い」成程之れは至極道理の扱ひ、穩やかで宜いと諸將も同意をいたし、茲で岐阜城に於て打取りました首の中で、大將分の首百二十三を江戸表へ送りました、内府公御實檢の上之を麻布の原へ埋め、後に首塚といふが立ちました、さて岐阜の城は是で片附きました、此の岐阜城を攻めする日に大垣から必ず上方勢が後詰めに押出すだらう」と之を押へて居りましたのが黒田甲斐守、藤堂佐渡守、田中兵部少輔、長良川の川端に備へ、福島、池田、加藤の同勢が岐阜の城をドシ〜攻めするのを羨やましく思つて居る所へ、馬を飛ばして乗込んで参りましたる斥候、○「申上げます、只今大垣の軍勢合渡川の川端へ出張仕りましたござる」と告げました、之を聞いて田中兵部少輔、兵「ナニ大垣勢が合渡川へ出張した、宜し一戦の下に揉み潰して呉れん」と馬を飛ばして長良川の堤を、合渡川へと只一

人乗出だした、従ふ所の家人十八人跡へ續いて乗込んで来て見ると、是れへ出張いたしたのは石田の先陣高野越中、大庭土佐、舞兵庫、築井勘兵衛三千人の同勢、川端に於て兵糧を使つて居ります、何を申すにも木曾川に續ける名代の合渡川、ゴゴツと瀬枕立つて流れます、渡る所が分りませんから、拳を握つて水上を睨んで居る、其跡から黒田、藤堂、生駒、桑山、戸川、市橋、徳永、寺澤など都合二萬ばかりの同勢が川端までエイトウトウ繰出して来たが何分水が深いから渡ることが出来ない、石田方も敵は渡る氣遣ひないと、安心をして悠々控へて居る、





時に田中兵部少輔、近臣二三人を召し連れまして堤を下り、鹿島村といふ所へやつて来ると、一の寺がございませす、ツト玄關へ來つて、兵頼む〜」〇「ハイ」と坊主が一人出でました。兵「此方は關東方の一將田中兵部少輔である、住持に一寸對面をいたしたい」〇「ハイ」と右の坊主は驚いたる様子にて奥へ飛び込むと入れ代つて年齢六十ばかりになる老僧、念殊を爪繰りながら出て参りまして、僧「是は〜能うこそその御入來、何御用にございませす」兵「御坊は當寺の住職か」僧「ハイ」兵「長らく當村に居られやうな」僧「左様でございませす」兵「我等は今日此合渡の川端へ出張いたしたる所、何分にも川の淺瀬を知らんで渡ることが出来ぬ、御坊當村に永く居るとならば、略川の淺瀬を存じて居らうから案内を頼む」僧「是れは以ての外儀を仰せられます、愚僧は世捨人でござる、衆生を濟度いたすることは存じ居りまするが、中々修羅道の案内などは出来申さず、外方を御尋ねを願ひまする」兵「ハア然らば修羅道の案内はいたさんといふか、御坊は人が死んだ時に引導を渡すであらう、どうぢや」僧「ハイ夫は仕りまする、死したる者に對して經を誦み引導を授け、彌陀の淨土へ導いて大往生を遂げさせまするは愚僧の勤めにございませす」兵「ハア然らば御坊へ尋ねるが今度石田三成といふ者が謂れなく天下に大亂を起せるに因り、我等徳川家に味方をいたし、天下を治める爲めに合戦いたす、御坊は死人を極樂淨土へ導くといふが、死んで終つた者に念佛を唱へ、極樂へやると云ふ功德は誠に小さい、此戦ひが長引くに於ては、天下數萬の人民どれほど難儀をいたすかも知れない、一日も早く戦争が治まれば、天下億兆の人民安堵し

て其業に安んずる、されば其功德は一人の亡者に引導を授けるよりに勝れて居ると思ふ、どうだ和尚、川の案内はいたさぬか、サア夫でも出来ぬと申すか」和尚さん理詰めにされて、僧「成程仰しやる所御尤もでござる、左様なれば合渡の御案内をいたしまする、どうぞ一寸お待ち下さい」と云ひながら、僧「コレよ三郎右衛門、三郎や〜」と大聲に呼はると、臺所から出て参りましたのは飯焚の三郎右衛門といふ男、身の丈六尺ばかりございませす、恐しい強さうな人物、僧「アノ殿様が合渡の淺瀬を教へると仰しやるから一緒に參れ」三「ハイ〜畏まりました」和尚が先きに立つて出でましたが此邊に渡す所がございませせん、遙か川上の加賀島の邊り、此所はどんな出水の時でも渡ることが出来ませす、僧「サアお出でなさい」と先きに立つて案内をした、田中兵部少輔大いに喜び、同勢二千五百人を従へて川上の方へ急いで参りまする、黒田の家來後藤又兵衛之れを見て、ソレ田中の跡へ續いて行くと人數を進めまするから、後藤の家來黒川平右衛門、平「何で田中の跡へお附きなさる」又「那れを見ろ平右衛門、田中の同勢川上へ急ぐ後へ尾て行けばキツト淺瀬があるに違ひない、何でも宜いから田中の跡へ續け」平「成程宜い所へ御氣が附きました」と後藤の同勢ドシ〜出掛るのを見ると、黒田甲斐守の御同勢も引ツ續いてエイトウ〜押出だした、時に田中兵部少輔加賀島へ参りますると件の和尚、僧「三郎や、早速淺瀬を御目に懸るやう、御苦勞だが那れへ這入らつしやい」三「ハイ」と三郎右衛門が衣類を脱いで今川へ入らうとする時、田中兵部少輔、兵「コレ〜其方川へ入つて決して淺い所を早く知らせては往かんぞ、後を見ろ黒



田の家來後藤又兵衛が此方の跡に尾て来る、何でも此邊一面に深い體に見せ、彼奴等を逐ひ拂つた後で浅い所を知らせろ」三「へエ」  
 畏まりました」頓て三郎右衛門ドブーン水中へ飛び込んで抜き手を切つて参りましたが、川中へ行くと態と己れの身體を潜つて終ひ、何所も此所も深いやうに見せ掛ける、馬上に伸び上つて之れを眺めて居りましたが、流石の後藤又兵衛も田中に一ぱい簞められて、此邊に淺瀬は更にない、ソレ川下へ下れと、忽ち黒田後藤の同勢はドン／＼川下へ引き揚げて終ひました、兵部少輔これを見て大きに喜んで、兵部少輔又兵衛の狡猾野郎を終々欺かしてやつた、先づ宜い鹽梅、サア宜いから三郎右衛門早々浅い所を教へろ」三「へエ夫なれば御覽に入れます、此所は浅い所でござる」と忽ち川中の淺瀬を教へるに依て、兵部少輔雀躍に及んで、兵部少輔我れに續け」と眞先きに川へ乗込めば從ふ所の近臣二十餘人、同じく馬を躍らせて、ザブーン／＼と乗込みました、固より淺瀬のことでありますから難なく向ふの岸を臨んで乗り附る有様、之に續いて田中の同勢ドン／＼淺瀬を乗渡る、石田方の斥候伊庭作兵衛遙かに此の體を見て、伊「ヤア那れに控へたアノ裸體の奴が此川の淺瀬を知つて案内をいたすと見えたり、憎くき奴哉、イデ彼奴を討ち取りくれん」と馬を飛ばして合渡川へ乗込み三郎右衛門といふ飯焚男を只一槍と突掛けた、三郎右衛門之を見ると忽ち身を躍らしドブーンと水中へ飛込んで了つた、馬上に立つた伊庭作兵衛、彼奴めが何所へ逃げ居つたか、ハテ何所へ行たかと頻りに水上を彼方此方睨み廻して居る中に、三郎右衛門水中を潜つて参り、作兵衛の足首を引捉んでウーンと力に任せて

引いたから水煙りを立つて伊庭作兵衛水中へ陥つたる所を、足を捉へたま、水の中を引張り、散散引廻したから作兵衛に於ては水を食つて忽ち腹は布袋のやうに膨れ、大概弱つた所で合渡川の中洲へ引摺上げ、作兵衛の差して居る刀を引抜き、其首を打落して着て居りました鎧兜から籠手脛當、槍大小はいふに及ばず、残らず奪ひ取つて手早く己れが着用いたし、槍を搔込んで見ると作兵衛の乗て居た馬が中洲の所を泳いで居る、之れ幸ひと鞍へ手を懸け、ヒラリ飛移つて一韃當ると馬は向ふの岸へ眞一文字に乗上げました、時に三郎右衛門大音揚げ、三「遠からん者は音にも聞け、近くは寄つて目にも見よ、今日合渡川の一乗乗り、田中兵部少輔の身内に於て」と怒鳴つたが鹿島村の寺男三郎右衛門とは流石に言ひ憎い、ヒヨイと向ふを見ると、合渡川の流れに氣が附いたから、三「合渡三郎右衛門敵の斥候を打ち取つたり」と呼はり、槍を捻つて石田方の同勢目蒐けて突き入つたる此男中々の剛の者、戦さ相濟んで後改めて田中少輔の家來に取り立てられ、後年田中の御家が潰れましてから徳川家へお召出しになつて、本所の石原に公儀の旗本で百五十石、合渡三郎兵衛といつて子孫繁昌をいたしました、さて田中の同勢は二千五百人一度に押渡る流石の大河も人馬を以て堰切るばかり、川の向ふに備へたる石田方の舞兵庫、杉江勘兵衛の二人必死となつて田中勢と戦ひました、此時に藤堂佐渡守高虎は、川下十丁ばかり下つてゴゴツ水が流れて居ります所を速かに押渡れといふ下知、夫を御家來方が、〇「此邊は川中が至つて廣く殊に底深きやう相見えまするから、お控へ遊ばすやうに」と止むるを高虎、高「アレを見よ、此



邊に馬の脊が多く落ちて居る所を見れば常に人馬の渡るに相違なし、ソレ押渡れ」といふ仰せに藤堂新七、同く玄蕃、同く仁右衛門轡を列べて逆巻く水中へ乗り入れた、之に續いて三千人徒士立ちにて手に手を取合ひ人筏を組んで乗渡ります、黒田甲斐守の御同勢に於ても、同じく押渡り来る有様に此所を固めた石田の家來高野越中、大庭土佐二千人には關東勢に渡り合ひ後詰の人数が来るだらうと、夫を頼みに踏み留まつて血戦する、關東方は又大垣から後詰の出ない中に打破らうといふ意氣組みにて互ひに引くな進めと挑み戦ひましたがついに石田方黒田の勢ひに當りがたく、色めき渡つて見えたる時に高野越中の陣中より高宮新八、村松勘之丞といふ二人徒士立ちとなり、長さ八尺ばかりございまする、赤檜八角に削り上げたる棒を取つて、關東勢の眞只中へ躍り込み、當るを幸ひ打ち伏せまする、夫が爲に流石の黒田勢も進み兼ねて見えたる時に、高宮新八棒をカラリと投げ捨て、甲冑を脱ぎ棄てまして小具足になり、大手を廣げてサア来いと仁王立ちに突つ立つた、黒田の同勢之を見ると、ソレ彼奴を生擒れと、八方より新八望んで突掛ると高宮新八といふ者名代の角力取でございまして、引組んでは押倒し或は捻ぢ倒し、十一人までバツタ〜と手玉に取つて投げ附けた、村松勘之丞も又角力が好きで高宮の弟子でございまして、此體を見ると是れも同じく甲冑を脱ぎ、サア来いと大手を廣げて立ち上り、黒田の兵と渡り合ひ同じく手玉に取つて投げ飛ばす、昔の戦さは暢氣なもので、戦ひの最中に角力を始めた、高宮、村松の兩人が手玉に取つて投げ附けるに依つて、さしもの關東勢に於ても少しく怯んだる時に後藤





又兵衛基次之れを見るより、又「イヤ物々しき彼等が舉動、イデ目に物見せん」と陣頭に乗出だしたる扮装は黒糸厚鐵の鎧に、六十四間筋鐵打つたる兜を猪首に着なし銀半月の差物を高く、サツと差し上げ黒き荒馬に朱の鞍置いて打跨がり、悠然として陣頭に進みました、敵も味方も之れを見るに、〇「ヤア後藤が出た、ソレ又兵衛が」と何れも指さして其武者振りを賞めました、斯くて黒み渡れる石田勢の中へ疾風の如くに乘込み前なる敵は馬の前足にて煽り倒し、後ろの敵は後足にて刎ね飛ばし、近づく奴は左右の手にて搔摘み、人礫に投げ飛ばして縦横無盡に乗り廻る、其有様は猪の暴るに異ならず石田勢に於ては後藤一人の爲めに駈り立てられ、浮足立つたる時に例の角力の名人、大力の高宮新八、後藤又兵衛と組まんと馳せ寄て馬より引き降さんとすれども後藤の草摺は今水中を渡つたばかりゆゑ、濡て居りましてツルリ〜と手が迂る、何分大力の新八も馬から引下すことが出来ない、又兵衛は馬上から搔摘んで投ようといはしましたが高宮も去る者ヒラリ〜と身を引て捉らない、又兵衛基次面倒なりと、腰に帯たる備前吉廣、三尺三寸の陣刀に手が懸るや、片手打ちに大袈裟掛けに切下ろしたる事ゆゑ、何條以て堪るべき血煙り諸共打倒れる、之を見ると村松勘之丞師匠の敵と最前投げ捨たる赤檜の棒をもつて後ろより打て掛りました、後藤は振返りながら眞向より打下し、是又脳天より殻竹割りとなつて倒れました、又兵衛此時戦さは斯くこそする者なれと莞爾笑つて件の大太刀を振翳して石田勢の中へ切て入つたればこれに氣を得て關東方の諸軍勢、大波の如くに打て掛る、茲に至つて石田方の高野越中、大庭土佐

杉江勘兵衛、舞兵庫散々に崩れ立ち、大垣を差して引揚げました、時に小西の先陣木戸作左衛門宇土野長右衛門、筑木茂兵衛、二千餘人押寄せ來り、味方の敗軍を見て横合より槍を入れたるを藤堂の同勢三千人、之に當り、名代の高虎の家來梅ヶ谷岩夜丸小西方の戸塚仙右衛門、筑木茂兵衛の兩名を討取り之に依て小西勢も又散々になつて大垣へ敗走に及び、茲に關東方十分の勝利となつて八月二十三日の戦ひは終りました、此時石田三成を始め諸大將、大垣より押出して居られましたる島津兵庫頭義弘、石田の陣へ使ひを立てまして、味方敗軍の趣き、速かに出張いたし敵勢を挫ぎ味方を救はんと申送つた、三成答へて定めし岐阜落城と見える、然れば一先づ大垣へ引取つたが宜からうといふ挨拶、傍らに控へました島左近友之、左「恐れながら島津殿仰せられる通り、速かに御出張あつて一戦遊ばされたが宜しうござる」と諫めましたが何分三成が承知をいたしません、どうしても大垣へ引揚げたが宜いといふことで據るなく左近友之、左「然らば某島津殿と諸共に出陣を仕つる」三「イヤ〜夫は以ての外宜しくない、兎も角引揚げたが宜い」と島左近の意見を用ゐず無理に大垣へ引取りました、三成は徳川内府出馬になつた其時、天下別目の一戦をなさんといふ考へでございまして、今益もない小戦闘をいたすより其方が宜いといふので、遂々大垣へ人數を引揚げました、茲で關東方は川を押涉り、思ひの儘に追討を掛け、赤坂の上の方に岡山といふ地がございます、是へ陣取りました、此方は島左近、何分にも三成が諫めを用ゐませんから據るなく引取りましたが大垣の城内へ這入りまするは餘りの事と思ひ、本街道より大



垣へ別れまする道に、白地に抱茗荷の紋附いたる旗、銀唐人笠の馬章を押立てまして一千餘人の同勢備へを立てました、斥候を出し先手の様子を窺はせると、關東勢は赤坂に備を立つたといふこと、ソコで島左近大垣の城内へ乗込んで、敵の同勢は云々だから速かに夜討をお掛け遊ばせ、必らず勝利を得られると勧めましたが、三成トンは是を用いません、處へ、〇申上げます、只今岐阜落城をいたし、中納言秀信は降参をいたしましたしてございます」傍らに居られました島津兵庫頭義弘、岐阜が落城したと聞くと大きに驚ろかれ、義「舍弟中務太夫家久洲の俣に在城いたして居る、扱は家久の一命が危ないから、速かに出兵に及んで中務を救はなければならん」三成是を聞いて、三「イヤ、お捨置きなさい、今に中務殿が引揚げて参られるであらう」是を聞くと島津義弘公は篤實の御方で在つしやるから、お顔の色がサツと變つた、義「さて、治部殿は義といふ事を御存じない人だ、我等由なき人に與いたした、今出兵いたして救はざれば中務は捨殺しに相成る、主人の大事は家人が代り、家人の難儀は主人が救ふ、是萬古不易の理と申すもの、斯いふ義弘が難儀をいたす時、我等が郎黨に命を惜む者は一人もない、申すは如何なれど治部殿如き人の一大事の時に主に代つて大事を救ふ家人はござるまい」と遠慮もなく大音に仰せられた、傍らに居りました島左近友元大きに驚ろき、南無三一大事出来をした、此所で島津の心を損ねては容易ならざる大事と思ふから、其所が頓智といふもので、左「イヤ此儀は豫々主人某へ申付け置かれまして事でござる、夫ゆる只今右様な御挨拶をいたしました、ドレ某出張仕り中務殿をお連れ申

すでござらう」と、ズイと其所を立ちました、義弘公之を聞くと正直なお方だから忽ちお心が解け、義「ハ、ア扱は左様であつたか、イヤ夫は大きに失禮を申してござる、御機嫌がスツカリ直りまして島左近友之と共に人數七千人を従へ、迎ひ備へとして大垣から洲の俣へと繰出した、關東方の黒田甲斐守の同勢此體を見ますると、扱こそ西國名代の島津の同勢、ソレ押寄せて微塵に打挫がんと、一同勇み立つた時に後藤又兵衛基次馬上に伸上つて、遙に此の體を眺め、又汝等猥りに手出しをいたす事勿れ、是は島津の軍勢戦ひに出たのではない、正しく洲の俣の兵を救ひに繰出した、無益の戦ひはいたすに及ばんから左様心得る、其方共一人として陣門の外へ出る事あるべからず」と又兵衛がビタリと一同の兵を留めましたが果して後藤が見切つた通り、島友之、島津義弘は洲の俣の城に火を掛けまして、中務太夫と共に大垣の城内へ引揚げました、是を三幅對といふ、島津の義心、島左近の頓智、後藤又兵衛の見切り、天晴武士は斯ありたきものであると後世の美談に遺りました、扱其日の暮方に相成り俄に大軍大垣をさして押して参ります、城内の兵大きに驚いて、スワ大軍當大垣へ取詰めるわと、上を下へと騒ぎますから島左近友之櫓へ登つて見ると太鼓の丸の紋附いたる大旗を押立てまして繰込んで来る、是即ち浮田備前守秀家の同勢、島友之、左「汝等決して騒ぐ事勿れ、是は浮田の一備、當城へ引揚げ來つたのである、鎮まり候へ」と八方へ使番を出して城内の騒動を鎮めました、是は秀家が太田と申します所を固めて居りましたが、岐阜の城が落城をいたしたに依て、大垣へ引取つて参りましたので、扱備前守



秀家、城中へ乗込んで石田に對面をして、秀我等荒手の兵を以て夜討に出掛けようと思ふが如何でござる」三成是を聞いて、三「イヤ敵も其邊には定めし用心もござらうから、先づ〜お見合せが宜い、固より浮田は石田に頼まれました人だから石田次第、秀夫なら夜討は止さう」と其儘止まりました、是が關東の幸ひで六韜の十四編に敵人新に集まる所を討つべし、人馬食せざるを討つべし、天の時に従はざるを討つべし、長路を來るを討つべし、難路を來るを討つべし、水を渉るを討つべし、疲勞するを討つべし、皆是大公望が武王を説たる兵法でございます、されば石田が此時に討たざりしを後に聞く人後悔せざるはございませぬ、斯様申すと石田は取るに足らん愚人の様に聞えますが、石田には又相當の考へがあるといふものは、寄手は三萬五千で自分の方は十二萬八千の軍勢だ、大軍を持つて居ながら小勢の敵に夜討を掛ける、こんな馬鹿な話はない、これでは勝つても恥だといふ議論で、此も一應尤もな次第で御座います、扱お話し變つて武州江戸の御城内へ徳川内大臣家康公、下野小山より御歸城に相成りまして後、御家人は上方御出陣の御觸出し皆一同に用意をいたし仲間小者に至りますまで草鞋路錢を腰に附けまして、お城のお立陣前お槍立の柵に虎の皮の御長柄を立て、御床の上には金五本骨扇の馬章を押立て、今にも御出陣あらせられる體で、二十日ばかりといふもの御延引、家康公は毎日々々何だか物待顔に西の空ばかりを御覽になつて居る、時に岐阜落城の注進が來ると、即刻九月一日愈々御出馬といふ事を仰せ出されました、是即ち太閤取立ての大名加藤、福島、池田、淺野、黒田を始めとして大丈

夫味方と御安心を遊ばされました、愈々出馬といふ時に芝増上寺存應上人が、存「恐れながら御勝戦のお祈り仰せ付けられて然るべくと存じます」家「何れへ申付けたが宜からうか」存應が、存「御意にございます、神は鎌倉の八幡宮」家「イヤ八幡宮は我常々信仰致して居るに依て改めて祈るに及ばん、神は鹿島、佛は淺草の觀世音が宜い」といふ御汰沙でして、兩所へ早速御祈禱を仰せ付けられました、是は右大將頼朝が昔し平家追討の節、右の兩所にて祈禱をいたしました、舊例の式法を以て仰せ付けられましたので、時に存應上人が、在「川越喜多院の南光坊天海、此者へ仰せ付けられるやうにといふので、九月一日淺草に於て七日護摩を焚いて鹿島の大神へは禰宜神主が集まりました、是人祈詞を上げ勝戦のお祈りをいたしました、兩方で一週間のお祈りがあつて九月十五日、丁度申の刻家康公の御陣所へ、淺草の觀音様から護摩のお札、觀音のお守り、鹿島の大神宮よりは御武運長久のお札、坊さんと神主が一緒に差上げました、此時戦ひの眞最中、家康公御近習に青竹を切らせまして先を二ツに割り、其處へお札を挟み、夫を戰場へ立させました此お札がたつと同時に松尾山から金吾中納言秀家が裏切をして、關東方の大勝利と相成りました家康公兩所の使ひに黄金一枚づゝ下し置かれ、其方共歸國の上、天下泰平の祈りをいたすやう立歸つて左様申せと仰せられました、大層お喜びになつたといふ、是は後のお話してございます、扱愈々家康公慶長五年九月一日御出馬と定まり、家康公は東海道、秀忠公は中仙道へ御進發といふ、處が八月二十九日石川日向守言上いたしまするには、旦「明日は西塞がりでございますから



二日に御出陣を遊ばされまするやう」家康公ニコリお笑ひ遊ばし、家如何に日向、其方何時の間に易者になつた、さりながら西塞がりの出陣は却つて吉日である、此度石田といふ悪人西にあつて、中國四國九州を塞がんとす、夫を切開かん爲め我等出馬いたすのであるから其悪日は味方に取つて大いなる吉日ぢや」と仰せられました、是が即ち頼智の大膽と申す者、扱九月一日御出馬でございまして外櫻田までお乗出しになる、處へ合渡川の合戦に討取りました首が品川まで着いたしたといふ趣き、家康公が其首は増上寺表門前へ差置くやうにといふ仰せ、芝の神明様へお立寄りになりました、其頃は誠に小さい社でございまして拜殿は茅葺になつて居る、夫から増上寺へお立寄りになつて差送つた首を實檢あらせられ、お輿物でございまして品川までお出になつた、處へ黒田甲斐守長政、福島左衛門大夫正則連書を捧げました、御覽遊ばすと、以飛札奉申上候、浮田石田等大垣の城に立籠り候、最初誓紙を進せ置候上は、今更無用の事に候得共、愛宕八幡も照覽あれ、正則は秀家を當の敵となし、長政は三成を對手とし、忽ち討果し申さんと豫々念願仕候、何卒一刻も早く御出馬奉願上候、恐惶謹言

八月廿四日申の刻

徳川内大臣殿

福島正則  
黒田長政

としてございませす、家康公から早速御返書をお差出しになりました、其文面は、御狀得其意候、浮田石田島津小西等大垣に立籠候、由幸之事に候條、夜を日につき相急ぎ可申の間、御談合候而御疎忽なき様尤もに候、我等参り候迄は少々儀は御控へ可給候、猶面談の後可申述候、恐惶謹言

九月朔日

家康

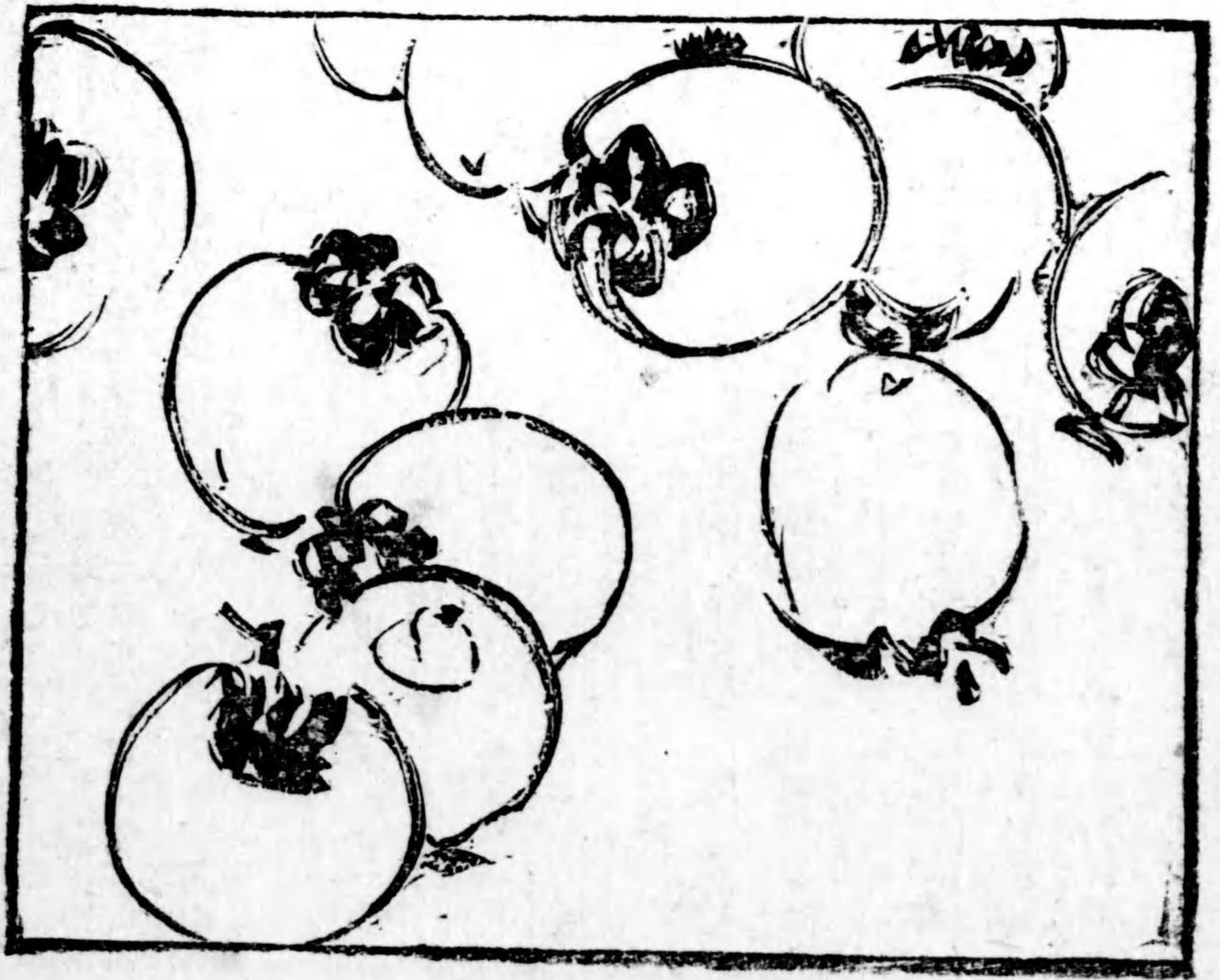
福島左衛門大夫正則殿  
黒田甲斐守長政殿

(第二十九席) 池尻合戦の事、並に大谷吉隆金吾秀秋を疑ふ事

扱家康公朔日は神奈川へお泊りになり、二日が藤澤泊り、三日が小田原、四日が三島、五日が清見寺、六日が島田、七日が中泉、八日が白須賀、九日が岡崎、十日が熱田、十一日が尾州清洲へお着に相成りました、茲に井伊兵部、本多中務の兩人が居られまするに依て、早速お出迎に罷り出で十三日は岐阜までお這入りになつた、處が美濃國渥美郡西庄村といふ所に、龜甲山立政寺といふ寺がある、俗に柿寺と申しまして大層大きな柿が出来ます、立政寺の和尚は豫々家康公に御厚情を給はり居りますから、御着陣と承はり御陣屋へやつて参り、大きな籠の中へ名代の大柿を山のやうに入れ、夫を差上げまして謹んで御禮を申上げた、時に家康公ズイとお立ちになる



と件の柿の這入つて居る大きな籠を取つて夫へお投げ遊ばしたから、座敷中へ柿コロコロ〜と轉がつた、此時家康公大音を揚げ家「コレ〜小姓ども大柿(大垣)が手に入つた、奪ひ取れツ」と仰せられました、是が所謂戦場の武者言葉で能く御幣を擔ぐなど、云つて笑ひますが、言葉の利やうは大切なもので前後を能く考へて申しませんと大きに不都合のあるもの、死生を争ひまする戦場でございませぬから軍中では忌言葉、武者言葉などといつて中々難かしいもので羽柴筑前守秀吉公が山崎の戦ひの時に、秀「明智勢の陣場は何といふ地名だ」とお尋ねの時に荒木平内が、平「敵勢の陣所は糠塚と申す地でございませぬ、秀「シテ我陣場は何と申す」平「御意にございませぬ、お味方の陣所は馬塚でござる」秀吉公



ニツコリお笑ひなすつて、秀「敵は糠塚味方は馬塚にあり、糠は馬の食物である、明日の一戦は味方の勝利疑ひないぞ」と大音に仰せられました、是を聞くと織田方の同勢俄かに勇氣が立つて、六月十三日山崎の大戦に名代の明智の軍勢を打破つたといふ事がある、たわいもないやうな話でございませぬが、是は實際のお話で……尤も日本には限りませぬ希臘のアレキサンドルなど、云ふ豪傑は埃及へ征討に參り、始めて敵國へ馬を入れました時に、過つてアレキサンドルが馬から落ちた、一同の軍隊蒼くなつて敵國の境へ馬を入れるか入れない内に、總大將が落馬をするやうな事では、この戦争は負けだ、皆一同に心配をして居るとアレキサンドルは天下の豪傑でございませぬから忽ち左右の手に大地をバリ〜と掻撈つて、汝等喜べ、吾此馬を入れるより早く埃及の地を掴み取つたと云つて兩手に土を掴んで突立つた、其一言に兵士一同勇氣が恢復して、一戦の下に勝利を得ましたなど、云ふ、是等は名高い話でございませぬが、何處でも人情に變りはございませぬもので、されば敵の備は幾切に切れて居るといひ、味方の備は張出したといふ、味方の備へが切れたとはいひはない、家康公が大垣が手に入たぞ、奪ひ取れと仰せられたのも其一つの計略で其が爲に軍卒の勇氣が大層引立つたと云ふので、是を吉例として毎年立政寺の和尚が公儀へ柿を献上致したと云ふ事でございませぬ、十四日岡山へ御着陣に相成りました、乃で加藤、福島、黒田、淺野、藤堂其の他の諸侯お出迎ひ致しました、家康公も御丁寧にお輿物の内から御會釋に相成ります、乃で早速家康公は諸將に命を下して其々陣替を致し、翌早朝より追々旗幟を敵前へ



進めまする、徳川名代の井伊、本多、酒井、榊原の旗章が現れると、賣込んだ看板は豪いもので是が爲に關東方は勇氣百倍し、關西方は色めき渡つて見えました、島左近友之此體を見て戦はぬ先から味方が臆するやうな事では可かん、味方に勇氣を附けなければならんと手勢を従へまして池尻口へ押出す、引續いて浮田秀家の侍、大將明石掃部之介、長船長兵衛二千餘人を従へて押出し、關東御味方の中村式部少輔、陣代中村彦右衛門の陣へ鐵砲を釣瓶掛けに打放し、眞一文字に乗込みました、中村彦右衛門同じく鐵砲を打放し彈丸煙の間から双方槍を入れ、打合となつた、時に島左近が勢を誘寄せんと態とデリ、後へ引退ります、中村彦右衛門の軍勢勝に乗つて霧地に追討を掛ける、島、明石、長船の同勢は杭瀬川を越えて繰引に引上げます、關東方は川を越えて無二無三に追立ると俄かに一發の鐵砲と諸共に、上方の同勢ドツとばかりに起り立つて霧地に突掛ると、島、明石等の同勢大返しに取返す、サア茲で中村彦右衛門上方勢に八方を取巻かれました、イヤ非常な難戦となつて中村新八、貝津五郎左衛門、野一色頼母、竹田又六、同五郎兵衛、堀口甚八、矢野兵部、川毛權太郎、同新七、甘利備前、名代の人々必死に合戦を致しました、枕を並べてパツタ、討死をいたします、上方勢三方より押取巻いて一人も餘すなと採立てた、此時中村方の陣中から、二正連れたる唐獅子の牡丹に狂ふ勇みをなし、上方勢の眞只中へ突て入つたる二人の剛者、鎧兜最鮮やかに扮装槍を取つて八方に驅立て、勇を振つて血戦に及びました、が實にどうも目覺しく相見えました、是即ち一人は矢野助之丞、今一人は林文大夫、

實にどうも兩人の働きは天下無双でございます、時に中村方の梅田大藏といふ人が重傷を負ひまして、アツといつて其所へ倒れた、文大夫是を見て南無三大藏が傷を負たるかと、駆寄つて是を介抱しようとする、助之丞大音を揚げ、助、文大夫、味方を救ふも時に依る、捨置け、文大夫是れを聞いて成程尤もの次第と、槍の柄から滴る血汐に咽喉を濕ほし、渦巻く敵中に突いて入る是れに勵されまして、關東方の溝口源右衛門、沼兵右衛門、佐藤與左右、同じく六藏などいふ人必死になつて、島左近の陣中へ突いて入つた、併し敵は名代の島、明石、長船などいふ者、手強く關東勢を追立てますから、中村の同勢塵殺しとなりました、此時遠州横須賀で三萬五千石有馬玄蕃頭豊氏五百餘人を従へて押出すと石田方へ横槍を入れました、中に勝れて見えたるは有馬の家來、稻次右近といふ、小櫻織しの鎧六十四間の筋兜、黒毛の駒に鐵鞍置いて打跨り、大鳥毛の長さ四尺巾二尺ございます大差物、上方勢の只中へ突いて入ると、横山監物といふ者を只一槍に突いて落す、其首を取つて猶も八方に敵勢を追立ます様子、時に勝山の御本陣で家康公が遙かに戰場を御覽になり、鳥毛半月の大差物をなしたる武者が近寄る敵を東西へ突いて落し、馬の前後へ寄付くものがないからお側に控へた有馬中務太夫法印に向ひ、家「鳥毛半月の差物は何と申すものぢや」法「御意にございます、伴立番が家老稻次右近と申しまする者」家「ハ、ア良い武者振である」とお賞め遊ばされた、扱戦争が終りまして後、御本陣へお召し出しになり、お手ら召されて居た陣羽織を下すつた、腰から上が黒羅紗下は赤地錦、家「今日の働き如何にも感服いた



した、賞とらせる」といふ御賞美があつた、此人は播州三木の別所小三郎長治の家來で、別所が三年の籠城をした時に、此人は十七歳でございまして、稲次の城主萩野左近の三男で稲次三木の兩所が落城して後、秀吉公へ御奉公を爲し、三好秀次公へ付けられ、秀次切腹して後浪人を致し有馬のお家で百人扶持を當がひ客分にして置いて後に家來となりまして、丁度此時二十歳、最も人間壯年の頃で、其晩有馬の陣へ徳川家の使番黒坂壹岐守が参りまして玄蕃頭と種々お話しの中に、壹「どうも今日稲次右近殿の働き感服いたしてござる、良い家來をお持ち遊ばして誠に結構な事でござる」と大層賞めた、スルと玄蕃頭殿が、玄「左様、彼は天晴なものだが、何分にも口強のチャ／＼馬でござる」と仰しやつた、黒坂壹岐守が歸つた後で、稲次右近が玄蕃頭の前へ出で、「右」私は長の暇を頂きたい」といふと玄蕃頭驚いて、玄「何で左様な事を申す、何か其方の氣に入らん事でもあるか」右「イヤ別に氣に入る氣に入らんといふのではござらんが、先刻お次で承はれば口強のジャ／＼馬だと仰せられた、定めし使ひ難いと思召すてござらう、殿へ右様の御心配を相掛けては、甚だお氣の毒でござるから、手前は速かに退身をいたしまする」玄蕃頭殿驚いた玄「夫は其方間違へたのだ、今日黒坂に申したのは、玄蕃は小身の大名、併し右様な良い家來が居ると自慢に申した、使ひ難いといふ次第ではない、決して心得違をいたすな、予が妹婿にいたし、今日から有馬の姓を取らせる」と玄蕃頭の妹を下されて有馬壹岐と申されました、有馬のお家に置いては武功の仁、寛永の十四年天草の一件の時八十一で大將となつて出張なし、平八といふ

者の鐵砲に中つて相果てましたが是は後のお話してございます、扱家康公は遙かに戰場を御覽遊ばした中々中村有馬の同勢がどうする事も出来ません様子、此戦ひ大事の前の小事、早速引取るやうに使番に下知を傳へさせました石田方が嚴重でございましてどうも引揚げる事が出来ません、ソコで家康公は本多忠勝へ御下知を遊ばし、家「其方參つて早々人數を引上げ呉れよ」忠「畏りました」と中務太夫手勢一千人を従へ、紺地に白く立葵の定紋付いたる大旗を押立て、杭瀬川を一文字に乗渡つて上方勢の眞只中へ突いて入つた、櫻井城之助、長坂血槍九郎、數尾權兵衛、三浦五郎左衛門などいふ人々轡を駢で乗込みました、忠勝自身に戦ひまして味方を引上げる石田浮田の同勢を喰止めんとする折柄、島左近此體を見まして馬を東西に乘廻し、左「今日の戦ひ味方充分に勝利である、救ひに来つたは本多忠勝、無益の戦ひをいたす事勿れ速かに引揚げろ」といふと上方勢下知に従つて人數を纏めます、本多も人數を纏めて物別れとなつて引上げる、其折浮田の家來稻葉助之丞、紺糸の鎧、萌黄羅紗の陣羽織、石田の家來林半助は赤糸の鎧に同じく赤羅紗の陣羽織、此兩勇士が本多忠勝の側へ近づき、輪乗を掛ける事三度、忠勝はトンと是にも構はず引取りますから、數尾權兵衛不思議に思ひまして、權「今日二人の敵輪乗を掛けしに何故其儘お捨置になりました」忠「イヤ／＼、今日上の御下知戦へといふ仰せではない、味方が難儀だに依つて引上げろといふ御下知、夫が爲めに討取らん、忠勝を笑ふ者には笑はして置け、心あるものは誹もいたすまい」と其の儘人數を引上げました、島左近も本多と見て戦を纏めた、是が見



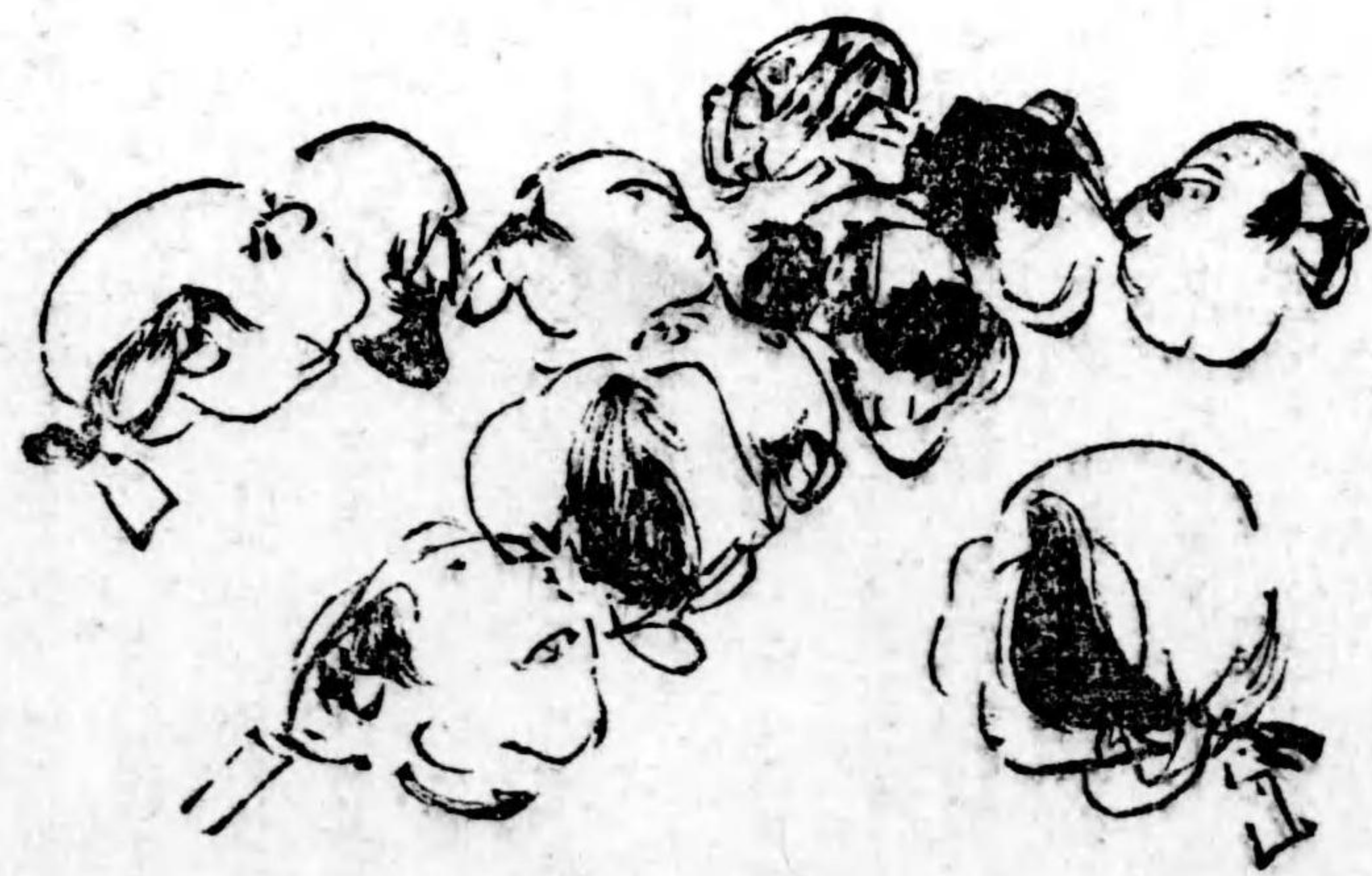
切りで本多といひ島といひ、眞の武士は斯あるべき事でございます、今日日本多に三度まで輪乗を掛けました林半助といふ人は濃州安八郡青柳村の百姓で石田の乳母の兄でございます、夫が爲めに佐和山へ呼寄せて百石遣はした、處が勇猛の人物、毎度戦場で勳功を現はすから忽ち出世をして今日では七百石を頂いて居る、三成が佐和山を出發する時に一同の家來を集めて御酒を下され

三「此度の戦ひこそ三成が安危存亡に關する大事なれば、偏に其方共の武勇を頼む」といふ時に林半助進み出でまして、半「恐れながら御家來方の内で、一番は些と覺束なく存じまするが、三番とは決して下りません、戦場に於て勳功を現はして御覽に入れる」と盃を頂くと満座の武士クスクス笑ひ出し、青柳村のお百の癖に生意氣なことをいつて、何が彼奴に出来るものかと、笑つた處が今日日本多忠勝に、三度輪乗りを掛けた有様に一同は大きに驚きました、扱て此方は家康公諸將を集めまして此の度の戦ひ早く勝敗を決すべしと悉くお急遊ばすのは、日數が重なりますると次第々々に敵の人數が殖えまするゆる、一日も早く打破らうといふ思召しでお頼みになると、福島左衛門太夫夫へ進み出でまして、左「只今まで我等の前に敵を差置きましたのは御着陣の御馳走になさんと存せしゆゑなり、既に御着陣の上は先づ大垣に敵を追退け、其後城を攻潰して浮田秀家に腹を切らせ石田小西が首を取つて直に大阪へ攻上り、毛利輝元を討つて天下泰平を唱へん事我々が望む所にございます」と述べたる時に家康公お笑ひ遊ばして、家「イヤ、左様には相成るまい、上方勢を廣場へ引出し野合の一戦こそ宜しからめ、夫は云々」と仰せられると一同委細

畏まつて異議を唱へる者はございませぬ、凡そ入として得意のないものがございませぬが、豊太閤秀吉公は如何なる難攻不落の城でも屹度攻潰して了ふ、家康公は野戦に掛けましては無双の名人でございます、其得意の野合の戦ひをなさんといふ家康公の言葉、諸將に於ても大きに勇氣が引立しました、茲で家康公が溝堤山といふ所へ、御陣替のお觸出しになりました、難所を切開いて参りまするので、百石に就て鍬一挺、細引三尋といふ賦役を仰せ付けられました、夫れからドン道を開いて御陣替をなさるやうに見せ掛けたが、夫は實は表面で、此陣替の様子を聞いて石田方が打て出でたら、夫を一討にしようとする豫ての御計略でございます、スルと茲に宜い事が出来たといふのは、田中兵部少輔吉政、家康公の御前へ罷り出でまして、吉「石田方から使ひとして宮部善祥坊の伴兵部少輔長房罷り越し、裏切りを某しへ頼むといふ書面を持参いたしました、此書面を御覽下さるやう」と石田方から持参の書面を差上げた、家康公逐御一覽なにつて殊の外御喜び遊ばし、家「其方の忠義如何にも感服いたしました、此の書面の通り裏切りのつもりに返事を認めて遣はすやう、予が申附るから左様認めろ」と吉「畏りましてござる」と田中兵部少輔筆を執つて、如何にも仰せ越されたる通り戦ひ半ばに裏切りを仕り、家康の旗本へ切り入り候、關東軍の計略は先づ第一に佐和山を攻め落し、大阪へ攻め上つて輝元を討取り、諸大名の人質を取戻し、其後石田を討たんといふあり」といふ趣きを細々と認めました、此書面を遣せば必ず大垣の城内から上方勢出張いたすに違ひないに依つて、其時微塵に打碎いて終はうといふ家康公の思召し、仰



せの通り認めて一應御覽に入れると、家「これで宜い、就ては誓文を添へて遣はさんければ先方に於て安堵いたさんから誓文を書添へるやう」吉「委細承知仕りました」と田中吉政再び筆を執て、八百萬の御神に誓ひ、決して偽り無之趣きを認め、之れ又御覽に入れました此時家康公左右を振回つて、家「誰かある兵部少輔吉政を召捕ツ」と大喝一聲嚴かなる下知の下に、ハツと答へて御側伺候の面々、バラバラと夫れへ進み、兵部少輔をグル〜と押取り巻いた、吉政大いに驚き、吉是れはしたり何等の御疑ひあつて私しを召捕れとは仰せられる、吉政決して君へ不忠は仕らず、何等の御不審にござるか」と顔の色を變へて驚いたのも無理はない、御爲を以て骨を折て證文まで書て、縛られては驚かすには居られない



家康公カラ〜とお笑ひ遊ばし、家「コレ〜決して心配するな、汝が起誓文に何と認めた、八百萬の御神へ誓を立てて偽りなき趣きを記したが、固より之れは偽りの證文、神を欺き奉るに似て甚だ心苦しい、依て予が只今其方を嚇したのちや是で神を偽つた罪も消えたと申す者である、吉政今のは戯むれであれば心配いたすな」と笑つて仰しやつたので吉政ホツと安心はしたが、ピツシヨリ汗を掻いたといふソコで右の書面を持つて我陣へ歸り宮部善祥坊の伴兵部少輔長房に、吉「必ず石田殿へ疎意はござらん、殊に故太閤殿下の大恩は忘るべきにあらず、依て仰せ越しの如く、戦ひ半ばに必ず裏切をいたす間、毛頭疑ひ給はぬやう石田殿へ申聞けられたし」と懇ろに申して宮部長房を欺むき、例の返書を持たせて歸しました、之より先大垣の城内には諸將集つて池尻口の合戦に討取りました敵の兜首、島左近の手に三十二級、平首八十四、明石掃部介の手に兜首六十、平首七十一、都合二百四十七級、先づ手始め善しと喜び居りまする所へ、注進申上ます、家康俄かに岡山より陣替のよし、確かに聞取りましてございませう」三成之れを聞いて、三「夫こそ幸ひなれ押出だして速かに討ち取らん」と逸るを浮田秀家頭を振つて、秀「此儀以ての外なり、最早徳川家康の加勢は一人として加はるまじ、味方は毛利、立花、久留米、小野木是れ等を相待ち、益々大軍となつて打て出づべし、必ず家康の謀計に陥り給ふな、迂濶に城を出ること宜しからず」と秀家が只管留めましたが石田は、三「斯く大軍を以て籠城せんは如何にも差かしきこと、是非々々出で、戦ひを決せん」と頻りに氣を焦りまする様子、大谷刑部少輔も、刑「出戦



は甚だ宜しからず」と止めます、スルと小西行長進み出で、行「今夜一討ちをして敵の様子を計らんは如何に」といふ、諸將之れに同意して愈々夜討ちと定りました時に徳川家の間諜が此趣きを家康公へ注進に及んだから、又間諜を以て流言の計略を用ひ、今夜關東勢當所へ押寄せ、城へ夜討ちを掛け、城内には誰々に裏切りの約束があるなどいふ風説を立てましたから、茲で上方勢終に夜討ちを止めます、大垣の城内彌よ諸將の乗込むを待つて合戦と定まりました時に島左近友之が三成へ告げまするには、左「未だ確とは相分らざれども、金吾中納言秀秋、關東へ返り忠の心あるが如し、能々實否を取調べらるゝやうに」といふ容易ならざる次第、三成聞いて大きに驚き大谷刑部へ相談を懸けました、此時刑部は暫し腕拱いて考へて居りましたが、刑部御心付になつたらば申すが拙者は初めから秀秋を疑つて居つた、何分金吾秀秋は八千餘人の大軍を従へて居れば今茲で事を荒立て、は味方の爲に大なる不利益を醸すべし、先づ茲は慾を以て穩便に事を計らばんとソコで偽りの書面を認めまして戸田武藏守重政、平塚因幡守爲廣の兩人を呼んで、刑部等此の書面を持って金吾の陣へ参り、秀秋の様子を見て全く關東へ返り忠と見極めたら、猶豫なく飛び掛つて刺殺せ、さなくば斯様々々」と委細を申含めました、兩人畏つて短刀を懐中なし、松尾山へ参りますると中納言秀秋此所に陣を張て居りますが、此頃病の爲に眩暈が致し、病床に打臥して居ります、金吾の家老稻葉佐渡守、平岡石見守へ、戸田、平塚の兩人對面をして、兩人「御病氣の由承知いたし、御伺ひとして罷出でましてござる、御目通り仰附けられ度う存する」早速

稻葉より取次ぎいたし、程なく是へといふ案内に連て、秀秋の座敷へ通つて見ると正席には金吾中納言秀秋褥の上に着座をいたし、左右に平岡石見、稻葉佐渡の兩家老が控へて居ります、戸田平塚の兩人夫へ着座に及び、「扱此度御出馬の段御苦勞に存じます、就て石田殿より其許様へ天下の御後見を御頼みに相成る趣き、即ち書面持参仕りましてござる、御披見下さるやう」と兩家老へ渡すから兩人より委秋へ相渡す、秀秋右の書面を取つて見ますると、  
一、幼君秀頼公十五歳に成せられ候までは金吾秀秋へ天下の後見職譲り渡すべき事  
一、上方御賄ひとして播州一圓を相渡す可し、勿論筑前を加ふべき事  
一、江州に於て十萬石、稻葉佐渡守、平岡石見守へ秀頼公より下し置かるべき事  
一、當座の御恩賞として黄金三百枚づゝ、稻葉、平岡へ下し置かるべき事  
慶長五年九月十四日

筑前中納言殿

として起證文が添へてあります、一通り披見いたしたる秀秋が、秀「コレ、佐渡、石見、之を見まするやう」兩家老へ渡しましたから兩家老は押頂いて拜見して居ります、其間平塚、戸田の兩

- 石田治部少輔三成
- 大谷刑部少輔吉隆
- 長東大藏太輔政家
- 安國寺 惠 瓊
- 小西攝津守 行長



人は始終油断なく秀秋の顔色に目を注げ、怪しい事があつたら飛び掛つて一刺しに刺さうと、兼ねて懐中いたしたる短刀の鯉口を切つて少しの油断もない、秀秋此の時に、秀コリヤ戸田、平塚兩人「ハ、ツ」秀「太閤御他界の後幼君御成長までは天下の政事徳川家康へ任せられし所内府家康逆心の聞えあつて諸侯之れを認るに付き、只今後見の職は毛利輝元が承まはり居る、然かる所輝元何科あつて其職を取り上げられ、何故に此秀秋へ命せらるゝか、其の仔細を申せ」戸田、平塚は何ともいはず、顔を赤らめ閉口して終つた、兩人の顔をジツと打眺めた金吾秀秋、大口開いてカラ／＼と打笑ひ、秀「梢高き木立は風之を倒すの譬、徳川家康は仁あつて人を懐け、徳あつて世を治むる、其人だにも諸人の爲に嫉まれて禍ひ一身に及ぶ、況してや此の秀秋、才智なくして此職に任せらるゝこと存じも寄らず、其上功なき秀秋へ大國を與へられ、又謂れなく家老共へ褒美を賜はる何の故たるを知らず、其の理由を速かに申述べろ」戸田武藏守、平塚因幡守の兩人問ひ詰められて愈よ閉口して終つた、頓て秀秋大眼をカツと見開き、秀「コレ汝等は此秀秋を何と存する、忝くも故太閤の甥と生れ、秀吉公の大恩を蒙り、姓なくして位三位官中納言の高官に昇り大國を領すること、須彌山低く蒼海猶淺き譬の如く、されば幼君秀頼公の爲めに逆臣を退け、萬分の一の御恩を報せんと疾を押して當地へ來つたる秀秋、城内にも入れられず、剩へ我等を疑ふ此始末、無念至極、所詮疑ひを蒙る上は人數を引て名島へ歸國いたすに依て左様心得ろ」と大音揚げて罵ります様子、中々關東へ内通いたして居る景色は少しもございませぬ、流石麒麟の

聞えを取つた小早川左衛門隆景に仕込まれました、所謂天變の計略といふ鏝元へ來つてガラリ引繰り返る、其の心底は兩人には量り兼ねます、戸田、平塚の兩人は談じ附けられて返す言葉がない、重如何にも御尤もの仰せ恐入りました、全く善らざる説を立てましたる者が之れありまして、夫が爲に甚だ不調法を申上げた次第、平に御用捨下され度し」と散々に詫入つて右の趣きを石田、大谷へ物語りました、シテ見れば裏切の心はないかとも思ふが、未だ油断はなりません、一説には大谷刑部が自身に出向いて色々秀秋を搜つて見たが、決して其手に乗らず、神文誓詞まで出して秀秋が赤心を見せたから手を出し兼ねて引取つたとしてあります、つまり大谷程のものも一杯食はされた形、夫れにつけても松尾山に秀秋が陣したのは非常に迷惑だ、變心されると西軍の中心を襲はれる位置、併し全く裏切をしなければ夫に越したことはない、先づ荒立てすにソツとして置き、其中追々集まつて來る大軍を待つて戦はん」と評議の極りました所へ前申上げた田中の許へ遣はしたる使ひが立歸り、其の返書を見ると神文を添へ、裏切いたすといふ文意でございませぬ、三成大きに喜び、三「此上からは關ヶ原へ參つて野合の合戦をいたさんと存するが、其許の思召しは如何」と尋ねると大谷刑部、刑夫は甚だ宜しからず」と堅く止めましたが、石田は強て野合の戦を望みます、刑夫ほどに思はるゝなれば如何にも手配りをいたすであらう」と茲で大谷が手配をいたして、終に關ヶ原に天下分目の大激戦に及ぶといふ、家康公浮沈の大戦で御座います。



(第三十席) 關ヶ原合戦の事、並に可兒才藏の事

攻城、野戦いづれも特殊の方法があり、人に依つて得手不得手がある、石田三成には餘り得手はないが、兩方共實地を踏んで来て居る、併し籠城防禦といふことは、全く経験がない、して見れば籠城については何等成算もなく殊に十二萬の大軍を率ゐて居るから、家康が野戦については太閤以上である、といふ技能をさへ無視して野戦を主張したので之は無理からぬ所、大谷刑部は戦場の鬼、攻城でも野戦でも何でも御座れた、病氣で眼は盲て居るが心眼は明るい、徳川に對しても自分に四五萬の手勢があれば勝つ見込、併し手勢僅に一千五百ではどうにもならない、愈野戦と決定して、そして大谷に手配りを任せました、大谷刑部が手配りといふは、先づ第一番に浮田秀家、鍋島、島津、小西等關ヶ原へ出陣をいたせば、徳川家康進んで野合の戦となる、其時に石田が溝堤山の麓を押廻し、赤阪山虚空藏山へ人數一萬を以て押出だし、合戦の圖を見合せまして合圖の狼煙を打上げ同時に關ヶ原、天満山にも又々狼煙を打上げ、此の煙を見ると松尾山の金吾、南宮山栗原山の毛利、吉川、名東、安國寺等の軍勢一度に切つて出で家康の中軍に横槍を打入れ後ろよりは石田三成が突掛り、合圖に依て大垣の城内からも切て出で、四方八面より押取り包み只一方を明け置く時は關ヶ原の關東勢明たる所より逃げ出さんこと疑ひなく、其時一捲りに捲り立つて呂久川合渡川の邊に於て撃ち惱ますべし、萬一金吾秀秋が裏切をなさば此の大谷刑部

が微塵に取挫がんといふ計畫でございませぬ、是は至極宜つた、所が夫から石田のしたことが宜くない、先づ大垣の城内本丸は福島右馬助、二の丸は熊谷内藏丞、垣見和泉守、木村傳藏、三の丸は阪井左門之助、高橋右近太夫、秋月長門守、人數七千人、合戦の半ばに本丸の福原ばかりが残つて其外の面々は撃つて出づべし、又城外に陣取つたる諸大將は夜中に關ヶ原へ繰り出だすやうにと下知をいたしました、時に島津中務太輔家久が参りまして、申入れたる時に石田が、三「イヤ小勢より大所在陣の人數半ば引取るに於ては、關東勢は皆引取たと油断をいたすべし、其時敵陣へ夜討ちを掛け給へ、兄義弘、某諸共先陣を仕るでござる」と申入れたる時に石田が、三「イヤ小勢より大軍へ夜討をいたしたとは古へから之れあるなれど、大軍より小勢へ夜討ちを掛けるといふことは承はらん、何れ明日大軍の合戦あるに未練に夜討ちも如何と存する、先づ見合した宜らう」といつて用ひませぬから島津家久、「さて一軍法には拙き石田だ」と大口開て打笑つて立歸つたどうも三成は人のいふ事を背くから總て仕損ひが多くある、安國寺長老惠瓊、之は皆様に存じの矢矧の橋の人相見で秀吉のお蔭で今では十萬石大名の格式で威張つたりの石田の下知によつて、立派なる鎧籠手脛當をなし其上へ衣を着、袈裟を掛け、太刀を佩き脇差を手挟んで、手に念珠を持つて南宮山へやつて参りました、毛利宰相秀元へ對面をして、惠「さて明日の一戦、天満山に合圖の狼煙が上り次第、徳川家康の本陣に御人數を御進めなされるやう」秀元之れを聞いて、秀其の差圖に參られたか「惠「ハイ」秀「コレ御坊は三衣を身に纏ふ身分でありながら、諸大將へ向つて



我れは顔に軍談をいたすゆるゑ、心腹をいたさぬ諸大將が往々之れある、向後は必ず無用にいたさつしやい」安國寺之を聞いて、惠「イヤ御存じの如く拙僧は才識のなき者だ、併し故太閤様御側に差置から剩へ天下の政道にも與かりし拙僧、殿下已に世を去り給ひし上は我等とても俗を離れ山間に隱遁すべき身なれども今天下は穩かならず、せめては故太閤が御高恩の萬分一を報はん爲め惡魔降伏の心にて戰場へ罷り出でたるなれ、且は佛書を觀破つて兵學の奧義を極め、人に兵法を教ゆる惠瓊、今時の無學の大將には遙かに勝ると心得る」と一體が剛慢の坊さんだに依つて手前味噌を列べ立つた、スルと毛利秀元烈火の如くに憤り、秀「黙れ、汝賣僧の分際として要する所の鎧扮装、物識り顔の野痴言聞苦しい、抑も我を何と思ふ、大將毛利輝元の名代職たり、汝は誰が下知を受け是へ來つて、右やうな過言を申述べる今一言申して見よ、搦み殺して呉れるワ」と毛利秀元ズツと席を立上つた、安國寺惠瓊其勢に仰天して頭を抱へて早々其所を逃げ出だし、秀元の先陣吉川藏人秀家の許へ參つて、惠「明日狼煙が天満山へ上るを合圖に毛利家、家康の本陣へ攻め入り給ふやう、軍議の次第を申參つたる所、秀元殿の御怒りを蒙り、拙僧追ひ歸されて參つたが、イヤどうも秀元殿何日ない大層なお腹立ち……」吉川藏人打笑つて、藤「イヤ夫れは尤ものことだ、入らざる出家の軍議立て、此方にも用はない、サツサと歸らつしやるが宜い長居をいたすと尊公の爲めにならん、足許の明るい中にトツトと歸んなさい」と又々安國寺逐ひ出され了つた、何しろ毛利も徳川家に心がございますに依て、中々石田や安國寺のいふことを素直に

は聞かない、惠瓊立歸つて石田、大谷へ右の趣きを告げますると大谷刑部眉を擡めて、刑「大軍を前に控へ、味方割れをいたすやうでは往かぬ、是れは治部殿御身自から行つて毛利の心を宥めたが宜い」といふ勧めに依て三成南宮山へ參つて秀元に對面をして、先刻の安國寺の疎忽を詫び、又松尾山に行つて金吾秀秋に對面をして戸田、平塚の疎忽を詫び、斯の如く大將が諸將に頭が上らんやうでは中々徳川内府を討たんなどは覺束ない話でありますが、どうも石田には夫だけの徳望がなかつたものと見えます、扱上方勢栗原山へ大籌をドン／＼焚て、之れを目的として大垣の兵を關ヶ原へと進めまして、陣を張つて夜の明るを待ち受けます、此方は家康公宵より諸陣の篝火を消して終ひ、雑兵に松火を持たせて夥しく人數の動く體を見せた、是は大坂へ人數を押し出し、大名衆の人氣を取近して毛利輝元を討たん爲に兵を進める體に見せました、然るに九月十四日の夜亥の刻、斥候の者立ち歸つて、斥言上いたしました、大垣の城邊に篝の松明夥しく相見えまする」家康公是を聞かれ、ハテ兼て敵を出引す計略ではあるが餘り敵の動き方が早い、城内より大軍の出るのは餘程間のあることであらう合點往かすと思召し、森勘解由成胤、澤井左衛門重村の兩人を召され、家「此方でも先手へ參つて様子を見切て參るやうに」兩「畏りました」と兩人馬を飛ばして先頭へ乗出しました、此時に石田三成は澤田小三郎、戌亥次郎兵衛の兩人を呼出し「其方でも敵の本陣岡山の様子を見届け來れ」兩「畏りました」と之も馬を飛ばして乗込んで參りました、此斥候が途中でバツタリ出遇した、關東方は森勘解由、澤井左衛門、石田方は澤田小



三郎、戌亥次郎兵衛といふ何れも聞えし勇士なれば、互に槍を取つて身構へに及び、サア来いとアワヤ槍合せにならうといふ時に、ズシン／＼と恐しい地響きをさせ、四名の眞中へスツと乗込んで参りましたる一人の大坊主、黒系絨しの鎧を草摺長に一着なし、身の丈は六尺餘り、坊主頭に布を疊んで鉢巻なし、五尺ばかりもあらうといふ太刀を脊負ひ、三尺ばかりの刀を腰に帶し手に一丈餘りの鐵棒を杖に突きズシン／＼と地響きさして四人の間へ割つて入り、坊「コレコレ貴様達は何所の奴だ、敵か味方ら知らんが知行泥棒、痴鈍な眞似をせずサツサと歸れ」



森勘解由之を聞いて、勦黙れ

此のツク入、知行盜賊とは何だ、聞捨にならんことを吐く奴だ、一體貴様は何所の何といふ者だ、名前を名乗れ」坊「ナニ乃公の名が聞きたい、聞たくば名乗て聞かしてやるが、驚いて目を廻さぬやう氣附けがあるなら先きへ服んで腹帯を確かり締め直して置け、此方はな鬼神と呼ばれし尾州春日井郡清洲の城主福島左衛門太夫正則公の秘藏の家人、祖父江右衛門入道法齋といふ御上人様である、どうだ名前を聞いて驚いたらう」聞くと森勘解由を始め四人齋しく法齋を取巻き、勦黙れ法齋、不届きのことを吐す奴だ、どういふ理由で我々を知行盗人といふ、サア夫を速にいへ」法齋大口開いてカラ／＼と打笑ひ、法「ナニ口を尖らせ頬を膨らせ、知行盗人の理由を此方に聞く貴様達の面は見られたものでない、知行盗人の理由が聞たくば云つて聞かしてやるが、貴様達は敵味方共に斥候の役ではないか、互に茲で勝負に及び、首尾能く敵を討ち果して其の首を取つて立歸つたら夫は天晴れの手柄であるがさう旨くばかりは往かぬもの、若し討たれたらどの命を以て大将へ敵の様子を言上いたす、汝等は斥候の法を知らない、そんな馬鹿者に知行を宛つがて置くのは冗だから、貴様達は知行盗人だと此の法齋がいつて聞かしたので、貴様達が強て勝負をしたくば明日の戦に互に名乗て手合せをしる、是ほどいつて聞かしても未だ解らぬか、此の活如來の御上人が仰しやること腑に落ちたら、サツサと歸れ」茲で森勘解由、澤井左衛門、澤田小三郎、戌亥次郎兵衛の四人が、「成程坊主のいふ處大きに尤もだ、敵を討ち取れば云ふ所はないが、さうばかりは往かんものだから是は一番明日の戦場に於て、互ひに勝負を決することにしよう」とい



ふので到頭敵味方四人とも、「イヤ法齋、大きに世話になつた、貴様の意見に従つて今日は物別れにする」と東西へ立別れました、ソコで森勘解由、澤井左門は岡山へ立歸り、別に何事もございませぬ、關ヶ原へ大垣の同勢が出でましたばかりでございませぬ、家康公之れをお聞きになり、家「さては我が計略成れり」と御喜び遊ばされ、御縁側へ立ち出で、關ヶ原を御覽になると、先づ南宮山、栗原山、松尾山、天満山を初めとして、小關野、石原峯、小池村、藤井、垂井、數百丁四方に焚立てまする篝火は天を焦すかと疑はれる、左右を振返つて御近習を召され、家「コレ、那を見ろ夥しき篝火、上方の同勢大軍なれども此度の對手は烏合勢、昔太閤秀吉を對手となし、小牧に合戦せし其節は其方共の親々が適れの働きをいたした、今回は汝等親に劣らざる功績をなすやう心掛ける」と此の御言葉を聞いて御側に控へたる面々成程乃公の親父や兄哥が小牧の戦ひには大層手柄を現はした、今度は親父や兄哥に劣らぬやう大功を立てなければならん」と自然と勇氣を増しました、是即ち名將が言葉の采配でございませぬ、尤も秀吉公が小牧山に十二萬五千の兵を増かへて出張したのと、石田が是へ出張したのとは采配の振り人が違ふから、家康公の目から見ると何とも思召しはない、所へ追々斥候の面々が走せ歸りまして敵の同勢は十一二萬、或は十二三萬、又は十四萬位と様々に申上げる、時に福島正則より祖父江入道法齋使として罷り越し御目通りをいたして、法「御計略圖に當つて愈よ戦ひ切迫いたしましたに依り、宜しく御下知を承はり度く、主人正則口上として、敵勢決して恐るに足らずと申す事にございませぬ」家康公が、家

「コレ法齋敵の斥候を誰がいたした」法「私しが致しました」家「どうであつた」法「左様十三四萬はございませぬが皆集り勢で、恐るゝ所は更にございませぬ」家「ウム、鍋島の様子は如何である」法「御意にございませぬ、上方勢運を兩端に計ると相見えまして、總じて締り薄く相見えませぬ、中にも御尋ねの鍋島は明日必ず御味方いたすでございませぬ」家「ウム何故に左様申す」法「其理由は愈よ手合せに近づきましたるに、山の麓の備へを山上へ繰り上げましてございませぬ」家「ハア如何して麓より山上へ繰り上げたるを其方存じ居る」法「其儀は私し先刻諸方を巡見いたし、鍋島の引上げました跡へ参りまして、見ると馬の糞が諸方にございませぬ、夫を私しが掴みまして試したる所皆悉く温か度でございませぬ、是即ち放ちたての糞にこれあり、されば鍋島勢が麓より山へ引上げた所へ私しが参りましたので、今宵に至つて山上へ引上るは明日御味方の證據に違ひございませぬ、之を聞かれて家康公殊の外御感心遊ばされ、家「さて、能く見切つた」と御賞め遊ばしたのが實は鍋島は元から徳川方で此度も出陣はするが戦争はしない約束が成り立つて居る、夫を態と法齋に御尋ねになつた所が祖父江法齋が之を見貫いたのは天晴れといふので、後に直參に御召出しになつて、青山常陸介から苗字を譲られ、青山石見守と申して居りました、然るに大阪の戦の時に不都合があつて、一旦家断絶をいたし、其後又お取立てになつて四百五十石で濱町に御屋敷がございませぬ、幕末の頃まで祖父江作左衛門といつて残りませぬ、さて祖父江法齋が立歸りました、後へ入れ代つて罷り出でましたのは、黒田の家來神原傳兵衛、是は金吾中納言秀秋



の裏切りは黒田甲斐守長政が御周旋でございませうから、黒田長政から金吾方へ江良彌六、南端源次郎といふ兩人を遣はし、愈よ明日裏切り相違ござらんかと念を押して金吾から御約束の通り相違ございませんとし返事、ソコで今いふ榊原傳兵衛が金吾秀秋の返書を持って家康公の御前へ出で、此段を言上いたしました、所へ續いて黒田の家來毛谷主水御使として罷出でた、黒田の家で八虎といふ名代の豪傑の一人で、家康公御前へ御召出しになり、家「何事である」主「先刻傳兵衛を以て申上げたる金吾秀秋、愈よ裏切りに就いて御檢分の儀は誰人へ仰せ附けられまするや」家「夫は奥平美作の弟藤兵衛へ申附け置いた、段々と甲州骨折りであつた、宜しく傳へ呉れるやうに時に其方斥候いたしたかどうぢや」主「御意にございませう、私し自分の心にて調べ候所、上方勢唯二三萬と相見えませう」此時家康公主水の貌をジツと御見詰め遊ばして、家「さて、汝は表裏者である」と仰せられたのは、誰が申上ても十一二萬、十三四萬といふに只た二三萬人といふは餘りどうも飛び違つた申上げ方でありませうから裏表者であると仰しやつた、スルと主水が、主「左様でございませう、成程總體では、十三四萬もございませうが、當年の上方勢は誠に實入りが悪うございまして、税ばかり夥しうございませう」家「コレ、五穀には税と申すことがあるが、軍勢に税といふ事はないワ」主「左様で、松尾山の金吾秀秋、栗原山の毛利秀元を初めとして鍋島、脇坂、小川、赤座、朽木是等は戦を致しません、されば是皆税でございませう、只眞實戦をいたしませうのは石田、小西、浮田、大谷位でございませう、故に正味二三萬と私しは見切りましてござる」家康

公ハタと手を拍て、家「ウム主水、能く見切つた、褒美を取らせる」と御機嫌最と麗はしく、御近習へ何か仰せ附けられると、大きな盃の上へ澤山に御饅頭を載せて持出で近「是を御上から下されませう」主「是ははどうも結構、有難く頂戴いたします、どうぞ御茶を一つ頂きたい」と家康公の方へ眞向になつて、大きな口を開いてムシャ／＼食ひ初め、お茶をガブガブ喫んでは又饅頭をムシャリ／＼何時までも食つて居るから驚いたのは御近習中々やるわい、此男は一體下戸と見える幾ら喰ふだらう」と餘りやらかすので御近習が勘定をして居ると五十五食つたといふ、小さな饅頭にしろ、五十五も食ふのは中々の大食家で、殊に内大臣の前で





大きな口を開て食るといふは、詰らんことのやうだが是が尋常の人の出来にくい事でございます、散々食て主水に於ては御禮を述べて悠々と立歸りました、此の人は元佐々木の浪人でございます、まして、初め柴田勝家に仕へ、後池田家に仕へ、其後又前田家へ召抱へられ、後に到つて黒田甲斐守へ御奉公をいたしました、前名を田原千太郎といひ、蒲生氏郷が二萬石で予が家へ參れといつたのを御断り申すといつて遂々黒田の許へ留りました、されば甲斐守長政が其方は天晴れ忠義者である、悉く御寵愛になり、後に毛谷下總と申し、此人の御子息を毛谷主水といつて甲斐守の御子様右衛門佐忠行といふ方の御代に、黒田の御家に騒動がございましたが、其時の張本人、併し此毛谷主水の御家が歴然として黒田家に残つて居りますのは全たく初代の勳功に因る所でございます、さて奥平藤兵衛検視として松尾山へ御遣しになり、此時福島の家來澁江法齋又々御目通りを願ひ、夜の明け次第當手合戦相始むべく候、早々御出馬願ひ奉ると申上げ、家康公御直に御返答、直様出馬致す様立歸り左様申しくれよ」と仰せられ、茲で家康公御湯づけを召上り、黒糸の御鎧を着けられた時に御納戸役から細川忠興の献上いたしたる角頭巾の御兜を差上げたるを家康公は石田如きにと仰せられて兜を召されません、茶縮緬の福祿頭巾を召され、御小姓衆に細竹を伐り取らせ、御鼻紙を角取りにして之を采配の代りになし、慶長五年九月十五日乙の卯寅の上刻御本陣を打立ちまして、關ヶ原の町口を西の方へ十二丁押出だし、御馬を立てさせられた、御道添頭渡邊半藏、恐れながら此所は地理悪しく先陣の働き相見え申さず、今少し御進みあつて

然るべし」と申上げる、依て家康公又一丁ほど御馬を御進めになつて此所に總白の御旗七流、金五本骨の馬章を押留て整々と御備を遊ばされました、扱大先陣たる福島左衛門太夫正則に於ては夜の明け次第石田方へ押掛らんといふ手筈にて充分の用意をいたして相待つて居る、然るに福島に向ふ敵は浮田備前守秀家なりと聞き、正則大に喜び、浮田なれば人数も大勢、殊に石田から見ると手筈へもあり、對手に取て幸ひなりと一層勇氣も引立つて見えまする時に井伊兵部少輔直政此御方は前名を萬千代丸といひ、天正十二年小牧山の戦ひの折に初陣を遊ばされ、上方名代の森武藏守・池田勝入齋を長久手原に討ち取りまして、其後例も先陣を勤めする、所が今日の戦ひは徳川殿の興廢存亡に關する大合戦、然るに自分が先陣を勤むる譯にならず、福島左衛門が第一番に立されたのを如何にも残念に心得、一ツ福島に氣を持たせて手強く働かせ、事に依たら正則を出し抜いて自分が一番に軍を初めてくれようと考へ、木股右京、孕石主水、早川彌惣右衛門、彼是れ十人ばかりの家來を連れて福島に陣へ參り、直して愈よ戦ひも切迫いたしてござる、何にいたせ關東關西天下分目の大戦なれば御如才もござるまいが、萬端御油断なく御懸引を願ひたうござる」と福島へ氣を持たせた、左衛門太夫正則といふ人は火の燃えるやうな性質、人に彼是れいはれるのが大嫌ひだから之れを聞くと憤然とした、正則ナニ其事を言ひにござつたか、要らざる世話だ、捨置つしやい、今日の合戦は名々の手柄次第、何も貴公の差圖を蒙るには及ばん」直ハア成程是は尤もの御言葉でござる、手柄次第とな、然らば仰せの通り手柄次第に仕つる」と念を



押して福島の陣を立ち出で、之から正則を一つ出し抜いて目に物見せて呉れようと、夫より俄に  
 抜掛けの御支度を遊ばし、手勢を従へてまだ夜が明けません眞暗の所をドン／＼人数を繰出した  
 所へ、本多中務太輔忠勝二十人ばかりの兵を従へて此所へ見廻つて参りますると伊井直政が人数  
 を繰出す様子だから以つての外のことと心得、忠「アイヤ兵部、其許は何れへ進まつしやる、人数  
 は何方へ繰出す」直「イヤこれは／＼中務、貴殿は御旗本後陣の御眼代ではないか、何で此所へ御  
 出でがあつた」忠「ナニ手前を咎めるのは其の意を得ん、其方が人数を先へ繰出すのは甚だ心得難  
 い、一體先陣も後陣も入らない、小山で兼ねて何事も其方と我等申合せにいたして置いた、然  
 を一言の拙者へ相談もなく、我等を出し抜いて先手へ進まつしやるのは合點が参らん、速かに人  
 数を引かる、やう」直「イヤ申合せといふは昨日までのこと、御主君が江戸表に御出で遊ばし、當  
 地へ御出馬がない其の中は何事も尊公と拙者申合せ取計らいしも、最畢御主君御出馬に相成つ  
 た今日は其の必要はない、貴殿は貴殿、我等は我等へ別に御相談申すところもござらん」忠「ナニ  
 別に相談いたすところはな、貴公は貴公だけの手柄を現はすといはつしやるか、宜し然らば此  
 の中務太輔忠勝の働きを見物さつしやい」長「如何にも斯く申する兵部が武功を御邊見物をしなさ  
 るが宜い」忠「何を猪口才な、己れに劣る忠勝でない」直「貴殿に劣る兵部でない」と互に言葉が荒  
 くなつて次第によつては果し合にも及ばんといふ様子、この時犬山から關東へ降参をいたした關  
 長門守といふ人が、井伊の手に附いて居りましたが、それへ進み出でまして、長「是はしたり各々

方は以ての外の御舉動、この度は大切の徳川殿御合戦、多分の大小名が内府へ御味方をいたし、  
 一生懸命の働きをなさんといふうちに、徳川家の元老たる各々方が些細の行違ひから争ひを起さ  
 るゝとは沙汰の限りではござらんか、御嗜みなされたが宜しからう」と長門守にいはれて井伊も  
 本多も一言もなく、「イヤ是れは大きに拙者共が心得違ひ、御意見の段誠に有難く存する、甚だ  
 赤面の至り、仰せに従つて和解いたすでござらう」と茲で兩人忽ち打ち解けまして、本多は其儘  
 御前へ引返し、直政は前へ／＼と進みました、所へ向ふからトウ／＼と蹄を鳴らし、馬を飛ばし  
 て乗込んで来たのは可兒才藏義成といふ人物、才「アイヤ井伊殿には何で先きへ御進みになる、今  
 日第一の先陣は某の主人福島左衛門大夫正則でござる、速かに御戻りなさい」直政之を聞いて、直  
 イヤ此方は決して一番槍を入れる心底はござらん、戰場を巡見に出でたる儀でござる」才「イヤ左  
 様でござるまい」直「全く夫れに相違ない」と兎角に争つて居る中に、モウ東の方が段々白んで参  
 りました、可兒才藏、此奴直政が抜掛けをするに違ひないと思ふから愚圖々々いつて居ても追  
 附かない、ソコで可兒才藏は其儘に馬を飛ばし遙か向ふにドットと乗り抜けて終ひました、此時  
 に可兒といふ人は正則から勘氣を受けて居た、之は九月一日石田方の湯原源五郎といふ者が關東  
 方の陣頭へ乗込んで輪乗りを掛けまして、關東方を散々に悪口した、之を聞き兼ねて可兒才藏馬  
 を飛ばして乗出だし湯原源五郎を打ち取つた、手柄は手柄だが徳川家が着陣をいたすまでは戦は  
 致さんといふつもど、可兒才藏は夫れを破つて湯原源五郎を討ち取つたので主人の勘氣を受けて



居ります、十五日關ヶ原の御合戦に可兒才藏戰場へ進み、笹の葉を袋に入れ、之れを腰に付け、討ち取りました兜首口の中へ笹を一枚づゝ入れて置て、戰場へ皆な討ち取つた首を投り出して置き跡で其の首を集めて検めると、口に笹の葉を含んで居るのがあるは、之も可兒才藏が討ち取つた首、之も可兒才藏の取つた首だと其數夥だしいこと、夫より人綽名して笹の才藏といった、尾州羽栗郡の住人で若年の時から大層愛宕様を信仰して、俺は愛宕の縁日に死ぬと始終いつて居りましたが、果せる哉關ヶ原の戦ひが済んで十三年の後、慶長十八年二月二十四日享年七十一歳で具足を着して床几に掛つて冥目いたしました、誠に良い終りをした人で、藝州廣島の矢賀と申す所に可兒才藏の石碑があり、血統が忍の阿部様と酒井修理太夫の御兩家へ遣りました、之は後のお話、さて愈よ明け渡つたる時は何日なるぞ、慶長五年九月十五日四方の山々霧晴れて敵味方の旗の手が鮮かに見えます、四方四里に餘ります名代の關ヶ原の廣野、赤白の旗水色黄旗子持筋千筋山道朽葉色井桁橋鎧蝶蛇の目桔梗に八花菱源氏車に笹龍膽、其家々の紋附いたる旗を秋風に翻へし、半月天突大吹抜、枝夢大團扇フケリ野晒しシデ折掛批把籠取角取紙、其外思ひ思ひの馬章を押樹て、關東勢七萬五千三百餘人、西國勢は十二萬八千六百八十餘人、敵味方合せまして二十四餘萬の同勢、流石に廣き關ヶ原も人馬で草々分らぬばかり、槍薙刀の切先は旭に輝き、旗差物は翻翻と朝風に翻へり、吉野龍田の春秋を一目に見るが如く、時に福島左衛門太夫正則の向ふ四丁ほど先きに赤備が三千ばかり備へた様子、正則鞍笠に伸上つて、ハテ何者の備へ

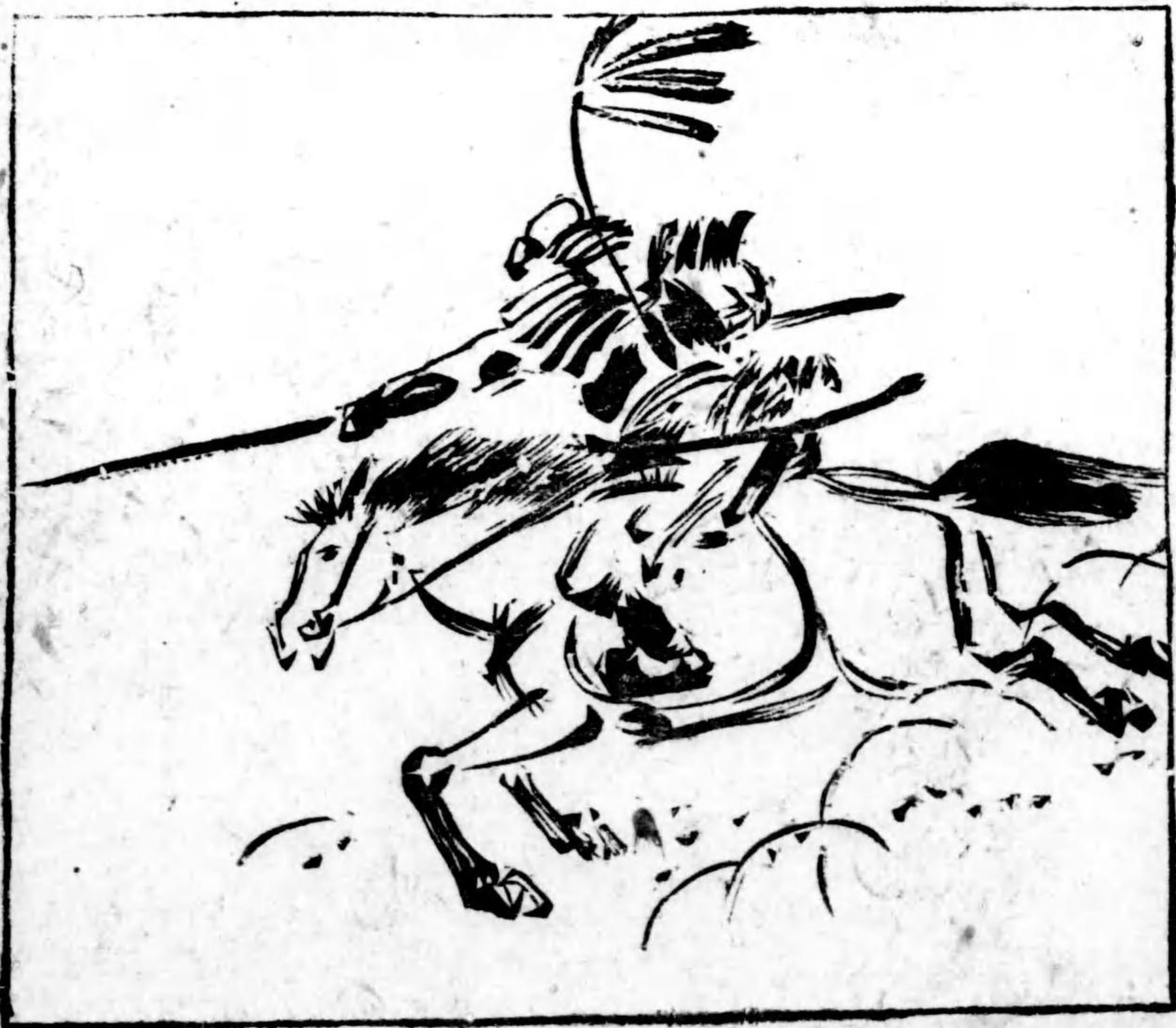
ならんと見てあれば、赤地に金を以て正八幡大武神と書いたる旗の手靡き渡り、猩々緋蠅取りの馬章、銀の井桁に橘の小印を押樹つたり、是なん上野國群馬郡高崎の城主十二萬石、井伊兵部少輔從四位侍藤原直政でございます、之れを見ると福島正則烈火の如くに憤ほり、正、さてこそ我を出し抜き居つたといふ中に井伊の三千人眞先きに旗を進めまして、ドツとばかりに関を作り眞一文字に繰出しました、西方の先陣浮田中納言秀家二萬の勢を二手に分け、眞先きに白地に竹の丸の旗を進め金の輪貫きに猩々緋馬連の馬章を押樹て、同じくドツと関の聲を合せました、此関の聲を聞くと齊しく、東西二十餘萬の大軍一度にドツと揚げたる関の聲は山川鳴動して天地も崩る、ばかり、所が關ヶ原の戦は見物が夥だしく出ました、之は野伏一揆などで戦ひに負て逃げて来る奴を叩き倒し、鎧兜を奪ひ取る、昔の戦國時代には斯ういふ者が多くあつた、されば戦に負た日には災難、命を助かつて逃げたと思ふと野伏の爲に追剝をされ、裸體武者がどの位出来るか知れない。

(第三十一席) 小早川秀秋裏切の事、並に家康薨去の事

時に井伊の家老木股右京、一聲の號令を掛けると齊しく、浮田秀家の旗本へ鐵砲を釣瓶かけに打放つた、浮田勢からも同じく鐵砲を打ち放つ、抑も是れが關ヶ原の一番戦、双方ドン、鐵砲を放つ、其の彈煙りの間から槍を入れるのが一番槍、此時井伊家の陣中から一人の武者、赤銅の



鎧に同じ毛の兜、月毛の駒に朱の鞍置いて打跨がり、皆朱の槍を押捻つて大音揚げ、今日當手の一番槍小幡勘兵衛景範、後日に争ふこと勿れと馬を飛ばして浮田勢の中へ乗込み第一番に槍を入れ、浮田の幌武者一人を討ち取り其の首を揚げました、之が當日の一番槍一番首にて大層な手柄でございませ、此小幡勘兵衛といふ人は武田信玄の二十四將の一人小幡山城守の末子でございまして武田家が滅亡をした時が十二歳、徳川家へ御召出しになつて十六歳の時に武者修行に出でまして、早川惣左衛門といふ軍學者に就いて軍學を修めた、後に此小幡勘兵衛が甲州流といふ軍學を立て弘め、其又弟子の北條安房守といふ人が北條流といふ軍學を弘め、其又弟子の山鹿甚五左衛門素行



といふ人が山鹿流といふ軍學を弘めました、其本は則ち此勘兵衛景範でございませ、素より文武兩道に達したる豪傑なれば今日一番乗り一番首を揚げた、之を手初めとして井伊と浮田の兩勢互ひに弾煙りの晴間から槍を入れての血戦、中に松倉豊後守手勢を率て井伊直政の手に従て働きたる浮田の先陣は明石掃部介自から槍を取つて井伊の備へに突いて入る、浮田方に於ては之れに氣を得て槍刀の尖先を列べ、井伊の陣中へ押掛つたる有様、時に家康公の五男下野守忠吉、卿と仰せられる方、是は井伊直政がお預かり申して御教育をいたして居ります、其下野守忠吉、御勇氣の君であらつしやるから自身に槍を打ち振つて浮田の兵を八方に突き立て叩き伏せ、手痛き働きを遊ばす中に、御乗馬が倒れましたに依つて歩行立ちになつて猶も力戦に及ばれる、折から直政の家來江坂團六此體を見て、己れが馬より飛び下り其馬の口を取つて忠吉公へ奉る、下野守大いに喜び團六の馬へ御乗り相成つて敵中へ突いて入る、斯の如きの次第でありますから、井伊の家來我れ劣らじと鈴木平兵衛、岡本半助、安藝五左衛門、向山外記、是等の人々眞先きに進んで力戦をいたします、引き續いて戸田宗左衛門、伴佐太夫、稻葉平七、北村喜三郎、之れ又浮田勢へ突いて入り、八方へ追捲る、夫が爲めに浮田の同勢思はず二丁ばかりといふもの、ド、ド、ドツと崩れ立つた、直政は第一番に戦ひさへすれば夫で自分の氣は濟むので、一體自分は遊軍でございませから、弱い所を救ふのが役だ、夫を思ひ通り先陣の福島を出し抜いて第一番に戦さをして浮田勢を二丁ばかり追捲つたから先づ是れで宜い跡は福島へ押し附けて終へと手勢をキリ／＼と纏め



ると浮田の備へを右手に見なし關ヶ原の街道を一文字に押通り、街道を立て切つて備へをサツと立て直し、旗馬章を押立て合戦の模様を見物いたして、危うい方を救はんと控へて居ります、此方は福島左衛門大夫正則、直政の爲めに一番に戦を始められたので悉くの立腹鎧を踏ん張り、正「ヤア、者共、今日の戦ひ軍法も法令も構はぬ勝手次第に敵に掛れ」と大音揚げて呼ばれば元來聞えし福島の鬼武者前後の差別はございませぬ、眞先きに白地に山道段ダラの大旗、銀の芭蕉の馬章を押し樹て八千五百餘人大山の崩る、如き勢を現はし浮田の勢へ突いて掛る、浮田勢は井伊の横槍に旗本を痛められたる折柄でございませぬ、何となく色めき渡つて見えたる所、浮田の家來稻葉助之丞といふ者、眞先きに進んで福島の家來加藤宗四郎といふ者を一槍に馬から突いて落し、之に續いて浮田の家來成次郎兵衛、不破内匠、澤村小三郎等、稻葉助之丞と共に福島の陣中へ躍り込み、前後左右に敵を突いて落す其勢ひ凄まじく浮田の總軍二萬餘人、大波の岩に渡る如くに押し寄せました、福島の同勢は八千五百、同じく劣らず必死となつて之に當り、双方互ひに一寸も引くな引かじと挑み合ひ山道段々の旗、太鼓の丸の紋の旗、東西南北に入り違ひ、死を決して争ひまする中に、福島の家來福島丹波晴正突如に敵を一人突き伏せると、其首を取つて傍らの竹藪へ躍り込んで竹を三本切つて、眞中を縄で結び、之を開いて鼎足にいたし、其結び目の所へ討ち取つた首を載せ、之を軍中で結び竹の獄門といひ、残らず敵を討ち取つて此通りにいたすといふ所謂敵を調伏の形でございませぬ、さて浮田方は例の稻葉助之丞、成次郎兵衛、不破

内匠澤村小三郎の四人、槍先き鋭く福島勢を追ひ立てる、殊に大將秀家は馬上に伸び上り、采配を打振て進め掛けと烈しく下知をいたしまする浮田勢之に氣を得て總軍鋭く福島勢へ打て入る夫が爲に福島の同勢色めき渡つて見えたる時に一人の武者黒糸の鎧に同じ毛の兜を頂き、黄羅紗の陣羽織を投げ掛け葦毛の駒に打跨がり、薙刀を水車の如くに打振つて忽ち敵七八人を薙ぎ倒し十四五名に手を負せましたる事にて轟ろき渡る大音揚げ、「斯く申す某は藤野又八正利と申す者、我と思はん者は來つて尋常の勝負に及べ」と呼はつたる時にドーンと一發飛び來つた一發の彈丸眞額を打抜いたれば流石の又八も急所の傷手に堪り得ず、馬より眞逆さまに落ちて其儘戦死を遂げました、之が爲に福島勢に於ては又々色めき渡つて見えたる時に備前守秀家、此圖を抜かさず追ッ立てろ、といふ下知に従ひ、淺香三左衛門、成次郎兵衛、不破内匠、餌飼甚四郎、澤村小三郎、稻葉助之丞の六名の勇士、立ち列んで槍を入れました、福島正則之を見ると齒齧みをなして、「正「ヤア、言ひ甲斐なき味方の舉動かな、又八の弔戦をいたせ、汝等盛り返して又八の吊戦をいたせ」と身を揉んで下知を致するから、小關石見、長尾隼人、大橋茂右衛門、大崎立番、澁江法齋の五勇士、敵より打出す三百挺の鐵砲の彈煙りの晴れ間より一聲に突いて出でた、之に由つて秀家の旗本後陣の方へ崩れ立つたが浮田勢は二萬の大軍、僅か八千の福島の同勢を取圍んで烈しく鐵砲で打拂へば流石の福島勢は頗る苦戦に陥りました、此福島と浮田の戦は長篇講談天下茶屋に悉しく出て居りますからこゝには略しまして夫れより小西攝津守と黒田甲斐守の接戦、其れ



につきました。島左近父子と藤堂加藤の血戦石田三成の乗出しなど随分長う御座います。是も矢張り天下茶屋の方に悉しく出て居り其上太閤記の島左近の傳にも出て居ります。又忍術の勇士にもありまして重復も如何と思ひ略しますが兎に角此關ヶ原の戦は金吾中納言の裏切から關西方大敗して遂に徳川方の勝利となり、關ヶ原の一戦に天下は殆んど徳川の物と相成りました。功あるを賞し罪あるは罰し、毛利輝元の山陰山陽六國は取上げられて、周防長門の二國となり、秀頼卿の領地を攝、河、泉三ヶ國と定められ、長曾我部は一文なしの庶人にされました。前席で申上た通り、上杉景勝は百三十萬石を取上られて、米澤で三十萬石、之は後に十五萬石に又減らされた、佐竹義宣は常陸の八十萬石を沒收されて秋田で二十萬石を賜はるといふ大斧鉞、浮田秀家は備前、美作、備中皆取上げられて八丈島に流罪となり、豊臣恩顧の大小名荒方此時處分濟となり残つたものは加藤清正、黒田長政、福島正則、加藤嘉明、島津義弘、前田利長、細川忠興、淺野長政、池田輝政、片桐且元位なもので、中にも島津義弘は關ヶ原の軍で大に徳川方を惱ましめたが何の咎めも受けなかつた、其外荷くも西軍に關係を持つて居たものは皆處分された、一種のクーデターで、これ、真山クーデターといふのはそんなものとは違ふ、知つた振りに生意氣をいふ、ななんてお叱を蒙るといけませんから之は取消しました、こゝで佐竹の家では車丹波守の謀反となり、其次が江戸城の普請、之は諸侯を貧乏にするといふ計略で大普請がはじまる、夫れから諸侯の參觀交代といふことを江戸にはじめて大阪の勢力を殺ぎ、諸侯の家族を江戸に置かせ

るといふのは人質兼帯の巧妙手段、慶長十三年には秀忠の息女千姫を秀頼の嫁にするといふ、此時分には江戸は將軍秀忠の管する所で、家康公は駿州久能に隠居して大御所と云れる、併し此隠居が中々隠れ居らんでいたつら計りする、約束の秀頼十五歳になれば天下を返すといふのさへ猫ば、で、天下の代りに千姫をくれる、内大臣に奏請する、併しそんな事で大阪が黙つて居る譯がない、中にも加藤清正が極力家康に迫るなど、形勢が大分不穩になつて來た、こゝで有名な死間の謀計といふのを行つて、加藤、池田、片桐、淺野の四人に毒饅頭を食はせたが、片桐丈々は食はずに逃れた、加藤、池田、淺野など骨つばい所がバタ／＼死んで、愈々徳川家は大盤石、茲で大阪の金を使はせなければならぬといふので、大佛再建、此謀計がうまく行つて片桐の退身大阪の旗揚げから夏、冬兩度の大戰争を経て、元和元年全く四海を一手に握つて了つた、此邊のお話は皆天下茶屋、加藤清正、忍術勇士、大久保彦左衛門等に委細述べてありますし、又大阪兩度の戦は後に出版致しまする眞田幸村に申述べる事に相成つて居りますから、こゝでは申上げぬことに致し三代將軍家光の竹千代と、駿河大納言忠長との家督争ひといふ徳川家の大事件を取鎮められて後、流石精力絶倫の大御所公もすつかり疲れが出たものと見え元和四年には病氣御重態といふことになつた、之が三月二十日で此少し前に例のお氣に入りの茶屋四郎次が御機嫌伺ひに出で四方山の噂を申上げ、近頃斯様なものが流行致しますと自慢だら／＼で、興津鯛に鰻鮓の衣を着せて油で揚げたものを差上げる、まだ此時分には天麩羅とはいはなかつた。家、これは誠



に珍らしいものである、風味もよろしい」と舌鼓を打つて召上りました、これから下痢が始まつたといふこと、少し下司張つた様なお話ですが、貴人高位の方は時折召上りものではやり損ひをなさることがあります、何に致せ七十五といふ高齡、典藥頭長谷川施藥院が「御重態」といつて首を傾けた、サア大變と近習の者が此儀江戸表へ御届け申上げなければならんといふのを、家康公「家」イヤ其儀は無用である、將軍は孝心厚く在する故予の病重しとお聞きあれば早々此駿府へ參られるであらう、夫れが爲めに天下の政治を怠つてはならん、捨置け捨置け」といふ仰せ、けれども餘の事と違ふゆる、内々にて御老中まで御病氣のお届けを致す事になつた、それで二代公も左までの御重態とは思召さなかつた、然るに茲に入間郡川越三芳野の里、喜多院にお在での南光坊天海僧正、後慈眼大師と云ふお方或る日お居間の内にあつてトロ／＼と坐睡みますると、「天海坊、天海御坊」といふ聲、眼を開いて見ると家康公夫れにお在なされる、天海大きに驚いて、天「是は如何なされて此の所へお出遊はしましたか」家「イヤ今しも予の病ひ危篤なり、かね／＼御坊の教へに依り、日に千遍の念佛を唱へ居る、併し天下泰平を願ふ爲といひながら、是まで多くの人命を斷ち罪を深く造りたり、此の家康此儘安養淨土へ赴かれるものか、又は赴かれぬものか此儀安心ならんに依つて、臨終に及び御坊の教へを受けたいと思ふ、願くば安養淨土へ導かれよ」天海此時に目に角立つて、天「恐れながら君は何故に安養淨土へ赴かれんとされる御成佛は然るべからず」家「然れば今申す通り天下の爲めと云ひながら戰場に敵味方の命を殞したれば最後に及

んで成佛はなり難いのか」天「イヤ／＼決して左にあらず、戰場に人の命を殞させ給ふも是天下泰平の爲め即ち小の蟲を殺して大の蟲を助けるの道理、敢て安養淨土へ赴かれざる次第には之れなきも何とぞ其の儀御無用に願ひ奉つりたく、今天下泰平になりたりといへども未だ豊臣の餘類多く残り居れば何日何時如何なる事の起らんも計り難し、假令世を去り給ふとも魂此の土に留まり、御子孫の守り神となり給ひ、御代泰平を御計り下されたうございます」家「御坊の教へ誠に宜い、然れども我れ一朝眼を眠りたる後は





御坊宜しく政治にお心附け下さるやう」天「ハツ委細承知仕つた」と御受を致します途端に眼が覺めた、四邊を見廻した天海僧正、悉く着を取つて夢占を行ひ、之は大變と平生物に動せぬお方であるが急にあはたしく、天「コレヨ馬の仕度致せ」夜中火急のお申附け故寺男小坊主など吃驚して居る、天「コレヨリ江戸表に參る」と云ひ捨て、馬に打乗りタツタツと走らせたなにしる馬は達者で御座います、大阪御陣の時乗馬で戰場を乗廻した坊さんだ、息をもつかず乗りたて、江戸城京極御門に乗り付け下馬を致してホツと一息、餘程急いだものと見える、御門番に馬を預けて早々登城をなされ二代將軍家へお目通りをなされて駿府大御所公の御様子伺ひ又夢のお物語りを申し上げる、秀忠公も開し召されて、秀「御病氣の儀は承知いたして居つたが夫れほどの事とは存せん」天「ハア御病氣お届けがございましたか、然れば正夢でございませう、愚僧之より早々罷り越しまするが何を申すにも此の姿では目に立ちますゆゑ野服拜領仰せ付けられたい」上様へ野服拜領を願つて、法衣の上へ投げ掛け川越から飛ばした自分の馬は勞れて居るから厩の馬を引出させて之に打乗りまして、早速暇を願つて駿府へお乗込みにならうと云ふので品川までお出になりました、此時に後から、「オーイ、御坊、暫時待ち給へ」と云ふ聲、天海振返つて見ると名代の大久保彦左衛門、彦「御坊駿府へ御出と云ふ事を承はり御跡を慕うて罷り替した」天「イヤ御同道いたさう」と云ふので天海と彦左衛門馬を揃へて駿府城へ乗込むと云ふ、さて二代將軍家は俄かに御沙汰になり、十有餘名のお供方を引連れて御出立になりました、然るに函嶺

山へお掛りになると、バラ／＼大勢の者が夫れへ出て、馬の口をお取り申上げまして、各々お手當を申上げ、尙お乗替を引き來つて奉るから二代公お不思議に思召されまするゆゑに、函嶺の御番所に於て御休息の時に尋ねになると、之は彦左衛門がもう先へ乗込んで行く途中本家であるから小田原の大久保加賀守の家來が出張をいたして居りまして斯様々々にて之れを勤めると云ふ上様も悉く其氣轉をお喜びに相成り少しもお差支へなく又々馬を急がして此所を御出立に相成りました、扱駿府の大御所公は御重態にて本多佐渡守を召されまして、家「ア、コリヤ佐渡、予が歿き後に天下を騒がせる者が二名ほどあるが其方は何者と思ひ居るか」彦「お尋ね故申上げまするが先づ一人は福島正則、今一人は恐れながら伴上野介かと存じまする」ハタと膝をお打ち遊ばし家「ア、能う心付いた、如何にも其通りぢや能う其事を其方より伴秀忠に申して呉れるやう」イヤ何うも神祖の先見明らかでございませうが、然し佐渡守も福島は兎もあれ今一人は己れの伴だとは能く心附いたものでございまして流石は疊の上の孔明と云はれ家康公の懐刀と云はれた位な佐渡守正信でございませう、上野介については一寸お話があります、忍といふ字に二た通りの意味があります、一つは忍耐の忍で、之は人間になくならない美點で何事も忍耐辛棒といふことがなければ遂げられませんが、今一つは惨忍の忍で之は大變だ、人間惨忍の性を持つて居たならば親兄弟一家親類朋友君臣一國は元より天下にどんな惨害を興へるか計られない、二代公が仲仙道で眞田幸村に喰止められ關ヶ原の戦に合はなかつた時、家公康非常の御立腹で對面せぬとい



ふ仰せ、之は下さまでいふ勘當で御座います、二代公既に進退谷まつて御自害に及ばんといふ折本多上野介秀忠公の御前に出まして今日の事御後見として罷り向ひました拙者の父佐渡正信の手落で御座います、されば手前父に切腹を致させ拙者其首を持参して大御所にお詫を致しませうと申上げた、此時秀忠公上野介の忠誠を感じられたといふ話、是を承つて佐渡守舌を巻いて驚いた、この忤悪くすると俺の首を何時でもチヨン斬るつもりと見えると呆れた、これ上野介に憐愍の性ある所で佐渡が此奴は大變な奴だと思ひました、夫れからだん／＼氣を付けて見るどうも穩かならん人物と見切りましたから自分の子ながら末が恐ろしい、そこで大御所のお尋ねに對しても腹藏なく申上げた、然るに大御所も此上野介は容易ならぬ奴といふお見込、こゝで符節を合せるといふことになつたが、果せるから後年宇都宮騒動を起しました、これは後のお話、夫れは扱置きまして大久保彦左衛門お目通りを願ふとある、大御所公聞し召されてヤレ嬉しやと思召され家「早々彦左衛門之れへと申せ」彦左衛門袴の紐を締め直しまして御前へ罷り出ると夫れと御覽遊ばして、家「オ彦左衛門」彦左衛門恐る／＼顔を上げて御尊顔を拜見すると開關以來有數の豪傑百年來亂れに亂れた日本を泰平に治め給ひし御方も病の爲めに御顔の色も青褪め眼肉も陥凹み頬骨高く現はれ陽炎の夕待つ間の御様子、流石に剛氣の彦左衛門も、彦「御心地は如何にございませるか」と聲も微かに跡は涙、所へ南光坊天海御前へ罷り出でる、家康公夫れを御覽遊ばして、家「オ、御坊能く見えた、過日は夢中にて教へに預り過分に存する」天海之れを承つてオ、扱

正夢であつたかと驚きました、天「ハ、ツ」といつた許り、流石の坊さんも奇異の感に打たれて居る、所へ二代將軍がお入りになる、家康公愈々お喜びになつて、家「イヤ逢ひたう思ふた人々が皆一時に揃ふて満足である、予の臨終も近きにあるに依り、夫れ／＼申残したいと思ふ」と仰せられ、息づかひも餘程御困難の様子、秀忠公は孝心深いお方でありませうから、忽ち涙をハラ／＼と流されながら、御近習を見廻はされ、秀「斯程の御重體を御故早く予に知らせぬ、不埒至極」とお叱りになる、一同恐れ入つて何と申上げやうもない、家「イヤ／＼夫れは予が堅く差止めたのであるから、逢ひたうは存すれども、天下の政治には替られぬに依つて、予が許さなかつたのであるから近臣をお叱りは御無用……ア、併し將軍に對面して此上の喜びはない、誰なりと筆を持って……」佐「ハッ」と答へて本多佐渡守正信が筆を取り上げ、大御所のお言葉の通り一々書き記しました之れが御條目百箇條と云ひ、徳川家の御法となつた、法は天下に尋ねよ、政治は彦左衛門に訊せと云ふ御説、是から色々ありますが、くだ／＼しくなりますから、大略致します、扱大御所公は御年七十五歳にて遂々御他界となりました、元和二年四月十七日、安國院殿徳蓮社崇譽道和大居士、久能山に葬り大權現と號し、後に野州日光山に御改葬になりました。



長篇講談  
德川家康 終

大正九年四月十日發行  
大正九年四月十日發行

印刷行

長篇講談 第五十編  
德川家康

不許  
複製

編者

今村次郎

發行者

株式會社 博文館

印刷者

大橋進一

印刷所

株式會社 吉岡泰次郎

印刷所

株式會社 博文館印刷所

發行所

東京市日本橋區  
本石町三丁目

株式會社 博文館

振替貯金口座東京二四〇番

（正價五拾八錢）



家庭團樂の好讀物 — 講演者は當代の名人



- |      |           |        |        |          |        |        |       |
|------|-----------|--------|--------|----------|--------|--------|-------|
| 8    | 7         | 6      | 5      | 4        | 3      | 2      | 1     |
| 由井正雪 | 文佐村天佐怪伊笹岩 | 井倉宗長   | 賀社一の丹燈 | 達騷動      | 野見名武槍勇 | 赤穂義士   | 木下藤吉郎 |
| 30   | 29        | 28     | 27     | 26       | 25     | 24     | 23    |
| 柳川庄八 | 柳生旅日記     | 小金井小次郎 | 寛永三馬術  | 淺香忍術の勇士  | 甲賀     | 榛名の梅ヶ香 | 山中鹿之助 |
| 50   | 49        | 48     | 47     | 46       | 45     |        |       |
| 徳川家康 | 天下無雙 猿飛佐助 | 仙石騷動   | 古市十人斬  | 因幡果羽小の町瀧 | 祐天吉松   |        |       |

町石本 館文博 會株式 京東

- |         |      |      |      |        |     |         |      |       |       |       |        |        |          |
|---------|------|------|------|--------|-----|---------|------|-------|-------|-------|--------|--------|----------|
| 22      | 21   | 20   | 19   | 18     | 17  | 16      | 15   | 14    | 13    | 12    | 11     | 10     | 9        |
| 森一休文禪覺師 | 豐原秀吉 | 鹽原多助 | 國定忠次 | 石川五右衛門 | 自川來 | 水戸黃門漫遊記 | 加藤清正 | 復天下茶屋 | 相馬誠忠錄 | 羽柴筑前守 | 幡隨院長兵衛 | 荒木又右衛門 | 紀伊國屋文左衛門 |

- |       |       |       |       |     |       |        |      |      |      |        |       |     |       |
|-------|-------|-------|-------|-----|-------|--------|------|------|------|--------|-------|-----|-------|
| 44    | 43    | 42    | 41    | 40  | 39    | 38     | 37   | 36   | 35   | 34     | 33    | 32  | 31    |
| 旗本五人男 | 日本左衛門 | 三家三勇士 | 野晒勘三郎 | 日蓮記 | 田宮坊太郎 | 雷電爲右衛門 | 加賀騷動 | 太賀騷閣 | 塚原卜傳 | 鼠小僧次郎吉 | 堀部安兵衛 | 糸平内 | 關東七人男 |

● 毛谷村六助  
● 鈴木主水  
● 山本勘助  
● 四谷荷利生記  
● 戸田新八郎

以下續々刊行

● 四六判美裝五百餘頁  
● 新鑄活字總振假名附  
● 麗麗極彩色口繪二葉  
● 精巧密畫八十個挿入

● 正價各五十八錢  
● 送料各六錢







繪本神史小説

容易に手に  
入れ難い珍  
本奇著が僅  
かのお金で  
讀まれる！  
吾邦古來著作せられたる神  
史小説の類汗牛充棟も香な  
らす、妙趣奇想に富めるも  
の亦妙からず、然して現  
今讀書界の趨勢は、漸く新  
しきものに倦きて、徳川時  
代の古きを逐はんとするの  
傾向あり、神史小説は、こ

第一集 繪本三國妖婦傳……十九版

第二集 道成寺鐘魔記、お六櫛木曾仇討、着替浴衣園七編、高尾丸劍稻妻、女船頭矢口渡場、復讐奇談ふた子山、洗染劇模、驛路鈴與作春駒……十七版

第三集 松風村雨物語、繪本在原草紙……十二版

第四集 復讐奇談小夜中山、入巖倭取楯、關東小六昔舞臺、開道女自來也、蛸蛇お長燵双紙、播州皿屋敷物語、重扇五十三驛、柳糸花組交、鶯娘の來由……八版

の要求を充さん爲に外なら  
ず、集むる所は馬琴種彦京  
傳蘭山等が賞録體小説、春  
水金水曲山人等が人情小説  
一九三馬鯉丈等が滑稽小説  
中の傑出したるものを抜き  
一集中に二三種乃至十種を  
收む。淺膚なる現代小説に  
あき足らぬ人々に薦む。

第五集 總彙 猿華物語……七版

第六集 花曆八笑人、嘘話の、身稽邯鄲、吹色、腹佳話、滑稽邯鄲、枕、賣色安本丹……七版

第七集 修紫田舎源氏(前卷)……六版  
第八集 修紫田舎源氏(後卷)……六版

第九集 飛驒匠摘花語……五版

第十集 閑情水奇緣……五版

第十一集 笠松峠鬼神敵討……六版  
小幡怪異雨古沼……六版  
明烏後正夢……六版

四六判和裝美本  
紙數各約四百五十頁  
口繪二葉乃至十數葉  
挿畫九十個乃至百卅個  
正價各册  
金五拾八錢  
郵稅各六錢



## 新・伴侶の友臥旅羈

田山花袋氏著

### 日本一周

全三冊 三六判  
 總布製函入  
 各金二圓八拾錢  
 郵稅各拾貳錢

紀行でなく小説でなく地理書でなく案内記でない而も紀行たり小説家たり案内家たる著者の新に試みた藝術的作品である。

田山花袋氏著

### 旅

全一冊 三六判  
 總布製函入  
 正價一圓八拾錢  
 郵稅八錢

道中實記の現代式なもので是れさへあれば全國を最も面白く旅が出来る。

田山花袋氏著

### 一日の行樂

全一冊 三六判  
 總布製函入  
 正價一圓八拾錢  
 郵稅八錢

東京を中心として旅をしやうと思ふ人々の東道である總てが著者の實地を踏んだ報告坐るに行遊をそゝるものがある。

田山花袋氏著

### 温泉めぐり

全一冊 袖珍函入  
 正價一圓四拾錢  
 郵稅六錢

温泉を中心とした景勝名跡を著者一流の描寫振りを發揮したものである温泉案内として一讀の價値がある。

文學博士大類 伸氏著

### 史蹟めぐり

全一冊 袖珍函入  
 正價一圓四拾錢  
 郵稅六錢

古城に舊蹟に神社佛閣に傳説俚俗に古を偲び今を思つて綴つた感想である勝地に遊び歴史に興味を有つ人々に薦むる。

笹川臨風氏著

### 趣味の旅 古跡めぐり

全一冊 袖珍函入  
 正價一圓四拾錢  
 郵稅六錢

忽ち史蹟忽ち文藝、史論となり所感となり山水を説き風物を詠す羈旅臥遊の好伴侶

## 書内案所名の式形

田中阿歌麿氏著

### 湖沼めぐり

全一冊 袖珍函入  
 正價一圓四拾錢  
 郵稅六錢

湖沼の風致を説く傍ら湖沼學より見た科學的觀察を叙したもので湖沼研究資料ばかりでなく好個の旅行案内書である。

大町桂月氏著

### 山水めぐり

全一冊 袖珍函入  
 正價一圓四拾錢  
 郵稅六錢

山水を愛する事著者の如く甚しきもの妙く山水を描いて其靈妙を語るもの著者の如きは稀である本書は氏が會遊の名山勝水を傳へて精緻なるもの。

文學博士佐々木信綱氏著

### 和歌名所めぐり

全一冊 袖珍函入  
 正價一圓四拾錢  
 郵稅六錢

古人今人の作を汽車の沿線航路の順次に編して説明を加へたもの居ながらにして名所を知る事が出来る。

谷口梨花氏著 (上巻東北部 下巻西南部)

### 汽車の窓から

全二冊 三六判  
 總布製函入  
 各壹圓八拾錢  
 郵稅各八錢

汽車の窓から觀望される範圍の山川寺社何の山となく河となく指點説明した新體型を開ける案内書である。

田山花袋氏著

### 山水處々

全一冊 袖珍函入  
 正價壹圓六拾錢  
 郵稅八錢

北浦を下る、狹鼻溪を見る外氏の作十三篇を集めたもので枕頭の友として羈旅の伴侶として好適の書である。

横井春野氏著

### 富士と日本アルプス

全一冊 三六判  
 正價六拾五錢  
 郵稅六錢

地理を説き文藝を叙し動植物を説き登山の準備、方法など委しく書いてある。

發行所 株式博文館



故長谷川四迷氏著

坪内逍遙氏  
内田魯庵氏

共編

(發行所)

株式會社  
博文館

更紗模様裝幀高美

三六判全三冊三卷函入

每卷正價金貳圓四拾錢

郵稅各冊金拾貳錢

縮刷 一葉亭全集

第一卷 うき雲。其面影。平凡

第二卷 あひびき。めぐりあひ。くされ縁  
うき草。片戀。夢がたり。猶太人

第三卷 ゴーゴリ。ゴリキ。ガルシン。  
アンドレエフ。ポタアペンコ

永遠に新らしい二葉亭全集は全く改装改版して愈々益々新らしい生氣を漲らして居ます。

第一卷は創作三篇を收め、第二卷はツルゲーネフの翻譯、第三卷は爾餘の大部分を集む。咸なこれ會心の作、若し夫れ翻譯の眞、措辭の妙に至つては洵に天下の至寶なり。



終

